

人の生き方に学び，自ら社会事象に
かかわろうとする子どもを育てる社会科学習

—第6学年の4実践を通して—

Learning Social to Grow up The Children Trying to Take A Connection of
Social Phenomenon By Theirselves According to Learn Man's Life.

—Through four Reports of The Six Grade—

Okada Yasutaka

お茶の水女子大学附属小学校

岡 田 泰 孝

I はじめに

- 1 研究主題設定の理由
- 2 「社会事象にかかわろうとする」とは
- 3 「人の生き方」を題材にした最近の研究の動向
- 4 本稿の課題

II 研究の構想

- 1 研究の仮説
- 2 研究の内容
- 3 研究のねらい
- 4 研究構想図

III 第6学年の社会科年間学習計画について

IV 実践事例1 「江戸時代の人々の楽しみ」の概要

V 実践事例2 「明治の新しい世の中をつくった人々

—大久保利通と西郷隆盛—」の概要

VI 実践事例3 「日本と朝鮮半島の交流の歴史」の概要

VII 実践事例4 「日本に一番近い国 大韓民国」の概要

VIII 成果と課題

補註

I はじめに

1 研究主題設定の理由

人の生き方に学び、自ら社会事象にかかわろうとする子どもを育てる社会科学習

近年、自己中心的な子どもや、他者とかがかわることが苦手な子どもが増えていると言われている。「むかつく」、「キレル」といった言葉に代表されるように、自分の思いがうまく表現できず、他者と関われない子どもや、または、自分の思いがうまく表現できないもどかしさやストレスを上手に発散することができない子どもが増加しているのである。

本校もその例外ではない。高学年になればなるほど、進学塾通いも熾烈さを増し、自分のことで精一杯、友達のことなど考えているゆとりはないという児童は少しずつであるが増え続けている。

このような子どもたちの実態を目のあたりにしていると、まず、子どもにとって一番身近な社会である学級や学校の友達とお互いにかかわり合うことをとおして、社会事象にかかわっていかうとする意識や態度を培っていくことは、教育現場が抱える極めて今日的な課題と考える。

子どもたちと日々過ごしていく中で、友達や他者、社会事象に進んでかかわり、共によりよく生きよう、よりよい社会を築いていかうする意識や意思をもつ子どもを育てたいと考えた。そこで、「自ら社会事象にかかわろうとする子どもを育てる」ことをねらいとして、社会科の授業実践に取り組むことにした(註-1)。

2 「社会事象にかかわろうとする」とは、どのような姿か(註-2)

社会科の学習を通してという限定があるが、「社会事象にかかわろうとする」子どもの姿には、ほぼ以下のような、いくつかの段階が考えられる。

- (1) 学習材などの資料から見える範囲で「社会事象にかかわろうとする」段階。言い換えれば「不思議だな」、「もっと知りたいな」という段階。
- (2) 課題を解決する調査の段階で、教室から飛び出し地域社会で学習活動を展開して、「社会事象にかかわろうとする」段階。この段階を単に学習方法の側面からとらえるのではなく、積極的に、子どもが社会にかかわっている姿として考えていきたい。
- (3) 友達と共に学ぶこと自体が、「社会事象にかかわろうとする」第一歩としてとらえ、子ども相互の学び合いを取り入れた学習活動を展開する。
- (4) 自分を取り巻く「社会事象にかかわろうとする」態度を涵養し、意識化を図る契機ととらえる段階。以下のような子どもの姿が考えられる。
 - ・自分の生活を見つめ直す。
 - ・社会を見る目が育つ。
 - ・自分なりの合理的な意思決定をしようとする。
 - ・社会をよりよくしようという自覚をもとうとする。
 - ・社会の一員であるという自覚をもとうとする。
 - ・自分なりの方法で社会に参加しようとする。

では、子どもが、「自ら社会事象にかかわろうとする」ためには、どのような学習材で学ぶことが効果的なのだろうか。筆者は、社会事象にかかわる子どもを育てるためのキーは、「人の生き方」を題材にした学習材の開発だと考えてきた。

そこで、社会事象にかかわろうとする子どもを育てるための「人の生き方」のとりあげられかたについて、どのような先行研究が行われてきたのかを簡単に、記したい。

3 「人の生き方」を題材にした最近の研究の動向

北俊夫氏は、「社会科で子どもの『生き方』が問われる背景」を、

- ①知識・技能偏重への反省
- ②新しい学力観に立つ教育の推進
- ③生活科との関連
- ④環境教育・国際理解教育などのかかわり
- ⑤道徳教育との関連

と、いう5つの観点で整理している(註-3)。それらの根底に共通していることは、これからの学校教育に求められているものは、学校で学ぶだけでなく一人の人間として、自分の問題意識や興味・関心に基づいて生涯にわたって学び続ける力—いわゆる自己学習力—の基礎を育てることであり、この自己教育力こそ、自ら問題解決しながら生きていくために必要とされる力であり、ここでは「生き方」そのものが問われるという。

では、社会科研究のなかで、「人の生き方」はどのように問題にされているのであろうか。最近の研究の動向を簡単に整理してみた。

(1) 平成6年第30回全国社会科研究大会—徳島大会(小学校部会)—と北俊夫氏の主張(註-4)

同大会は、「人間の生き方を追求する社会科学学習—主体的に社会的事象にかかわり、自己を表現し合うことのできる児童の育成—」を主題にしていた。

研究の重点は、以下の2点である。北氏の紹介によれば、次のようになる。

①「教材の中に登場する人間の生き方を追求する側面」

子どもたちが、学習対象とする社会的事象(人間の営み)を支えるもの、また、その中核を成すものとして、人間の生き方が存在すると考える。具体的には人間の生き方を、人間が思いや願い、意図に基づいて、さまざまな知恵を出し合ったり考えたりすることを通して社会に働きかける行為行動を決定するものととらえる。

②「学習者の生き方を追求する側面」

子どもたちが、社会的事象・学習の仕方・共に学ぶ人たち・地域などと積極的にかかわる社会科学学習を通し、——中略——人としての生き方を学び、心豊かな人間として成長して欲しいと願う。

加えて、北氏は次のように述べている。

かつて、社会科において『人間化』(ヒューマナイジング)ということが言われたことがある。わたくしは、『社会科の人間化』を、教材に人間の営みを登場させる視点(学習内容の人間化)と、学習者である子どもの主体性を尊重する視点(学習方法の人間化)という、二つの視点から実践を試みたことがある。

ここでは、内容面での「人間の営み」と、方法面での「子どもの主体性を尊重」という点に強調点がおかれている。

北氏の実践がどのようなものかは、この記述からだけでは十分には分からないが、「人間の生き方」や「人間の営み」に重点をおいて、教材化しようとする試みは、古くて新しい問題と言えるのである。

(2) 藤井千春氏—「人の生き方」の教材化—

第30回全国社会科研究大会—徳島大会(小学校部会)—や北氏と、同様な問題意識をもって提案している研究者に藤井千春氏があげられる。藤井氏は「人の生き方」と関連して次のように述べている(註-5)。

社会科の学習活動で「生きる力」を育てるためには、「・・・端的に言えば、教材の中心には、社会生活における仕組みや事象ではなく、具体的な『人の生き方』を据えることが必要であり、

「社会生活において、自分なりの『志』を持ち、その実現に向けて誠実に働いている人の『生き方』を教材とする」ことが大切であり、「具体的な『人の生き方』を教材として、社会生活において働くことの意味について、子どもたちなりに考えさせることが」、「社会生活における様々な仕組みや事象が、人の『生きることとのつながり』において、意味をもつものとして見えてくる」

藤井氏の主張で重要な点は、「社会生活における様々な仕組みや事象が、人の『生きることとのつながり』において、意味をもつものとして見えてくる」という点に集約されるととらえた。

ここには、単に人や人物の生き方だけに重点を置きすぎる「態度主義社会科」とか「道徳社会科」と批判を受けかねない社会科とは一線を引こうとしている意図が感じられる。

社会科がねらいとしている「社会生活についての理解を図（学習指導路要領）」ることを、単に「社会生活における様々な仕組みや事象」の理解にすることなく、人の『生きること』とのつながり、つまり、「人の生き方」へつなげて考えることをねらいとしている点が、重要である。

このことは、今までの社会科にありがちであった、社会の仕組みや構造の理解を重点にした学習材開発や指導計画への、藤井氏の批判であると考えると共に、単に急性な「態度主義社会科」とも違った視点を与えてくれる。これからの社会科が目指すべき姿の指標となりうるのではないであろうか。

この、「誠実に働いている人の『生き方』を教材とする」ことへ、正面から取り組んだのが次の社会科教育連盟の取り組みである。

(3) 社会科教育連盟平成10年度の研究

—研究主題「共に学び、共に生きる子どもが育つ社会科学習」—（註-6）

社会科教育連盟では、平成10年度から、「共に学び、共に生きる子どもが育つ社会科学習」という研究主題のもと、実践を進めている。

研究部長の梶井貢氏は、次のように述べている（註-7）。

従来からもよく言われている教材・学習材の人間化である（下線は筆者による）。教材・学習材に、「営々と仕事に打ち込む人」「たくましく生き抜く人」「信念をもって産業に携わる人（個や集団）」「歴史を切り開いてきた人」を登場させることである。

子どもが、これらの人々を学ぶことによって、生きることによって、生きることへの喜び、期待、勇気などを持てるような教材開発に努めることが肝要である。具体的には、コミュニティーティーチャー、ゲストティーチャーなどを積極的に導入することも考えられる。

前述の北俊夫氏の「『社会科の人間化』を、教材に人間の営みを登場させる視点（学習内容の人間化）」にも通じる考え方で、学習材を構成しようとする意図が読みとれる。（註-8）。しかも、この研究の注目すべき点は、単に教材の「開発」だけでなく、「活用」を視野に入れていることである。つまり、教材というのは、教材だけが単体で「在る」のではなく、学習問題や学習活動などの「活用」面を忘れては、児童が学ぶ「学習材」としての真価を発揮できないことを断言している点である。例としてあげられている、「コミュニティーティーチャー、ゲストティーチャーなどを積極的に導入することも考えられる」という文言はまさにそのことを語っている。つまり、北俊夫氏がいう、「学習内容の人間化」と、「学習方法の人間化」という二つの視点を実践的に統合しようという試みと考える。

4 本稿の課題

以上、学ぶべき先行研究として4事例を簡単にまとめてきた。本稿では、社会事象にかかわろうとする児童を育てるための手だてとして、

(1) 社会事象にかかわろうとする意識をもてるような、「人の生き方」を題材とした教材・学習材の開発

(2) 学習者が自らの「生き方」を探ることができるような、学習方法のあり方の開発。つまり、社会事象にかかわろうとする子どもが育つような学習方法の開発、学習材の活用のあり方の追求

などが課題となる。この2点は研究主題に迫るための両輪である。

できれば、復数学年の実践をもとに考察するのが望ましいが、筆者一人には荷が重い。そこで今回は次のように課題を限定していきたい。

- ①今回は、担任をしている6年生の事例に限定して実践を行いたい。当然、「小学五年生の産業学習についても、我が国の産業についての仕組みや事象を教材とした学習から、産業に携わる『人の生き方』を中心とした学習へ転換することが必要である。仕組みや事象は『生き方』とのかかわりにおいて学習させるのである」(註-9)という提案には、次回5年生の担任をしたときの課題となるのは、いうまでもない。
- ②授業に関するできるだけ詳細な記録を残しておくことを課題としたい。様々な教材研究や教材開発をおこなっても、授業が終わると子どもの学習シートやノートのコピーは手許にたくさん残っているが、それっきり。最後は、それらの記録も散逸していくということがよくある。また6年生を担当したときのヒントになることがらを記録として、蓄積していきたい。

Ⅱ 研究の構想

ここでは、研究の仮説・内容・ねらいについて述べる。

1 研究の仮説

「人の生き方」を学ぶことを通して、「自ら社会事象にかかわろうとする」態度を養っていくことができる。
子ども一人一人の問いや学習の仕方を大切にする学習を保障し、自分の学びのスタイルを確立しながら、友達と学び合うことによって、「自ら社会事象にかかわろうとする」態度を養っていくことができる。

以上のように、「学習材の開発」と「自分の学びのスタイルの確立」の両面から、子どもの学習を構成することによって、「自ら社会事象にかかわる子どもを育てる」ことができると考え、次のように研究の内容を構成した。

2 研究の内容

(1) 人の生き方に学び、自ら社会事象にかかわろうとする子どもを育てる学習材の開発

社会科の学習の成否は、学習材が鍵といわれている。近年、社会科研究の重点が、複線型の学習や、支援と評価のあり方など、指導法が主になっている傾向が強い。学習方法や学習問題の側面からも、「人の生き方に学び、自ら社会事象にかかわろうとする子どもを育てる社会科学習」のあり方を追求することは可能であるが、今までの、学習方法に偏った研究の体質から脱却するためにも、ここで敢えて学習材の開発を全面に出すこと自体に意味がある。故に、学習材の開発を研究の重点として、研究主題に迫りたいと考える。

では、研究主題「人の生き方に学び、自ら社会事象にかかわろうとする子どもを育てる」ためには、どのような観点から、学習材の開発を行えばよいのかを検討したい。

ここでは、仮説的に、以下の2観点から学習材の開発を行うことにしてみた。

①人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材

今までの社会科学習材の開発を振り返ると、社会の仕組みや構造の理解を重点にした学習材開発や指導計画の作成に力を注いできたという反省がある。

これからは、子どもたちが社会科を学ぶことによって、

生きることへの期待・勇気・喜び・未来への期待感や自ら社会に貢献したいという気持ち

になることができる学習材を開発することが、重要と考える。

そのためには、

- 社会でよりよく生きようとしている人々や社会に奉仕・貢献している人々
- 自分の仕事に熱心に取り組んでいる人々
- 新しい時代・歴史を切り開いてきた人々

などを意識的に学習材化し、それらの人々の懸命に生きる姿を学ぶことを通して、社会生活を営み、築き上げる人間の生き方や、人間の働きについて、自分なりの考えをもって自分自身の生活や生き方を見つめ直すことができるようにしていきたい。

このような観点からの学習材を、

「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」

と呼びたい。

次に、「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」とは、どのような学習材なのか、仮に、次のような定義づけてみた。

- ①人間の生き方（思い・願い）が見える学習材
- ②人間の働きが見える学習材
- ③人と人とのかかわりが見える学習材
- ④社会の一員であることを自覚させる学習材
- ⑤自分の生活を見つめ直そうとすることができる学習材

これらの定義については、実践をしながら、さらに修正を加えていきたい。

- ②子ども相互の学びあい deepening なかで、自分なりの意思決定ができる学習材

「社会事象にかかわろうとする子どもを育てる」ことを、ねらいにしているのだから、学習問題に対して、自分なりの意思決定ができることが望ましい。現代社会は、価値観は多様化し、自分なりの意思決定をすることは簡単なことではない。食料自給推進派か輸入促進派か、環境保全か開発か、など枚挙にいとまがない。こんな時代だからこそ、葛藤のある学習材を積極的に取り上げて、自ら社会事象にかかわり社会を担おうとする子どもを育てることが必要だと考える。

子ども一人一人が学習材へのこだわりや考えをもち、子ども同士で、または、子どもと教師で互いの考え方に対して、共感したり反発したりすることができてこそ、学び合いが深まるのである。だから、取り上げる学習材は、多様な考え方が引き出せるものほど望ましいと考える。

このような観点からの学習材を、

「子ども相互の学びあい deepening なかで、自分なりの意思決定ができる学習材」

と呼びたい。

次に、「子ども相互の学びあい deepening なかで、自分なりの意思決定ができる学習材」とは、どのような学習材なのか、仮に次のように定義づけてみた。

- ①様々な立場からの多様なとらえ方ができる学習材
- ②葛藤や対立があり、論点が明確な学習材

③社会に参加すること、かかわることへの意欲がわいてくる学習材

また「子ども相互の学びあいが高まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」を取り上げて、学習活動を展開するときには、次のようなことをねらって、子どもが学習するように、意図していくことが大切である（註-1）。

(ア) 互いの違いを認めようとする意識をもつ

多様な考え方ができ、葛藤のある学習材について学ぶことを通して、友達との感じ方・考え方の違いに気づき、様々な考え方があることを認められるようにする。

(イ) 自己主張の精神をもつ

しかし、他の意見や考えを認めることは、単なる同化・同調とは異なるという意味を考えさせることが大切である。あくまでも、自分の学びがあって、その上で、他の意見・考え方と比べたり、それらを取り入れたりしながら、自分なりに意思を決定することができるようにしなければならない。

(ウ) 他とかかわる中で共有意識が育つ

人という学習材へ、共感・反発を通して、感じたこと・考えたことを、共に学ぶ友達と共感したり、対立したりして共有することができることは、まさに社会そのものである。その中で、自分なりの合理的な意思決定をしていくことは、時には子ども同士の連帯感を生み出し、時には分裂した意識を生み出すかもしれない。それらを含めて、様々な学習活動を通して、共感・反発しあう経験が、共有意識を育て、その延長上には、「自ら社会事象にかかわろうとする子ども」の姿があるのである。

③二つの視点のバランスについて

なお、全ての単元の学習材について、「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」と「子ども相互の学びあいが高まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」の要素が同じような割合で含むように構成することは、難しい。前者の色彩が濃い単元や、後者の色彩が強い単元、または、両者の色彩を強く持ち合わせている単元など、様々な場合を想定して授業実践を行いたい。

(2) 学習活動と学習方法の工夫

①学習材を生かす学習活動の工夫

先述したとおり、教材は、教材が単体で「在る」のではない。学習問題や学習活動などの「活用」面を忘れて何の工夫もしなければ、児童が学ぶ「学習材」としての真価を発揮できないと考える。どんなに素晴らしい人物を掘り起こして開発しても、子どもが、その人物に興味を持たなかったり、その人物の生き方に共感できなかったりすれば、意味ある学びは成立しない。故に、教材を開発するということは、学習問題や学習活動の工夫によって、子どもの目の高さにあったものにしていく工夫が不可欠である。そこで、開発した学習材を生かすための学習活動の工夫のあり方や、相互の関連について明らかにすることは、研究のねらいとしていきたい。

②子ども一人一人の「問い」や「学習の仕方」を大切に学習＝問題解決的な学習の保障

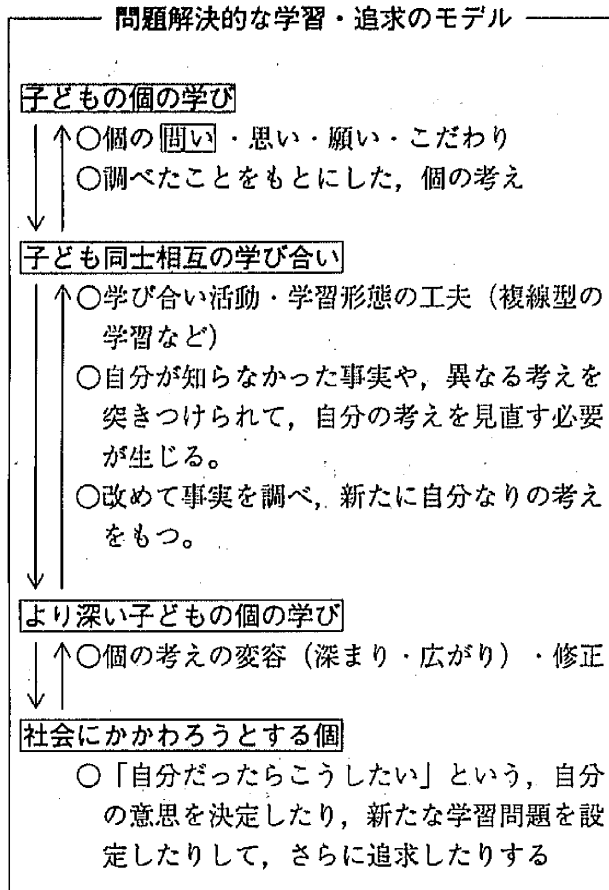
研究主題に迫るために、学習方法では、子ども一人一人の「問い」や「学習の仕方」を大切に学習＝問題解決的な学習の保障が大切であると考えている。

社会事象にかかわろうとするために、人間はおおよそ次のような学びをする。

- i 今自分の置かれている社会に対して、自分なりに問題を感じたり、問題を発見すること
- ii 考えるため、判断をするために、自分で目的に応じた情報を収集すること
- iii 様々によりよい方策を思いめぐらせること
- iv こういう社会にしてみたいと、自分が願ったり希望をもったりすること
- v 自分の願いがかなう社会にするために、行動したり実践したりすること

「社会事象にかかわろうとする」ことが、極めて主体的な行為である故、小学生の段階でも、小学生なりに「社会事象にかかわるとする」芽の持つ児童を育てるためには、自ら社会事象に対し

て「問い」をもったり、その自分の「問い」を解決するための方法を考え、自分の目的に応じた資料を収集して、自分なりの作品化の方法を考えたり、自分の「問い」に対して自分なりの考えをもったり表現したりする、つまり自分らしい学び方や、自分なりの学びのスタイルを確立していく必要がある。



前述の i ~ v の、どの過程にも自分で発見したり、自分で選択したり、自分で決めたりと、自分の主体的な学びの行為が伴う。自分の「問い」をもち、自分の追究スタイルを創り、自分の意思を決定して表現するという自分らしい主体的な学びを、社会科という1教科の学びの場においてさえ展開することができなければ、とうてい「社会事象にかかわろうとする子ども」として育つことは不可能であろう。

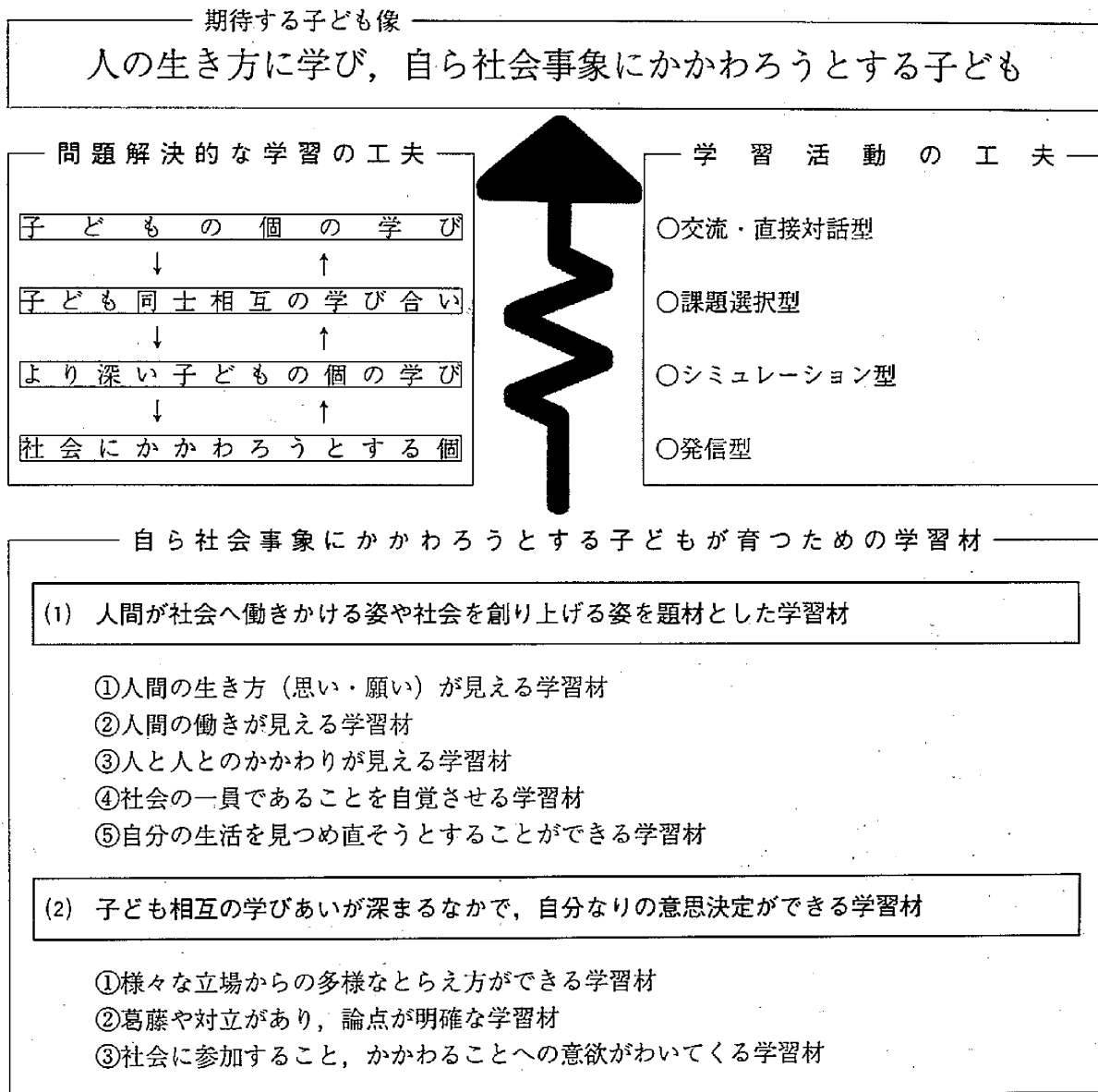
極論すれば、問題解決的な子どもでなければ、社会事象にかかわることはできないと考えるのである。ここに「問題解決的な学習」をおこなう意味がある。ここで考える「問題解決的な学習」では、自分なりの「問い」をもち、自分なりの方法で解決していくことこそを大切にしていきたい。

複線型や課題選択型の学習が流行しているが、それらは所与のものではなく、「社会事象にかかわろうとする子どもを育てるための手だての一手法として、その意味を吟味した上でこそ、積極的に取り上げる価値があるのである。

3 研究のねらい

- (1) 研究仮説に基づき、「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」, 「子ども相互の学び合いが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」を開発し、授業実践により、「自ら社会事象にかかわろうとする」態度の育成に対する、有効性を検証する。
- (2) 開発した「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」, 「子ども相互の学び合いが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」を、生かすための学習活動の工夫のあり方や、相互の関連について明らかにする。

4 研究構想図



Ⅲ 第6学年の社会科年間学習計画について

本校は、平成9～11年度、文部省の開発研究協力校を委嘱され、附属中学校とともに小中合同のカリキュラムを作成している途上にある。

以下に掲げる「お茶の水女子大学附属小学校 平成10年度第6学年社会科 学習計画」は、その中間報告の段階のものである(註-1)。

この学習計画の特徴は、表中右欄「小学校の特色や中学校・創造活動との関係」に記述をしたので、そちらを読んでいただきたい。

なお、表中のゴシック体で表記されている単元が、本稿で記載した実践事例である。

お茶の水女子大学附属小学校 平成10年度第6学年社会科 学習計画

月	小 単 元 名	時数	小学校の特色や中学校・創造活動との関係
4	第1単元【日本の歴史】 (0) オリエンテーション 自分の区の歴史を友達に伝えよう	6	(1) 日本の国家・社会の発展に力を尽くした人物と、それらの人物に関連する文化遺産を中心に扱う。また、時代相互の因果関係を深くは追求せず、人物と文化遺産から見渡せる程度の歴史的な景観について、自分なりの考え方・見方ができればいいという立場をとる。
5	(1) 大昔のくらし 縄文・弥生時代の遺跡・遺物	6	(2) 小中連携を意図して、小学校では前近代史を中心に扱うこととする。
	(2) くいの始まり ・吉野ヶ里遺跡と卑弥呼	3	その理由として、
	(3) 天皇を中心とした国づくり ・聖徳太子	4	① 近現代史では、特定の人物よりは、民衆を中心にした方が時代像を描きやすく、「人物とそれらの人物に関連する文化遺産を中心に扱う」小学生の歴史的内容領域の学習には、あまり向かないこと。
6	・聖武天皇、行基、鑑真から選択	4	② 政治の仕組みや、経済の仕組みに関する知識がある程度必要になり、内容が高度になりがちであること。
	(4) 貴族と武士の屋敷を比べよう ・藤原道長、平清盛、源頼朝	6	③ 国際理解教育との関連で、特にアジアの中の日本を重点にした内容を取り上げる必要が出てくる。この点、例えば戦争や戦後の問題で、「南京大虐殺」・「戦後補償」などの題材は、小学生の理解の範囲をこえたり、諸学説があり小学生の学習には向かないものもある。中学校でも、近現代史の学習がおろそかになる現状をふまれば、小学校では、人物と文化遺産を中心に前近代史を充実させる。それに対して、中学校は前近代史は軽く扱い、近現代史に十分時間を割いて、政治や経済、アジアのなかの日本という視点も盛り込んで教材化していった方が、子どもの学びには適切と考えたのである。
7	から選択 (5) 天下の統一 ・織田信長、豊臣秀吉、徳川家康	6	(3) 身近な地域の歴史事象を取り上げ、インタビューや取材活動など体験的な学習も盛り込む。また、単なる事実認識の結果を覚えることが重視される社会科学習に陥らないようにすることが大切である。
	から選択 (6) 家光がおそれた3つのもの ・徳川家光	3	
	(7) 江戸時代の人々の楽しみ ・近松門左衛門、井原西鶴、 歌川広重、葛飾北斎から選択	6	
9	(8) 新しい明治の世の中をつくった人々 ・大久保利通と西郷隆盛（征韓論）	9	
10	(9) テーマ学習 日本と朝鮮半島の交流の歴史 ① 縄文～大和時代の交流 ② 足利義満と朝鮮通信使 ③ 雨森芳洲と朝鮮通信使	9	
11	④ 伊藤博文・安重根と韓国併合	計 62	
12	第2単元 【世界の中の日本】 (1) 日本と関係の深い国々 ①第1小小単元 「近くて遠い国 大韓民国」	10	○教材を選ぶ視点と留意点 ① 第1小小単元・日本と文化面・経済面で関わりの深い国を学習する。第1小小単元は、韓国で（学習の仕方＝衣食住から学ぶという）学習「指導」を中心にする。第2小小単元は左記の3か国から選択させ、子どもが自ら学ぶ「学習」が中心となる。
1	②第2小小単元 「もっと知ろう 日本とつながりの深い国」 ・アメリカ、オーストラリア、 サウディアラビアから選択	6	○創造活動との関連 平成10年度の6年生は、学級ごとに、テーマが違う。 1組…国際 2組…生活を支える人々 3組…障害を持つ人と触れあう 4組…高齢者と触れあう そこで、第2元、第3単元については、学級ごとに、既習経験が違うのであるから、実際の活動も、学級の実状にあわせて変えていく。
2	(2) 地球の環境と世界の平和 ・国連 ・ユニセフ ・NGO 諸団体	計 16	② 第2小小単元・国際平和の実現、地球的視野に立って環境問題の解決に取り組んでいる人々を取り上げて学習する。 国際平和の実現では、国連、ユニセフなど。地球的視野に立った環境問題では、各種NGO 諸団体などが考えられる。
			③ 第1小小単元・第2小小単元ともに、実際に外国人やNGOのボランティアで活躍している人を教室に招いて学習することができる。
2	第3単元 【私たちのくらしと政治】 ○高齢者福祉センター・みどりの郷に行こう ○環境を良くする文京区の政治 ○文京区に住む	10	○基本的な方針 憲法の理念や、国会・行政の仕組みの学習にかたよらないように、地域の福祉施設や公共施設を利用する人々や、施設で働く人々の願いを調べることを通して、人々の願いがどのように、政治に反映されているのかを追求するような学習内容や学習活動を取り入れる。
3	海外の人々の暮らし などから選択する	計 10	
年間総時数		88時間	

IV 実践事例1 「江戸時代の人々の楽しみ」の概要

—— 相互のよさを認め合い、見方・考え方を深め、自分の生活を見つめ直した事例 ——

1 単元名 「江戸時代の人々の楽しみ」

2 単元の目標と評価規準

(1) 単元の目標

江戸時代に、町人の間に広がった、歌舞伎・浄瑠璃・浮世草子・浮世絵などの新しい文化について、様々な資料を調べることを通して、新しい文化が盛んになった理由を、町人の地位の向上・財力・生活のゆとりなど、その時代の特徴と関連付けて考え、作品にまとめることができる。

(2) 観点別評価規準

観 点	評 価 規 準
社会的事象への関心・意欲・態度	歌舞伎、浄瑠璃、浮世草子、浮世絵などの新しい文化について、関心をもち、様々な新しい文化が盛んな様子を意欲的に調べようとする。
社会的な思考・判断	歌舞伎、浄瑠璃、浮世草子、浮世絵などの新しい文化について、調べることを通して、新しい文化が盛んになっていった理由を、時代の特徴と関連付けて、自分なりに考えて書こうとする。
観察・資料活用の技能・表現	新しい文化について調べる中で、目的に応じて収集した資料を効果的に活用したり、友達と情報交換をしたりして、自分の考えを深め、新しい文化について調べたことを作品にまとめようとする。
社会的事象についての知識・理解	厳しい身分制社会の下で、町人たちが、新しい文化をつくっていったことを作品に書くことができる。

3 研究主題との関連

本単元は『学習指導要領（平成元年版）』6年・内容(1)ーケに対応している。

歌舞伎や浮世絵、（国学や蘭学）などについて調べて、江戸時代の人々の暮らしの様子（や新しい学問がおこったこと）を理解すること。

ただし、江戸時代の「文化」と「学問」では、内容的に質的な差があるので、本単元では両者を一度に扱わず、江戸時代の人々に人気の高かった様々な文化の側面に絞って学習することにした。

(1) 「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」の視点

「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」について、次のような視点から考えてみた。

- ①人間の生き方（思い・願い）が見える教材
- ②人間の働きが見える教材
- ③人と人とのかかわりが見える教材
- ④社会の一員であることを自覚させる教材
- ⑤自分の生活を見つめ直そうとすることができる教材

本単元で学ぼうとする「人間の社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿」は、上の①～⑤の中の、

- 「②人間の働きが見える教材」、
- 「③人と人とのかかわりが見える教材」、

○「⑤自分の生活を見つめ直そうとすることができる教材」としてとらえた。

例えば、浄瑠璃は、近松門左衛門の脚本と、竹本義太夫の独特の語りによって、人々の間に爆発的な人気を起こした。言い換えれば、竹本義太夫の義太夫節だけでは、浄瑠璃は代表的な文化とはならず、そこに近松門左衛門の脚本の素晴らしい内容を感じ取ることができる。ここに、「②人の働きが見える教材」としての意味がある。

この学習内容には、浄瑠璃に力を注いだ近松と竹本の2人が共に生きる姿と、浄瑠璃に魅力を感じ浄瑠璃を楽しむことを通して近松や竹本と共に生きる様々な江戸時代の町人の姿を見ることができる。ここに、「③人と人のかかわりが見える教材」としての意味がある。この小単元の学習では、主にこの「③人と人のかかわり」を追究すべき課題としていきたい。同様に、歌舞伎、浮世絵、浮世草子も、人々に親しまれたことから、「③人と人のかかわり」が見える教材とすることができる。

また、文化を作り出していった人々とその文化を受け入れていった人々が様々な文化遺産を通して結びついていった点に着目して、近松の脚本の内容、浮世草子の内容、浮世絵が、何故当時の人々に受け入れられていったのかという点からも、追究することができる。

歌舞伎・浄瑠璃・浮世草子・浮世絵といった様々な文化を受け入れ、それらに魅了されていった人々はどんな心境であったのであろうか。また、どのような時代背景が、人々を、歌舞伎・浄瑠璃・浮世絵・浮世草子といった様々な文化に引きつけていったのか。この点を探っていくことによって、文化の創出者と文化の担い手になっていく「人と人のかかわり」の姿に気付いていくことができると考える。

さらに、江戸時代の町人たちが、様々な文化を楽しんでいる姿を探ることを通して、子どもたち自身が、自分自身を振り返り、自分を見つめ直す一つの契機となることを期待しているのである。

(2) 「問題解決的な学習」展開の工夫

①様々な見方・考え方を引き出し、生かす「学習問題」の工夫

前述したような教材を、子供たちが興味をもって追究していくためには、自ら新しい文化を創りあげていった人々の働きに興味をもつことができるような学習材が必要になる。

そこで、第1時では、歌舞伎の芝居小屋や役者の浮世絵・本屋の盛況ぶり・風景画などの当時の文化の多様な側面を提示し、様々な文化が花開いた時期であることをとらえさせたい。

そして、それぞれの文化を築いていった代表的な人物と、その具体的な働きを調べることに重点を置いて調べ学習に取り組ませたい。学習問題は次のようになる。

歌舞伎、浄瑠璃、浮世絵、浮世草子などの江戸時代の文化は、
どのようにさかんになったのでしょうか。

つまり、江戸時代に民衆に親しまれた文化が、どのような理由で人気を集めたのか、という点を探ることを課題としている。更に詳しく言えば、人気を博すようになった、様々な文化遺産の内容とその時代背景を調べていくが必要になる。

②一人一人の学習のスタイルを生かす「学習活動」の工夫

○人物選択学習による、一人一人の児童の、興味・関心に基づく学習方法

自分の興味・関心にもとづいて、歌舞伎、浄瑠璃、浮世絵、浮世草子から調べてみたい文化について自由に調べるようにした。人物については、ある程度典型的な事例となりうる人物を教師から提示していくことにした。

○様々な資料を用いた調べ学習

「歌舞伎、浄瑠璃、浮世絵、浮世草子などの文化は、どのようにさかんになったのでしょうか」という学習問題を調べるには、教科書や資料集程度の本では、解決できない内容になってくる。学校の図書コーナー、地域の図書館、学校のビデオライブラリーなど、様々な資料収集方法を活用させることにした。

○調べたことを、自分らしさが表れる好きな方法で作品化する活動

一人一人の思いや考えのよさを生かす学習には、まとめ方も含まれる。

新聞、パンフレット、カルタ、短歌など、既習の様々なまとめ方を生かして、取り組ませ、調べたことが友達に伝わりやすい方法で作品化するように助言していきたい。

4 「江戸時代の人々の楽しみ」 A児の学習記録

(1) A児の学習傾向

○自分が興味をもったことについては、納得するまで調べようとする。また、失敗や間違いを恐れず、自分の気に入った方法で学習に取り組む。

○徐々に、自分なりの考えを表現することができるようになってきた。

○作品のまとめ方は、雑然としていることが多い。

○読書、特に小説が大好きである。

○創造活動（本校の「総合的な学習の時間」の名称）の自主学习で、魚、特にナマズの生態について研究している。かなり、専門的な研究書も収集して、調べる学習を継続している。

(2) A児の学習活動の記録（註-3）

<p>A児の学習活動（学習活動を□で囲んだ。） 発言・文章・書き込み・行動・作品</p>	<p>・支援（発問・資料提示・ 助言・自己評価へのコメント） ・研究主題との関連についての評価 ◎方法・態度面、■内容面</p>
<p>—— 第1時の主な学習活動 ——</p>	
<p>①江戸時代に人々に人気のあった様々な文化について資料から分かることを書き込む。 ②学習問題にもとづいて学習計画をたてる。</p>	
<p>まずはじめに、教科書（東京書籍6年上 p.68）に載っている浮世絵の資料によって、江戸時代の様々な文化の様子を知り、資料について気がついたことを、学習シートに書き込んだ。</p>	<p>◎資料をよく見て、様々なことに気付き、多様な表現をしたり、ありのままに表現したりしている。</p>
<p>書き込み 資料を見て気が付いたこと</p> <p>①芝居小屋 ・歌舞伎は、今とほとんど変わらない ・ケンカをしている ・ちょうちは新しい物 ・猫が入りこんでいる</p> <p>②浮世絵（写楽） ・役者がメイクしている。 ・かみ型が町人とちがう。</p> <p>③浮世絵（広重） ・弁当屋や茶店がある。 ・防火用水が整備。 ・身分の差。</p> <p>④本屋の絵 ・今の本屋とはちがいよく読んで選んでいる。 ・絵を売っている。 ・図書館のようだ。</p> <p>⑤人形浄瑠璃 ・みな顔が白くまゆがキリッとしている。 ・バックが単純</p>	
<p>ここで、江戸時代の人々の楽しんでいる様子について、さらにどんなことを調べてみたいのかについて話し合ったところ、次のような意見が出された。</p> <p>○江戸の文化を創った人々の思いや願い。</p>	

江戸時代の文化 No.1

W-

番

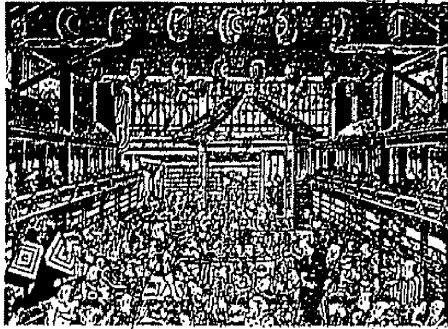
Name

A児

数68
表14

次の絵は、江戸時代に生まれた新しい様々な文化の様子です。
これらの絵から、どんなことが分かるでしょう。自由に書き込んでください。

歌舞伎 坂田藤十郎
① 近松門左衛門 市川團十郎



おわがたい現在の人
に比べ
時勢がよりこんがら
かたがたしい。歌舞伎は多
とほんどがからな
などの文化



浮世草子 井原西鶴
この本は5がよ本
えんてい。絵を
うすくして



火屋や茶店がある
防火用水道が整備
身初美



近松門左衛門
お顔が白くまが
かたがたしい。ハツ
が筆

- 江戸時代の文化を楽しんだ人々の気持ち
 - 江戸の文化が人々の間で盛んになったわけ
- そこで、子どもたちと話し合い、これらの意見をまとめて、学習問題を次のようにした。

学習問題	歌舞伎、浄瑠璃、浮世絵、浮世草子などの江戸時代の文化は、どのようにさかんになったのでしょうか。
------	---

- 文章 「学習計画表」への記入
- ・調べたい文化・・・小説、浮世草子
 - ・調べたい人物・・・井原西鶴
 - ・発表の方法・・・人が来たら説明
 - ・作品のまとめ方・・・新聞
- 行動 図書コーナーに資料を探しに行く。
(図書コーナーと家庭から資料を探して持ってくる。)

◎実は、このA児は、男子にしては珍しく小説が大好きな子どもである。この「江戸時代の人々楽しみ」を学習していた当時、A児が読んでいた本は「大地の子」(山崎豊子 著)であった。このように、自分で文化や人物を選択できることは、それぞれの児童の興味関心を生かすことができる。A児が井原西鶴を選んだのは、自分が小説好きという理由が大きいのである。

◎A児は、読書、特に小説が大好きで、自分の興味・関心が強いことを中心にして課題を設定をしている。

◎課題を決め、すぐに図書コーナーに行った。

江戸時代の文化 No.2 学習計画表 W- 番 A児

調べたい文化	回数	計画	学習したこと	問題解決への成果、不十分な点
小説 浮世草子	1	新聞の 外	どういふ作品が 町人に受け たか本を た	本を深くよんで一つの作 品にし(ぼ)まゆめ子
調べたい人物 井原西鶴	2	記事	記事は井原 西鶴の本 んた	今のしやが方法はわかん ない
発表の方法 * 人がきたせいか	3	新聞	話のあつた とて話の 明	当時の作の内容がうけるものも ないから、 言葉がまずういので何回 もえまねはなすわ。 どゆいかにうにうにうにうに
作品のまとめ 新聞	4	なぜし まね した	なぜ受けた	問題なし
調べる視点 どんな人たちが、それぞれの文化を 楽しみ、受け入れていたのか、 昔の小説はどのよ うなものだったのかし らうたか				Y 香独立方法でいろいろ考えながら 自分で考えている

第2・3・4時の学習活動

③自分の課題について、資料を収集したり、調べたりして、作品にまとめる。

行動 自分が収集してきた資料があるのにもか
かわらず、紹介した資料を手にとって見た。
その中から、『マンガ西鶴名作集』という本
を持って行き、しばらく眺めた後、教師に次
のように言った。

発言 「先生、そのころの人氣があった本の中
身が分かれば、どうしてその文化が盛んにな
ったか分かるよね？」

行動 まず、その本をじっくり読み始める。

自己評価 「言葉が難しいので何回も読まねば
ならぬ」

行動 その後、『マンガ西鶴名作集』の中から、
気に入った物語を決めて、新聞を書き始めた。

作品

(1) 「大晦日はあわぬ算用」の、ストーリーを
まとめ、自分の解説も書く。

資料提示 区立図書館や図書コーナーの新作図
書を紹介した。

◎更に新しい資料を探そうとする態度や、目新
しいものへの興味が旺盛である。

◎物語の内容を理解することが、問題の解決に
迫る方法と捉えた着眼点のよさがある。

＝自分独自の学習方法を持つようとしている

助言 コメント

当時の人々に受けた話がどのようなものか調べ
るなんておもしろい。君しかやっていない方法
だから、がんばれ。

◎言葉が難しく、困難が伴う学習でも、自分が
追究してみたいことは諦めずに取り組んだ。

月刊 浮世草子 12/21

西鶴の町人を主人公とした作品はなぜヒットしたのか。

西鶴の作品は町人のお金のやりくりや年のくれのお金の話が多いのが持ちようです。これは、読者の町人たちにも本当にありそうな話である。

町人が、文字などを読むようになったからです。これは、寺子屋など多く設立されたからです。

当時は本は町人の手に届きかねる値段だったが、貸本屋ができたので、定価の1/6ぐらいで貸してもらえたので町人もよむことができた。

大晦日はあわぬ筆日
この作品のおもしろさは、年末で新しい年もききは燈油もないうつがぼろぼろと浪の話しもある華の兄弟医者がお金をえん助けてもらい人並に正月をくらすことだ。借金仲間をよんせ。十兩あったのをどき仲間にたすって仲間たち身のはげしく使いた。仲間は引いて仲間の一人が自由にさうしつした。まあ、わりとさうしつした。後、うしろの一人がうしろの場にあつた。うしろの一人は仲間をすくうた。めづるが、おいたものたごつた。めづるが、だまをねいた主人は無理にだれか置いた。開こうとせず。客人を一人ずつ見えなくなる戸をいよいよ閉めて帰らせさせた。さうして、さうして、まにまに一兩はたよんだ。うしろのハハハ。

説明
これは武士のつきあいは立派であるということである。酒えんになれた客のふるまいなどは、すばらしいものである

- 文章 「これは、武士のつきあいは立派であるということである。酒えんになれた客のふるまいなどは、すばらしいものである
- (2) 新聞の記事「西鶴の町人を主人公とした作品はなぜヒットしたのか」
- ①町人のお金のやりくりや年のくれのお金の話が多いのが持ちようです。これは、読者の町人たちにも本当にありそうな話である。
 - ②町人が、文字などを読むようになったからです。これは、寺子屋など多く設立されたからです。
 - ③当時は本は町人の手に届きかねる値段だったが、貸本屋ができたので、定価の1/6ぐらいで貸してもらえたので町人もよむことができた。

◎西鶴の作品に対して、自分なりの考えをもつことができた。このA児の感想は、江戸時代の町人たちへの共感に近く、その時代の人々の立場に立った考え方をしている。また、文化の発信者＝井原西鶴と町人たちの、人と人とのかわりに気付き始めていると言える。

コメント 君独自の方法だから、(報告会では)、

<p>きたのです。</p>	<p>自信をもって発表して欲しい。</p>
<p>第5・6時の学習活動</p>	
<p>④他の人物を調べた友達と情報交換や相互評価を行い、学習問題について分かったことや感じたことを学習シートに書く。</p>	
<p>行動・近松門左衛門を調べたE児の報告を聞きに行く。</p> <p>E児 「浄瑠璃の内容が、当時の時代に起こっていたことをよく反映しているというか…」</p> <p>文章 「浄瑠璃は、本当にあった事を（時代背景）を、おもしろくまとめてあるので、歴史も分かる」</p> <p>行動・歌川広重を調べたB児の報告を聞きに行く。</p> <p>B児 「東海道五十三次の評判がよかったのは、普通の庶民はなかなか旅行に行くことが出来なかったが、絵を見て、手軽に楽しむということができるようになったからです。」</p> <p>文章 「広重のヒットした理由が自分の考えでいい。広重の作品はきれいで、身分の低い人にも受けた。東海道五十三次は庶民は旅の出来なかった東海道をたのし（んだ）のた。」</p> <p>・・・ここから、A,C,S,R,M児がグループになって話し始める</p> <p>・・・</p> <p>行動 C児の東洲齋写楽の報告を聞く。</p> <p>C児 「写楽が人気があったという実態をつかむためには、絵を見ることが一番いい。今までにない新しい絵を描いたから、人気が出るようになった。」</p> <p>文章 「写楽の正体を自分の考えで書いているのがよい。最初はうれなかった。みんなに（ユーモアな絵が）みとめられていった。」</p> <p>発表 「（前掲の新聞記事①②③の他に）西鶴の優れた観察力と、あと俳句をやっていたからね、きびきびとした文章がおもしろいから受けたんだと思うんだよね、ほくは。」</p> <p>S児 「例えば、近松門左衛門で言えば、農民とか町の人たち生活とか、心とかを作品に表し</p>	<p>◎友達の考え方のよさに気が付く。</p> <p>■A児は、浄瑠璃は、当時に本当にあった出来事を題材にしておもしろく書かれたことが、人々に受け入れられた原因であると感じ取っている。</p> <p>■A児は、広重が美しい風景の絵を描いたことによって旅ができない人々でも、東海道の旅を楽しむことができたと考えた。</p> <p>◎A児は、C児の「写楽の絵そのものを見るのが一番いい」という、調べ方の独自性に着目した。また写楽の絵が当時としては大変風変わりで、ユーモアに富んでいることを、人気の理由として感じ取っている。</p> <p>←発問：自分が調べ物と友達が調べた文化や人物を比べると、何か共通点はあるの？</p>

ていたから人気が出てきたっていうことが多い。」

C児「それはね、偉い人たちじゃなくて、たくさんいる農民とか町人とかの心をつかんだ人が勝ち。だから写楽も広がった。」

発言 「C君と同じ。庶民の方が絶対数が多いから、庶民や農民の心をつかんだ方が勝ち。」

C児がA児に渡した相互評価カード:

「とくに、どうして売れたかがよくかけていてよかった。やはり調べるより(西鶴の作品を)読んだほうがいいね。」

A児の発表を聞いたC児の学習シート:

「町人の金のやりくりがテーマ。本当にあったような話。貸本屋で安く読めた。寺子屋で字が読めるようになったから」

行動 M児の近松門左衛門の報告を聞く。

M児「当時は、あまり、庶民の楽しみなどなかった。こういうものが出てきたということは、町人が力を持ち始めた印だと思う。」

文章 「町人が力をつけたということが分かった」

発言 「こういうもの(浄瑠璃や歌舞伎)を見られるほど」(と、相互評価カードに書き足す。)

行動 R児の葛飾北斎の報告を聞く

R児「ぼくの意見としては、結局、町人が新しいものを求めていたところに、北斎や広重が新しい浮世絵を生み出したのだと思いました。また、浮世絵は、その時代の町人がどのようなものを好んでいたかが分かる重要な手がかりだと思いました。」

文章 「グッドタイミングで、新しいものをもとめていたか。町人が好むものが手がかりとい(う)のが考えとしてすごい。」

文章 学習問題に対するまとめ

さかんになっていったのは、数の多い町人の間で町人の心をつかんでいる人がさかんになっている。えらくても大名將軍は少ない。少ない人の中では、広まらないのであるということが分かった。

■ (⇒社会を見る目をもち始めている)

←**発問** では、それ以前の文化と比べるとどんなところがちがうの？

(⇒社会を見る目をもち始めている)

←**発問** A君はどう思う。

■A児も、社会を見る目をもち始めている。

◎C児は、自分が写楽を調べた方法との共通点について触れ、共感している(友達の学び方に対する共感=自他の学び方のよさの発見)。

←**発問** 町人が力をつけたってどういうこと？

■A児は、江戸時代に文化が盛んになったわけは、町人が好むものが、ちょうどいいタイミングで新しく出されていたからだと受け止めて、R児の考え方に共感している。

◎社会を見る目が育ってきている。現在の社会を見る目で江戸時代を見ている。

◎A児が、左のような自分なりの考えを書くことができたのは、B・C・M・S・R児の報告や、Tの質問に対してC児やS児が答えたことを、聞いて考えを深めていったことが、大きく影響している。

江戸時代の文化 No. 4

6年組 1名前

歌川広重・浮世絵・浄瑠璃・浮世絵・浮世歌子などの文化は、どのように盛んになったのでしょうか。

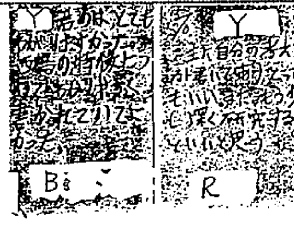
<p>近松門左衛門 江戸の浮世本舞に合った事をおもしろくまとめた あつて歴史もわかる</p>	<p>歌川広重 広重の浮世絵は、江戸の町に描かれた。東海道五十三 は江戸の浮世絵の中心にたつた東海道五十三の絵だ。</p>
<p>井原西鶴</p>	<p>東洲斎写楽 最初浮世絵の浮世絵に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。</p>
<p>十返舎一九</p>	<p>喜多川歌麿 浮世絵はだんたんレベルが低くなった。浮世絵を 大たんなど江戸の楽しい風景画で町人に愛</p>
<p>松尾芭蕉</p>	<p>鈴木春信</p>

歌川広重・浮世絵・浄瑠璃・浮世歌子などの文化は、どのように盛んになったのでしょうか。それぞれの文化をつくりあげた人々、そして人々の生活や文化が、江戸の町を盛り上げた。江戸の町を盛り上げた。江戸の町を盛り上げた。江戸の町を盛り上げた。

江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。

Yとて、どうして
売れたかよく
かいていてよか
た。やはり書か
るより読んだな
らぬ。いかに
C E Y

A
新西鶴の
江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。江戸の町に描かれた。



さいくこの
かがまはして
M
相互評価
サマ

V 実践事例2「明治の新しい世の中をつくった人々 —大久保利通と西郷隆盛—」の概要

—征韓論争を追体験しながら，大久保利通や西郷隆盛の国づくりについて，
自分なりの合理的な意思決定をしながら人の働きについて考えを深めた事例—

1 単元名 「新しい世の中をつくった人々—大久保利通と西郷隆盛—」

前註：実践事例2「明治の新しい世の中をつくった人々—大久保利通と西郷隆盛—」の実施時期は平成10年10月，実践事例3「日本と朝鮮半島の交流の歴史」は平成10年11月で，ともに平成10年度の6年1組の記録である。

また，実践事例2で紹介する観察対象児童A児・B児・S児・T児と，実践事例3の観察対象児童A児・B児・S児・T児は，同一の児童であることを予め断っておく。

2 単元の目標と評価規準

観 点	評 価 規 準
社会的事象への 関心・意欲・態度	幕末から明治維新期の日本の近代化に尽くした人々の働きに関心を持ち，それをもとに，日本の近代化の様子を意欲的に調べようとする。
社会的な思考・判断	開国以降の日本の近代化に尽くした人々の働きを調べることを通して，開国から明治維新および，維新以降の近代的な国家へと，日本の近代化が推し進められた時代の様子について，当時の社会や外国との関係から，自分の考えを書こうとする。
観察・資料活用の 技 能 ・ 表 現	収集した，年表・文書資料・地図・写真などの諸資料を，効果的に活用し，友達との情報交換を通して自分の考えを深め，作品に生かそうとする。
社会的事象についての 知 識 ・ 理 解	多くの人々の働きにより，欧米の文化を取り入れながら，日本が近代的な国家としての制度や仕組みをつくり上げていったことを理解することができる。

(1) 単元の目標

大久保利通や西郷隆盛など，開国以降の日本の近代化に尽くした人々の働きを中心に，倒幕運動や明治政府の諸改革などを調べて，開国から明治維新へ日本の近代化が推し進められた時代の様子について，自分なりの考えを書いたり話したりすることができる。

(2) 観点別評価規準

3 研究主題との関連について

(1) 「大久保利通と西郷隆盛」を中心にすえた学習材の開発

①学習材について

本単元は『学習指導要領（平成元年版）』6年・内容(1)ーコに対応している。

黒船の来航，明治維新，文明開化などについて調べて，明治時代に入り廃藩置県や四民平等などの諸改革が行われ，欧米の文化を取り入れつつ我が国の近代化が進められたことを理解すること。

幕末・明治維新期には，多くの優れた人物が輩出し，内外の緊迫した情勢の中，天皇を中心とした中央集権国家を成立させた。大久保，西郷のほかにも坂本龍馬，岩倉具視，木戸孝允，勝海舟など，取り上げたい人物が多くいる。そのような人物の思いや業績を調べたうえで，それぞれの人物の対立や協力といった人間関係をまとめることによって，多くの人物の働きが，新しい明治の世の

中をつくり出したことをとらえさせる実践がある（註-1）。そこでは、子どもたちに人々の協力する姿を中心に時代像をとらえさせ、生きる希望や期待感を持たせる、まさに小学校らしい社会科の学習と考える。本実践も、これらの素晴らしい先行事例の成果に学びながら、新しい試みに挑戦してみようとする。

②「人間の社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」の視点

「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」について、次のような視点から考えてみた。

- (ア) 人間の生き方（思い・願い）が見える教材
- (イ) 人間の働きが見える教材
- (ウ) 人と人とのかかわりが見える教材
- (エ) 社会の一員であることを自覚させる教材
- (オ) 自分の生活を見つめ直そうとすることができる教材

さて、本実践では、大久保利通と西郷隆盛を重点的に取り上げようと考えた。大久保と西郷は、同じ鹿児島県加治屋町で生まれ育ち、共に遊び共に学びあって育った幼なじみである。倒幕運動にあっては、互いに協力しあい、大きな貢献をした。しかし、明治新政府樹立後は、新しい国家の構想に違いが生じ始める。端的に言ってしまうと、大久保は「有司専制」を基調にした官僚指導の国家構想を、西郷は「有司専制」を克服して、立憲形態を許容しながらも限りなく天皇専制に近い国家構想をもっていた（註-2）。そのような、あるべき国家構想の食い違いが、決定的となるのが、「明治六年の政変-征韓論争-」であり、ついに、西南戦争では敵同士となって戦い、西郷は西南戦争で自刃、その後、大久保は暗殺されるという劇的な最後を迎えることになる。

このような、幕末-明治維新期の歴史の流れの中で、大久保利通と西郷隆盛の生き方や、新しい国づくりに対する思いや願い、または、歴史上の人物として果たした役割は、二人の考え方が違う故に、実に鮮明な対比ができるのである。

そして、多くの人物が活躍する時代であり、また、人と人との協力や対立といった人間同士のかかわりを通して、新しい時代ができていく過程を知ることができると考えた。

③「子ども相互の学びあいが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」の視点

- (カ) 様々な立場からの多様なとらえ方ができる教材
- (キ) 葛藤や対立があり、論点が明確な教材
- (ク) 社会に参加すること、かかわることへの意欲がわいてくる教材

二人の、協力から決別への転機となった征韓論争自体は、学問的にも諸説（註-3）があつて小学生にはその理解は容易ではない。そこで、「明治六年の政変-征韓論争-」を、二人の国家構想の違いとしての明治維新の「切り口」として取り上げようと考えた。

大久保利通と西郷隆盛の、それぞれの果たした役割や、新しい日本への思いや願いを、子どもたちに追求していくと、二人の違いは自ずと明確になってくる。すると、大久保と西郷が辿った征韓論争や西南戦争を疑似体験的に学習することも可能となるのである。

そこで、「子ども相互の学びあいが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」の「(キ) 葛藤や対立があり、論点が明確な教材」、「(ク) 社会に参加すること、かかわることへの意欲がわいてくる教材」という特性を生かし、征韓論争のシミュレーション的な学習活動を中核にすることを通して、本学習単元の内容・活動を構成してみた。

(2) 「問題解決的な学習」の展開の工夫

①様々な見方・考え方を引き出し、生かす「学習問題」の工夫

歴史的な学習では、積極的な意味で地域社会で調べ活動を展開するのが難しいが、今回は、学習

の導入として、上野の山散策を取り入れてみた。西郷隆盛像、上野彰義隊の墓、東京国立博物館など、幕末維新期にかかわる史跡見学を契機に、この学習に入った。

- ・西郷隆盛像・・・なぜ、薩摩藩士だった西郷の銅像が東京の上野に立っているのか。
- ・上野彰義隊の墓・・・上野彰義隊が戦った戊辰戦争とはどんな戦争だったのか。
- ・東京国立博物館・・・国立博物館の前身の博物館は、内務省博覧会に向けて、博物会事務局に所属し、その後、内務省に移管されている。つまり国立博物館は歴史的に見ると、内務卿大久保利通の政治にも関係があったのである（註-4）。

以上のようにのように、西郷隆盛や戊辰戦争にかかわる子どもの疑問を引き出すことができる上野の山は、「大久保利通と西郷隆盛」の学習の導入を図る上で、好都合なフィールドと考えた。

②一人一人の学習のスタイルを生かす「学習活動」の工夫

—人物選択学習による、一人一人の児童の、興味・関心に基づく学習方法—

この学習では、大久保利通と西郷隆盛のどちらか一名を選択して、二人の明治の国づくりを調べる。征韓論争の学習マンガを学習の導入に使用して、自分なりに、大久保利通支持派か、西郷隆盛支持派か理由を考えて人物を選択するのである。この選択した人物の、生き方や、思い・願い、働きを調べることを通して、明治維新期の国づくりにとって、本当に大切な施策は何なのかを調べていくところが「個の学び」なのである。人物の、生き方や、思い・願い、働きを調べながら、支持する人物を変更することも考えられよう。ここでは、それも「可」なのである。それが、「より深い個の学び」の過程であるからである。

③自分なりの意思決定ができる学習活動

社会にかかわろうとする一形態として、「自分だったらどうするか」という、自分の合理的意思を決定する学習場面を「明治六年の政変—征韓論争—」を切り口にして設けた。

先述のとおり若干難しいことが予想できたが、資料を活用して、自分なりの考えを表現できることが大切と考えた。また、発表する際に自他の考えの違いを明らかにする工夫をしていきたい。この征韓論争の疑似体験的な学習活動を通して、二人の思いに迫るだけでなく、新しい世の中をつくらうとする苦勞の片鱗にでも触れることを通して、社会の一員としての自覚につながればと、考えた。

4 「新しい世の中をつくった人々（大久保利通と西郷隆盛）」 B 児の学習記録

(1) B 児の学習傾向

- 何事にも意欲的で、最後まで粘り付く良く取り組む。作業は大変丁寧である。
- 社会科では、調べ学習を好み、資料の収集や活用も十分に力を持っている。
- 話し合い活動でも、自分の考えをはっきりと、自分なりの考えに即して述べるができる。
- 反面、思いこみが激しいところや、自分の考えを容易に変えない面も見られる。

このB児は、征韓論争で、西郷隆盛を支持した。調べ学習の過程で、西郷隆盛支持派の多くの子どもが、大久保利通支持派に転向していく中で、頑なに西郷隆盛派であり続けた、希有な子どもの一人であり、興味深い一面を持っているので、観察対象児としたのである。

(2) 第1時の学習

—主な学習活動—

上野公園の西郷隆盛銅像と彰義隊の墓を見学し、自分なりに、江戸から明治へ時代が変わるころのことについて調べてみたいことを書く。

1998（平成10）年10月3日（土）。この日は、学年で、学年創造活動の時間割を、全て学級単位のフリータイムとした。本学級（6年1組）は、「新しい世の中をつくった人々（大久保利通と西郷隆盛）」の学習のスタートとして、台東区の上野山に、西郷隆盛銅像と彰義隊の墓の見学に出かけた。

歴史的な学習では、どの単元でも、地域社会を対象として、調べ活動を展開するのが難しい。そこで、

今回は学習の導入として、上野の山散策を取り入れてみた。西郷隆盛像、上野彰義隊の墓、東京国立博物館など、幕末維新时期にかかわる史跡見学を契機に、この学習に入ることにした。I-2-(2)でも示したように、「社会事象へのかかわり方」として、「課題を解決する調査の段階で、教室から飛び出し地域社会で調べ活動を展開して、『社会事象にかかわろうとする』ことこそ、社会事象にかかわろうとする」一形態ととらえている。本実践では、「課題を解決する調査の段階」ではなく、まさにそれぞれに「問い」を持たせるために、地域に出かけていったわけである。

西郷隆盛像の前で、「この銅像は、西郷隆盛さんです。銅像の様子や説明書きなどを見てみましょう。」とだけ、子どもたちに指示を与えて、観察活動を始めさせた。本来ならば、西郷隆盛像を観察する様々な観点を与えた上で、観察に望ませることが大切なのであろうが、子どもたちはすぐに自分の目で銅像を見たがっている。だから、まず、「社会事象」に出会わせてみるのがあっていいだろう。実は、西郷隆盛像の観察だけでなく、後から述べる、彰義隊の墓を見せた後の、話し合いに意味があるのである。

B児は、西郷隆盛像を観察して、
 ○かっこう（格好） ○石碑（の説明）
 ○どんなことをしたのか ○疑問
 の、4観点で記録をしている。

ここで、B児は、「どんなことをしたのか」で、「徳川家康をたおして新しい世の中を作ろうとした」という点と、「疑問」では、「西郷隆盛の身分は何か」という点と「なぜ、鹿児島の人が都心にいるのだろうか」という点、つまり、幕末から明治維新の時代状況にかかわる点についての疑問を抱いている。

次に、西郷隆盛像のすぐ横にある、彰義隊の墓を見学した。B児は、彰義隊の墓を観察して、彰義隊の行動や、墓の由来を調べ、「一墓一 新しい世の中に反対し、当時は悪者だったために、墓石に彰義隊と入れられなかった。」と、明治時代当時の、彰義隊の評価について記している。調べている最中に、子どもたちの間から、「かわいそう」という声が何度も聞こえ、それぞれに、心に残ったようである。そして、B児は、墓の横にある墓の管理者（彰義隊の子孫の方と伝えられる）の家を訪ね、彰義隊の資料「上野彰義隊事跡」と絵はがき「上野戦争錦絵-東台大戦争之図-」を購入している。

次に、見学場所を移動して、東京国立博物館に行った。先述したように、国立博物館は歴史的に見ると、内務卿大久保利通の政治にも関係があった。この東京国立博物館の見学では、先の西郷隆盛像や彰義隊の墓のように、直接「大久保利通」という人物の「生き方・思い・願い・働き」には、ふれることはできないのであるが、これから学習をする、「征韓論争」の伏線としての意味は十分にあると、当初考えていた。なお、東京国立博物館見学前に、大久保利通が設立に関わったこと、大久保利通と西郷隆盛は、同郷の生まれで、江戸幕府を倒す運動に一緒にかかわったことは、はじめに知らせておいた。



▲西郷隆盛像の見学



▲彰義隊の墓見学

B 児の見学のノート 10/3 社会科見学

10/3 社会科学習

西郷 隆盛 銅像

- 銅像 -
 - ・名を冠している
 - ・刀を刺している
 - ・火がいている
 - ・火がいている

高さ 180cm
体重 1.10kg



- 石碑 -

1827年鹿兒島に生まれる。戦いで戦死される。1877年西南戦争。戦後7ヶ月余り、川に流されて成山にて自決した。この銅像は、隆盛の旧友 吉井友実が制作したものであり、樹下陽金のほか有志二万五千人の募金を得て明治26年起工。同30年竣工。我が国彫刻界の巨匠高村光雲の作である。

- どんなことをしたのか -

徳川家をたおして新しい世の中を作った。

- 疑問 -

西郷はどんな身分か？

予想 武士だと思ふ。

理由 藩主にならなかつたし、西南戦争を起した人だから。

なぜ鹿兒島の人か 都心にいるのだからか。

彰義隊の墓

- 彰義隊とは -

武士と朝廷の政治をしようと 幕府だけを打倒し人達と上野の山で戦った隊。

- 墓 -

新しい明治の世に反対し、当時は悪者だ、たまたま、墓石に彰義隊といわれなかった。

2つを見学して調べたかと思ふこと

- ・おもしろいから分らなかったのか？ ちと 細かく知りたい。
- ・なぜ新しい世の中を作ろうとしたのか？
- ・この時代の様子でできごと。

東京国立博物館

- 見学所 -

表裏館

- 感想 -

昔の人達の使ったものはかりで、説明を見たら 考えもしなかつたことが出ていたり。どこかこんな発想が出てくるのかな？と思ふ。

B 児の見学のノート

社会科学習をしての感想

私は西郷隆盛は何をしでかしたか全然知りませんでした。でもどんなことをしたのかと大きな像を見て少し分かりました。彰義隊の墓は上野によく行くのに初めて見ました。実行する人がいれば反対者がいるというのは、いつの時代も一緒だと説明を読んで思いました。

私はこの2つを見て、賛成者と反対者がいるから歴史になっていくのだと感じました。

そして、社会科学習を終えて、まとめとして書いたのが左のノートである

「実行する人がいれば反対者がいるというのは、何時の時代も一緒だと、説明を読んで、思いました。わたしは、この二つ（西郷隆盛像・彰義隊の墓—筆者註）を見て、賛成者と反対者がいるから歴史になっていくのだと感じました。」と書いている。

これが、既習の学習で培ってきたB児なりの歴史的な「見方・考え方」の一端なのであろう。

(3) 第2時の学習活動

主な学習活動

上野の西郷隆盛像・彰義隊の墓・東京国立博物館見学で分かったことや、疑問に思ったことをもとにして、学習問題をつくる。

第2時では、社会科学習のまとめとして書いたものをもとにして、疑問として残ったこと、もっと詳しく調べたいことを、意見として出し合った。

C1: 「戦わずに、新しい時代はできなかつたのか？」

C2: 「なぜ、この人たちは戦ったのか（なぜ、彰義隊の人たちは西郷隆盛をきらったのか）」

C3: 「彰義隊（徳川15代将軍慶喜の部下）と西郷隆盛たちの関係はどうなっているの？」と、発言が続く。

C4: 「なぜ鹿兒島の人である、西郷さんの像が、上野に建てられているのだろう？」

C5:「西郷さんの銅像は、鹿児島にもあるんだよ。ぼくは、この夏休みに見てきたよ。
 一同:「エーっ」と驚きの声。
 T:「本当です。こちらを見て」と、鹿児島にある西郷隆盛像の写真を見せる(註-5)。
 C6:「鹿児島の銅像は軍服姿だ。」
 C7:「上野の銅像は浴衣姿で、犬まで連れていて、全然様子が違う」

と、西郷隆盛の銅像の話題で盛り上がった後、B児も、ノートに書いているように、幕末から明治時代に時代が移っていく頃の、時代の様子や、西郷隆盛や大久保利通に代表される、徳川幕府を倒していった新しい国づくりを進めていった人々の願いや行動を調べたいという意見が大勢を占めた。

授業者としては、「大久保利通と西郷隆盛—征韓論争—」に学習を進めたいという思いが強かったが、子どもたちの幕末から明治時代に至る過程をもっと知りたいという願いを受け止めていくことも大切と考えた。

— 学習問題1 —

江戸幕府をたおし、明治の新しい国づくりを進めた人々は、どんな願いをもち、どのようなことをしていったのだろう。

— 学習問題2 —

大久保利通と西郷隆盛は、どのような思いや願いをもって、明治時代の新しい国づくりを進めたのだろう。

そこで、ここでは、学習問題を二段階にして、学習を進めることを子どもたちに提案した。即ち、小単元前半は幕末から明治維新まで、小単元後半は明治維新から西南戦争までと、時代を区分し、小単元前半の幕末から明治維新まででは、倒幕・維新に関わった多くの人々の願いや、行動を調べ、小単元後半では、大久保利通と西郷隆盛の明治の期待する国家像の違いに目を向けさせていくことにしたのである。学習問題は、子どもたちと話し合っただけで左のようにした。

学習問題と、学習の手順を確認したところで、資料集(文溪堂 平成10年度版P.60)で、ペリーが来航して開国したころの様子を確認した。

B児は、このころの日本のイメージを次のように書いている。

— B児のノートより —

幕府は・・・弱い、まとまりがない、決断力がない。外国の強さが分かった。

B児は、このようなキーワードで、このころの日本の様子や幕府の様子のイメージをもった。つまり、江戸幕府に力がなくなってしまったことが、西郷隆盛たちに反抗されてしまう理由と、とらえるのである。次の時間から、幕府に対抗する人々の願いや、思いを調べていった。

(4) 3～5時の学習活動

— 主な学習活動 —

明治の新しい世の中をつくった人々の相互の関係を調べ、時代のイメージを、キーワードにして表す。




ここでは、幕末から明治時代にかけて活躍した様々な人物たちの、人物関係図(註-1)をすることによって、学習材の視点「①人間の生き方(思い・願い)」、「②人間の働き」、「③人と人とのかかわり」を追求できるようにしようと考えた。

そこで、ここで用いた学習方法は、開国から明治の新しい世の中へと 急激な変化を推し進めた、下の□の中、の人々について調べ、それぞれの人物の関係を調べる学習である。

【人物】○は学習指導要領に例示されている人物

幕府……徳川慶喜、○勝海舟、井伊直弼	公家……岩倉具視、○明治天皇
薩摩藩……○西郷隆盛、○大久保利通	長州藩……吉田松陰、○木戸孝允、高杉晋作
土佐藩……坂本龍馬	佐賀藩……江藤新平 など

B 児は、生活班の他の 3 人の友達と 4 人で、人物を分担し、岩倉具視・明治天皇・木戸孝允について調べ、人物カードを書くことになった。以下は、B 児が書いた人物カードである。また、その下に書かれているのは、B 児がそれぞれの人物を調べた後で、自己評価として書いたコメントである。

<p>人物名 岩倉具視</p> <p>似顔絵を描こう</p> 	<p>人物名 明治天皇</p> <p>似顔絵を描こう</p>  <p>私は教員の仕事をして、教育勸励を作りたい。</p>	<p>人物名 木戸孝允</p> <p>似顔絵を描こう</p>  <p>私は西郷さんや大久保さん達と力を合わせて、明治維新を成功させたい。</p>
<p>人物の紹介 思いや願い・果たした役割</p> <p>岩倉具視は、幕府の公家の子に生まれ、明治天皇に付き従った。比叟の幕府と朝廷の両方をよく知っていた。皇女和宮を長年、養育し、結婚させるために努力した。その結果幕府は、幕末を生き延び、公家たちの先頭にたて、海軍を整え、大久保利通らと共に明治政府を築くことになった。</p>	<p>人物の紹介 思いや願い・果たした役割</p> <p>1962年、孝明天皇の御子、16歳で天皇の位につかれました。1868年、明治天皇は、国民と力を合わせるおつもりで、内閣の五カ条の憲法をたて、政治の方向を国民にしました。また、江戸を東京と改め、月参を明治としたのもこの天皇です。1889年、天皇の御心遣いにより、憲法が制定され、大日本帝国憲法が制定されました。</p>	<p>人物の紹介 思いや願い・果たした役割</p> <p>長州藩(山口県)の下級武士の子として生まれ、はじめは、西郷隆盛といいました。田舎の松平村塾で学んだ。1854年、長崎に出て、蘭館で西洋の軍事を学ばせられた。孝允は幕府をたおして天皇をたて、新しい国をつくることを考えました。</p>
<p>気がかわって、幕府をたおそうとしたなんて…。</p>	<p>今までとは違って、国民と力をあわせて政治を行う世の中にしたことが分かった。</p>	<p>大久保さんと協力したなんて、世の中はせまい。</p>

次に、書き上げた人物カードを生活班の友達と、一枚の人物関係図にまとめる作業的な学習を行った(左下写真参照)。

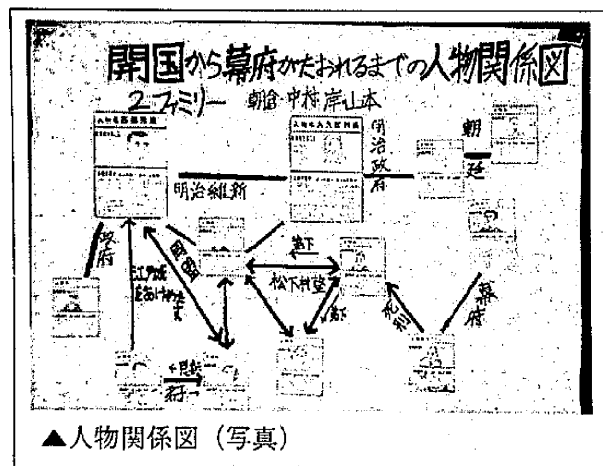
なお、左下の人物関係図を見ると分かるように、大久保利通と西郷隆盛の人物カードは大きいものを使った。追求する中心的な人物は、あくまでも、大久保利通と西郷隆盛であることを、意識させたかったからである。

この、人物関係図を作成する過程で、B 児は、次のように自己評価カードに書いている。

<p>①「Z 君が、中心的な人物。友達に知っていることを教えてもらって得した」</p>	<p>②「今日は、人物関係図が完成した。この時代は、何もかも話し合いをしていて、平和に見えるけれど、意見が割れていて、戦国時代よりも、すごい時代のような気がする。」</p>
---	--

①の記述からは、友達のもっている情報を教えてもらったり、また逆に、自分が調べた情報を友達に教えたりして、人物の働きを知ろうとしている姿がうかがえる。

②の記述からは、B 児が、明治維新の時代を戦国時代と比べながら、自分なりの社会の見方をもつ様子が読みとれる。



人物関係図に、人物相互の協力や対立などの関係をまとめたあとで、この時代の様子をキーワードにして表してまとめた。なお、B 児が①であげた Z 児は右下のようにまとめている。二人の時代の様子のとらえかたで共通しているのは、自然と「戦国時代と比較している」ところである。混沌とした時代、戦いや対立が多い時代であることを、既習事項と比較しながら、社会を見ようとする態度ができていのがわかる。

付け加えれば、Z 児は、「もし、ぼくがこの時代に生きていたら、西郷さん、大久保さん、木戸

さんと協力して明治維新を手伝いたいと思う」と、人物の生き方に共感する言葉が見られている。これは、Z児が選んだ人物に、西郷隆盛がいることと関係があると考えられる。

<p>開国から幕府が倒れるまでの 人物関係図を見て考えよう 開国から幕府が倒れるまでの時代は「こんな時代」だと思う 6-1 NO 名前 B児 ○色々な意見の人がいて、複雑な時代。 ○大きく分けて、新しい世の中を作りたい人と、今までと同じ世の中がいい人がある。 ○すぐに殺し合いをしないで、話し合っていて決めている。</p> <p>▲B児のまとめ</p>	<p>開国から幕府が倒れるまでの 人物関係図を見て考えよう 開国から幕府が倒れるまでの時代は「こんな時代」だと思う 6-1 NO 名前 Z児 ○この時代は、ほとんどの人が幕府に反対していて、幕府は、もう力がなくなっていた。 ○織田や豊臣の戦国時代よりもこの時代の、ほうが殺し合いがなく話し合いが多い。 ○もし、ぼくがこの時代に生きていたら、西郷さん、大久保さん、木戸さんと協力して明治維新を手伝いたいと思う。</p> <p>▲Z児のまとめ</p>
--	---

(5) 第6時～第8時のB児の学習活動

—— 主な学習活動 ——
西郷隆盛と大久保利通が進めようとした国づくりについて、自分だったら西郷・大久保のどちらの政策を支持していくか、考えて書き、支持する人物の働きや生き方について調べることができる。

ここから先は、観察対象児のB児の他に、B児と比較対照となるA児の学習の様子も時折記載する。A児は、大久保利通支持を変えなかった児童の一人である。しかも、熱烈な大久保利通ファンで、マンガ「るろうに剣心」の愛読者である。このA児とB児は、第10時に、「大久保利通派か西郷隆盛派か」で、大討論を繰り広げることになる二人である。

この学習の導入では次のような工夫をした。一度、開国から幕府が倒れるまでの時代を多くの人物を通して、学習をしてしまっている。大久保利通と西郷隆盛の人物カードは大きいものを使い、追求する中心的人物は、あくまでも大久保と西郷であることを、意識させてきたが、やはり、インパクトのある導入を考えた。

子どもが今まで学習してきた、「大久保と西郷は仲良し・協力してきた」という、見方が逆転してしまうような、導入の仕方として、「征韓論争」から学習に入った。

また、「征韓論争」自体の理解がかなり難しいので、マンガ「日本の歴史」に手直しを加えて、子どもに提示し、読むことにした。

<p>B児の学習活動（学習活動を□で囲んだ。） 発言・文章・書き込み・行動・作品</p>	<p>・支援（発問・資料提示・助言・自己評価へのコメント） ・研究主題との関連についての評価 ◎方法・態度面、■内容面</p>
<p>6 ・ 7 ・ 8</p>	<p>—— 主な学習活動 —— 西郷隆盛と大久保利通が進めようとした国づくりについて、自分だったら西郷・大久保のどちらの政策を支持していくか、考えて書くことができる。</p> <p>○明治6年の政変＝「征韓論争」で、西郷隆盛と大久保利通が、考えの違いから決裂してしまうことについて、考えを話し合う。</p> <p>資料提示：「征韓論争」自体の理解がかなり難しいので、マンガ「日本の歴史」に手直しを加えて、子どもに提示し、読むことにした。</p>

資料の一部

明治の新しい世の中をつつた人々 NO9 6— No 名前

西郷と大久保 ついに決別か? 明治6年の政変(征韓論争)



学習課題2

明治時代になって西郷隆盛と大久保利通はそれぞれ、どのような国づくりを進めようとしたのだろう。あなたは、二人のうち、どちらの考えを支持しますか。

- 6 ○学習問題について、調べる事項を考え、話し合う。
- 7 (1) 西郷隆盛・大久保利通のどちらの人物について調べるか。
- 8 **学習計画表の記述**

- ・西郷隆盛を支持する。
- ・理由…朝鮮を戦いで従わせようとするのは、あまり良いことだと思わないけれど、私は会議で決まったことを、いくら偉い位(の人)だからと言って、違った情報を伝える人は、今からの時代が怪しいし、あまりいいとはいえないから。

(2) 調べる視点

- ①明治になってから、実際に行った政策について
- ②どんな国づくりをしようとしていたのか、国づくりに対する考え方や願い・思いについて

◎西郷隆盛を支持した理由が、西郷の政策面からではなく、大久保が「会議で決まったことを」勝手に変えてしまうのは、「ずるい」からという、本人なりの正義感から来ている。◎B 児のような理由で、西郷隆盛を支持した子どもが大変多く、32名中、20名がB 児と同じ理由で、西郷を支持している。

参考 2・3・4組では、同じ展開で授業をしたところ、この1組とは逆で、ほぼ32名中20名が、大久保支持派であった。1組が特別なのかというと、そうでもない考える。「ずるい」からなどという、正義感から、人物を選択するのは、子どもらしい発想だと感じた。

むしろ、このあと二人の政策面を調べながら、2人のどちらが、よりよい政策なのかを、じっくり考えることが大切と考えた。

(6) 第6時～第8時の比較対象児・童 A 児の学習活動

<p>A 児の学習活動（学習活動を□で囲んだ。） 発言・文章・書き込み・行動・作品</p>	<p>・支援（発問・資料提示・助言・自己評価へのコメント） ・研究主題との関連についての評価 ◎方法・態度面、■内容面</p>
<p>— 学習課題 2 —</p>	
<p>明治時代になって西郷隆盛と大久保利通はそれぞれ、どのような国づくりを進めようとしたのだろう。あなたは、二人のうち、どちらの考えを支持しますか。</p>	
<p>○学習問題について、調べる事項を考え、話し合う。</p> <p>(1) 西郷隆盛・大久保利通のどちらの人物について調べるか。</p> <p>学習計画表の記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大久保利通を支持する。 ・理由…大久保さんは、国のことを考えている。ぼくは、国の中で考えがまとまってから、征韓しないと、あまり意味がないと思うから。 <p>参考 A 児は、人物関係図をつくる際に、大久保利通・木戸孝允・高杉晋作の3名を調べている。大久保利通については、「大久保さんは、とても心が強いことを知った」と、人物カードを書いた時に記している。大久保利通に対して強い共感の気持ちを持っていて、それは学習終了まで変わらなかった。</p>	<p>◎A 児は、大久保利通支持を変えなかった児童の一人である。しかも、熱烈な大久保利通ファンで、マンガ「るろうに剣心」の愛読者であった。マンガを通して、大久保利通のことを知っていたことと、この授業で与えた「征韓論争」のマンガを冷静に読んだことが、A 児の気持ちを、大久保利通支持に向かわせたと考える。</p>

学習シートの記述

▲調べ学習で使った資料のリスト

明治の新しい世の中をつくった人々 No23 6-1 A児

課題 大久保利通と西郷隆盛、明治になってからの様々な国づくりの政策を、どのような願いや思いをもって進めたのだろうか。

明治の新しい世の中をつくった人々 NO 23 6-1

問題 大久保利通と西郷隆盛は、明治になってからの様々な国づくりの政策を、どのような願いや思いをもって進めたのだろうか。

年	おこなったこと	西郷隆盛の国造りにたいする思いや願い	大久保利通の国造りにたいする思いや願い
1869	版籍奉還 各領地と人民を幕府に かえすこと。		政府の力を弱くしたい。 外国になかまほりできるような国に する第一歩
1871	廃藩置県 すべての藩をやめて、 府と県にわけ天皇の任 命した人がをこまめ にみる。		外国になかまほりできるような国にする 第一歩 天皇の任命した知事が県を治めるが、 少い吉しか減るというところから 弱い国
1871	アメリカとヨーロッパへ 行って 外国の文明を勉強して きて 外国の国を勉強して 来ると 外国の国を勉強して から それを 改正して 外国に いうために 行って。		外国に仲間入りできるような国にする第三歩 日本をもっと強いの国にする。
1873	徴兵令 士族下けて 平民から 兵をおつる。	士族をやろうには、お金がかかるから、 平民をやろう。政府の力を使おう。 また、士族をすてる。	アメリカ、ヨーロッパ。

大久保帰国
1873
5/6

A児の学習内容に関する考察

○学習シートに書かれていることは、一貫している。それは、「外国に仲間入りできるような国」である。「版籍奉還」・「廃藩置県」・「アメリカとヨーロッパへ」・「地租改正」の全てを、「外国に仲間入りできるような国」づくりの目標の一部と理解している。

だから、征韓論は、少なくとも明治初期の日本にとって、まだ不要のものと考えたのである。また、学習活動との関連では、大久保利通派と西郷隆盛派で、討論会をおこなうことを前提に学習をしていたことが、西郷隆盛派の友達を説得するための意欲になっていたことが分かる。例えば、第3回目-10/24の、「新しいぎもんや、まだ調べたいことに」は、「今度は西郷の意見をつぶすため、西郷の意見の人たちをつつけるようなことを調べたい」と記している。そして次の、第4回目-10/26には、「この一時間の成果」に、「徴兵令は、士族を捨てるようなもので、西郷は、これに賛成していた」と、まさに西郷派の急所を突くような発見をしている。これは、学習シートの「徴兵令」にも、書いていることと一致する。

この討論会に向けた調べ学習は、大久保利通の正当性を西郷派に納得させようとする意欲につながると共に、西郷の矛盾点を探るような視点をA児に持たせたと考えられる。

(7) 第9時の学習活動

主な学習活動

西郷隆盛と大久保利通の国づくりで、明治の初期に、最優先するべき課題は何だったのかについて考え、政策にランキングとその理由を書く。

以下の表は、B児・A児・S児が書いたランキングシートである。なお、S児は、B児・A児と同じ生活班に所属する児童である。

		B児－西郷派	A児－大久保派	S児－西郷派
1位	政策	軍隊の整備拡大・朝鮮出兵	国をまとめる（版籍奉還・廃藩置県）	徴兵令
	理由	朝鮮よりも強い国は、清だけなんてくやし、国書を受け取ってくれないなんてひどいから日本の強さを見せつける。	領地と人民を朝廷に返させ、藩をなくし、県をおき、天皇の任命した人がそこを治めるから、国がまとまる。	もしかしたら（士族が）反乱を起こすかもしれないので、軍隊を強くしておく。
2位	政策	版籍奉還・徴兵令	収入を安定させる（徴兵令・地租改正）	版籍奉還
	理由	新しい時代の政府が力を強め、外国が攻めてきても負けない国にする。	徴兵令で、国の払っていたお金を減らし、地租改正でお金を集めるから。	はじめに徴兵令で反乱のおそれはないので、次に藩に対する政府の力を強くするため。
3位	政策	地租改正	西洋文明を取り入れる。	地租改正
	理由	お金で払うことで、国の収入を安定させ、新しい国づくりの資金にする。	日本は西洋に比べて、工業などいろんな面で遅れているから。	そして、政府の収入を安定させた方がいい。大久保は、地租改正が終わった後に、自分の計画を進めるから。なので、最終的に、収入を安定させる。
それぞれの児童の考え方に対する考察		B児の考え方は、西郷派と言いつつ、西郷隆盛自身とは違う。西郷自身は、士族の不平をそらすために、朝鮮問題をうまく利用しようとしたが、B児は朝鮮が国書を受け取らないということ自体に大きな不満を抱いている。極めて感情的で、この時点で西郷が朝鮮に出兵しようとした意図から離れ始めている。	A児は、大久保派で、しかも「大久保様」と呼ぶぐらい、大久保好きである。そのせいか、大久保が実際に行ってきたことを、よく調べ、一つ一つの政策の意味も良く理解している。特に、徴兵令の意味は、「強兵」という意味だけでなく、武士の家禄をなくすという「財政面」からも考えている。論理的に考えているのがうかがえる。	西郷が、士族の反乱をおそれていたことに着目をして、まず、徴兵令で士族を押さえようとする。しかし、この段階で、士族の仕事を益々減らしていることには、気づいていない。しかし、徴兵令→版籍奉還→地租改正の順序は、S児なりの考え方の筋道が見える。

(7) 第10時の学習活動

主な学習活動

明治の新しい日本の国づくりに対する考え方について、大久保と西郷のどちらの考えを支持するのか、明治のはじめの優先課題について、自分なりの考えを書いたり、発表したりする。

①大久保派か西郷派か グループでの話し合い

明治初期の日本の政治の優先課題について、政策のランキングとその理由を、グループで話し合った。下は、B児、A児、S児の話し合いの様子と、その考察である。

B児・A児・S児の話し合いの様子	話し合いについての考察
<p>B児：Sくんへ。あなたは、西郷派なのに、どうして朝鮮出兵を一位にしないの？</p> <p>S児：徴兵令を出して、軍隊を強めて、国を強くしてから朝鮮へ出兵するんだ。</p> <p>A児：出兵が先だと国がまとまらないよ。国中の意見をきちんとまとめて、国を安定させて朝鮮をすぐに攻めずに、まず西洋文明を取り入れなくちゃ。とにかく、国の中がまとまっていないのだから、攻めても無駄ですよ、出兵をしても負けてしまうよ。</p> <p>B児：それは逆で、朝鮮を攻めることで、まとまるよ。</p> <p>A児：国内が対立しているんだから、まとめないといけない。まあ、朝鮮を攻めてもいいけど。</p>	<p>この段階の話し合いは、まず、自分自身のカードを読んで、自分の主張を明確にすることにあつた。B児とS児は、西郷派で、朝鮮に出兵するという最終目標は同じだが、すぐに出兵するのか、兵を強くしてから出兵をするのかの違いがあり、大久保派のA児が、中心に話を進めてしまう。B児は、一応の反論を試みるが、それ以上、朝鮮出兵をするとは、主張しなかった。</p>
<p>S児：「国を強く」を一番にしよう。つまり、徴兵令をだしたり、西洋文化を取り入れたりすることを、先にやろう。</p> <p>A児：だめ、まず国内をまとめてから。版籍奉還と、廃藩置県を最初にやろう。</p> <p>ここで、ランキング1位は、「国をまとめる」とした。</p>	<p>ここで、S児が言う「国を強く」とは、徴兵令のことである。A児の言う「国内をまとめる版籍奉還と廃藩置県」も、国を強くすることなのであるが、A児は、国を強くするというよりは、「江戸時代のようなバラバラな国ではなく、まとまったものにする」という意識で使っている。</p>
<p>B児：そのためには、徴兵令と地租改正で、お金を集めてから。</p> <p>B児：徴兵令と版籍奉還を入れよう。</p> <p>A児：この二つはどういうつながりなの？</p> <p>B児：収入を安定させるというつながり。</p> <p>A児：地租改正もそうだよ。</p> <p>S児：どうして、徴兵令が、収入を安定させることになるの？</p> <p>A児：徴兵令には、二つの意味があるから。一つは、武士の家禄（給料）をなくして、政府のお金を増やす意味。もう一つは、国を強くする意味。</p> <p>S児：それなら、一緒にしよう。</p> <p>ここで、ランキング2位に収入安定（徴兵令と地租改正）が入る。</p>	<p>A児は、1位の「国をまとめる」は、「版籍奉還と廃藩置県」だと理解しているが、B児は、「廃藩置県のことだけ」だととらえていて、話し合いにズレが生じている。</p> <p>B児は、「徴兵令と版籍奉還を入れ」ることで、「政府が力を強め、外国が攻めてきても負けない国にする」ことをねらっていたのに、この話し合いの中で「収入を安定させる」と発言している。その曖昧さは、A児の、「徴兵令には、二つの意味があるから」という説明の前に、すぐに説得されてしまう。</p>
<p>A児：次に、日本は遅れているから、西洋文明を取り入れよう。そして、国を強くしよう。それから、軍隊を整備して、出兵した方がいい。だから、西洋文明を取り</p>	<p>ランキングの1位と2位が、A児の考え方で、通ってしまったので、3位も、A児主導のもと、決まっていた。</p>

入れるが3位、軍隊の整備が4位になる。

B児：そうだね。

A児：大久保派の考え方でも、朝鮮出兵を認める立場（国を強くして）と、出兵を認めない立場と、二通りあることが分かった。

○この後、A児がこのグループの、話し合いの様子を学級全体に報告する。

順位	政 策 名
1位	国をまとめる版籍奉還と廃藩置県
2位	そのために収入安定（徴兵令と地租改正）
3位	西洋文明を取り入れる
4位	軍隊の整備して国を強くして出兵

次に、そのほかの2つのグループの発表も聞く。

【2ファミリーの発表】

順位	政 策 名
1位	収入の安定（地租改正）
2位	権力集中（廃藩置県・版籍奉還）
3位	産業を進める（日本は遅れている）
4位	徴兵令

【3ファミリーの発表】

順位	政 策 名
1位	国をまとめる版籍奉還
2位	青少年の教育
3位	朝鮮に日本の考えを伝える（開国・話し合い）
4位	アメリカ・ヨーロッパへ（近代的な国家・不平等条約の改正）

この学習の最後で、筆者が、次のように子どもたちに問うたときの反応

T：今日の学習で言いたいことを言えた人？

⇒ B児・A児・S児全員が挙手をする。

T：納得したかどうかは、ともかく、相手の言う内容が理解できた人

⇒ B児のみ挙手をした。B児は、「えっ、理解したからランキングしたんでしょ？」とつぶやいた。

B児もS児も、A児の説得に、納得して話を進めているので、むりやり押しつけているという感じはしない。むしろ、S児は、国を強くするためのプロセスのあり方をA児の理論の展開から十分に学んでいる感じさえする。また、最もA児と違う考え方をしてしているB児が、A児の考えに納得をした理由は、大久保を支持している考え方の中に、朝鮮出兵を認める考え方があることを発見したことがある。

【2ファミリーの発表】に対する質問が、1ファミリーからあった。

Q：民衆がまだ、政府のものになっていないのに、どうして、税金を集められるのですか？

A：うーん。まあそのあたりは、大目見て。

という具合で、論理的には甘い部分があった。

【3ファミリーの発表】

発表をしたK児は、朝鮮に出兵をする前に、日本を発展させていくために「青少年の教育が必要」と。「朝鮮と平和的に話し合いをしよう」と、主張する。このグループは、西郷派が優勢に、話し合いを進めていることがわかる。つまり、西郷も、単にすぐ出兵したいということを言いたいのではなく、平和的に朝鮮と交渉をしたかったという解釈もできるであろうという、3ファミリーの提案である。

②話し合いの成果

上のように、学級全体で発表を行い、他のグループの考え方についても学び合った成果はあったのだろうか。この学習の最後には、西郷と大久保どちらを支持するのかを、最終的に決めて、自己

評価を行った。それが下の表である。

まずはじめに、B児の自己評価カードを紹介してみよう。

(ア) B児の自己評価カードから

月/日	この時間のめあて	この時間の一番の成果	新しいぎもんや、 まだまだ調べたいこと
10/29	ーやりたいことー ファミリーで、交 換しあって、他の 人の考え方を知り たい。	大久保派の中にも、国を強くして 朝鮮へ、行く意見と、絶対に行かな いという意見があって、私は国を強 くして、確実に勝つようにするとい うのがいいと思った。	このあと朝鮮とは、どのよう にかかわったのか。 ⇒国書は受け取ってもらえたの か。 ⇒日本の位はどこへんにあがっ たのか、下がったのか。

【考察】 「この時間の一番の成果」の欄に注目したい。B児は基本的には、朝鮮に出兵するという考えを基本的に変えていない。しかし、朝鮮出兵をするためには、国力を高めることが必要で、そのためには、版籍奉還・廃藩置県・徴兵令などの一連の諸改革が必要であるという、A児の主張を認めたのである。この話し合いでのB児の大きな変容である。

また、「新しいぎもんや、まだまだ調べたいこと」の欄に記しているように、自分たちがさんざん議論してきた征韓論の行方について、実際に日本と朝鮮の関係はどうなったのか知りたがっている。このような姿も社会事象にかかわろうとする一つの姿であろう。

(イ) A児の自己評価カードから

月/日	この時間のめあて	この時間の一番の成果	新しいぎもんや、 まだまだ調べたいこと
10/29	自分の考えを 言って納得させる。	大久保の中で朝鮮出兵をしない意 見と、してもいいけど、ほくのよう に、国を強くしてから(出兵しよう) など、二つの考え方があることを 知った。 また、西郷の朝鮮出兵には、戦っ ているうちに、対立していた人たち と、仲良くするねらいがあったこと を知った。	なぜ、日本は、朝鮮を攻めるこ とにしたのか、話し合いなどでは すまない理由があったのか。

【考察】 「この時間の一番の成果」の欄を見ると、2ファミリーの発表を聞いたB児は、大久保派でも、二通りの考え方があることに気づいたことが分かる。B児自身は、国をまとめた後に朝鮮に出兵をするという、大久保利通そのものの考え方であるが、2ファミリーの発表では、同じ大久保派の友達も、朝鮮出兵をしないといっているのである。「るろうに剣心」を読んでいたB児は、征韓論争の結論が朝鮮出兵であったことを知っていたと推察できるが、同じ大久保派でも考え方に違いがあることを知ったことは見方を広げられたと考える。

なぜなら、B児は、「国力向上⇒朝鮮出兵」という歴史の流れそのものに対して、歴史的事実なのだから、疑いを持っていなかったからである。その裏付けとなるB児の素直な疑問が、「新しいぎもんや、まだまだ調べたいこと」の欄に記してある「なぜ、日本は、朝鮮を攻めることにしたのか、話し合いなどではすまない理由があったのか」という文である。朝鮮出兵は歴史的事実であるが、本当に日本にとって、朝鮮出兵が必要だったのであろうかという、歴史に対する根元的な問いを発しているのである。A児にとっては、これからの追求が本来的な問題解決的な学習の始まりなのであった。

(6) 第11時の学習活動

— 主な学習活動 —

日朝修好条規と西南戦争について資料で調べ、征韓論争後の西郷と大久保の行動について感想を書いたり話したりする。

この時間の学習の課題は、

- ①B 児の疑問「このあと朝鮮とは、どのようにかかわったのか。」について、
- ②大久保利通と西郷隆盛の関係は、最終的にはどうなったのかについて、調べることにした。

- ①大久保が結んだ日朝修好条規の内容を調べ、感想を話し合う。

この学習では、『明治太平記』の江華島事件の絵、日朝修好条規の条文、日米修好条約の条文を資料として学習を進めた。

B 児は、西郷隆盛ではなく、大久保利通が朝鮮に出兵したことに大変驚いていた。しかも、軍艦雲揚号は釜山沖で砲撃練習を始めたのは、征韓論争の起きた1873年10月から、わずか1年半しかたっていない1875年5月であったたから、益々驚きは大きくなるばかりであった。

次に、江華島事件の結果、日本と朝鮮間で結んだ日朝修好条規の内容をくらべてみて、B 児は、「アメリカと結んだ条約とそっくり、やつあたり」と書いている。子どもにしてみれば、アメリカと結ばされた、日米修好通商条約で日本は苦しんでいる立場なのに、どうしてそれを、朝鮮に押しつけたのかという素朴な疑問を持つのである。

次は、学習のまとめに、B 児が書いた学習シートの内容である。B 児は、西郷派らしく西郷隆盛になったつもりで、大久保利通に次のように訴えている。

— B 児—西郷派 —

課題：^{カンファド}江華島事件と日朝修好条規のことを調べて、大久保さんにどんなことを言いたいですか。下に自由に書いてみましょう。

大久保さんへ

大久保どん、ずるいでゴアス。(i)朝鮮への攻撃は、私の案ですよ。せめて、私を誘うことぐらいしてもいいではないですか。私の一番の楽しみを、ぶんどる大久保どんは、私の友達とは言えないでゴアス。

その上、アメリカとの変な条約を結ばれた日本は、いやな思いをしているのに、大久保どん、あなたはそれを朝鮮にやっているのですよ。これでは、仲が悪くなるばかり、朝鮮の政府、国民から批判が出てもおかしくないですよ。(ii)これがあなたの国づくりですか。

(下線は筆者)

西郷より

【考察】 下線 (i) では、征韓論は自分のアイデアだったのにそれを横取りされたことへの腹だたしさを表明している。実に単純であるが、この学級の西郷派の子どものほとんどが、このB 児と似たような反応を示した。

征韓論争で一度決まったことをむりやり逆転されただけでなく、^{カンファド}江華島事件で、自分のアイデアまで横取りされたことは、西郷隆盛自身にとってみれば、実に口惜しいことであつたろう。この、B 児の反応は、その西郷隆盛の気持ちをよく考えた上で書かれたものと考えられる。

下線 (ii) については、西郷隆盛自身に寄り添った感想から、突然、B 児自身の感想に変わってしまっていることが読みとれる。このことは、B 児は立場を西郷派に決めてから、朝鮮出兵を至上命題としてきたが、この学習の一番はじめに (P.62参照)、「朝鮮を戦いで従わせようとするのは、あまりいいとは思わないけれど…」と書いていたことからわかる。本来的には、B 児は、武力で外国—朝鮮—を従わせようとするには反対の立場であったのに、大久保利通の征韓論争における話し合いの進め方に対して納得できない故に、敢えて西郷派になってしまった経緯を考えれば、西郷隆盛の気持ちを表

現したり、自分自身の考え方そのものを表現したり、双方を行き来している姿が浮かんでくる。

先述したように、はじめは20名以上いた西郷隆盛派は、調べ学習を進めるうちに、西郷隆盛の明治政府における役割の不透明感を理由に、大久保派に転向を余儀なくされる。西郷派にとどまった、12名も「朝鮮出兵」をランキングの1位にしていないのである（下の座席表参照）。

これら、西郷派から大久保派に転向する子どもが続出する事態は、歴史や政治では、単に理想やロマンだけでなく、現実的な問題に対処できる人の働きが大切であることを子どもたちが学び始めた端緒と考える。

1998. 10. 29 新しい世の中をつくった人々 座席表資料
 前時に学習した内容：課題「明治のはじめに行う国づくり政策優先順位」

8年1組 岡田節子
 座席の番号は児童番号、☆は特別児童、西郷は西郷隆盛派を表す。

7		5		3		1	
45.	8. 西郷	40.	5.	35. 西郷	7.	46.	1.
1. 地租改正 2. アメリカ・ヨーロッパへ 3. 朝鮮派遣	1. 収入安定 2. 朝鮮派遣・朝鮮派 3. 外債に於いて度 4. 徴兵令	1. 争いをおさめること 2. 新しい政府の収入の安定 3. 産業量の近代化	1. 朝鮮派遣 2. 徴兵令 3. 地租改正 4. 徴兵令	1. 外国に適用する青少年の教育 2. 日本の考えを知らせるための韓国訪問	1. 朝鮮派遣 2. 徴兵令 3. 徴兵令 4. アメリカとヨーロッパへ	1. 朝鮮派遣 2. 徴兵令 3. 地租改正 4. 徴兵令	1. 地租改正 2. 軍備を整くする 3. 徴兵令 4. 徴兵令
37. 佐野	8. 西郷	41. 西郷	★12. 西郷	39.	15.	32.	10. 西郷
1. 協力をして新しい政府（朝鮮派） 3. 徴兵令 3. 朝鮮派遣	1. 地租改正 2. 外債派遣 3. 徴兵令 4. 徴兵令	1. 日本の収入を安定させる。 2. アメリカ・ヨーロッパの文化を取り入れて産業をすすめる。 3. 朝鮮を攻める。	1. 朝鮮派遣・徴兵令 2. 地租改正 3. 徴兵令 4. 花柳戦争	1. 農民・士族・政府が得する政治 2. 国の安定 3. 外国と仲良く（不平等条約）	1. アメリカとヨーロッパへ 2. 徴兵令 3. 徴兵令 4. 地租改正	1. アメリカ・ヨーロッパへ 2. 朝鮮派遣と徴兵令 3. 地租改正 4. 徴兵令	1. 朝鮮派遣 2. 徴兵令 3. 徴兵令 4. 朝鮮出兵
8		6		4		2	
★35.	★14.	★37.	★13. 西郷	★43.	2.	★44.	3.
1. 朝鮮派遣と徴兵令 2. 地租改正 3. アメリカ・ヨーロッパへ 4. 徴兵令 5. 徴兵令・旅行の自由	1. アメリカ・ヨーロッパへ 2. 徴兵令 3. 朝鮮派遣	1. アメリカ・ヨーロッパへ 2. 日本の文化を知らせる。 3. 朝鮮派遣・徴兵令	1. 徴兵令（徴兵令） 2. 徴兵令 3. 朝鮮派遣 4. 徴兵令	1. 徴兵令 2. 徴兵令 3. 地租改正・徴兵令 4. 徴兵令	1. 国を支えよ（朝鮮派遣・徴兵令） 2. 収入安定（徴兵令） 3. 国を強くする（兵を増やす） 4. 西洋文明を取り入れる	1. 朝鮮派遣 2. 徴兵令 3. 地租改正 4. 徴兵令	1. 外国の産業のよいところを知る。 2. 外国のようになるようにする 3. 徴兵令 4. 徴兵令・朝鮮派遣
★42. 西郷	16.	34. 西郷	★11.	47. 西郷	★9. 西郷	31. 西郷	★4.
1. 外国のお手本を採り 2. 政府を養える一 3. 地租改正 4. 朝鮮派遣	未記入	1. 外国の遣人だ赤明を取り入れる。 2. 土地と人民を政府のものにする。 3. みんなの立場を同じにする。 5. お金を集める	1. 国を安定させる 2. 兵力を上げる 3. 外国交際	1. 軍備の増強と大韓館出兵 2. 朝鮮派遣・徴兵令 4. 地租改正	1. 徴兵令 2. 朝鮮派遣 3. 地租改正	1. お金を集める 2. 軍を強くし、韓国に攻める 3. 産業をすすめる	1. 朝鮮派遣・徴兵令 2. 地租改正 3. 産業をすすめる 4. 徴兵令

次に、大久保派であったA児の反応について、記したい。

— A児—大久保派—
 カンファド
 課題：江華島事件と日朝修好条規のことを調べて、大久保さんにどんなことを言いたいですか。下に自由に書いてみましょう。

大久保さんへ

ぼくは、大久保様が朝鮮を攻めることは、分かっておりました。しかし、日朝修好条規は、アメリカと結んだ条約のようじゃありませんか。私は、この条約を、もっと朝鮮と平等にしてから、外国の仲間入りをした方がいいと思います。

A より

【考察】 A児は、日朝修好条規のことを、調べ学習の段階から知っていた。しかし、日本が朝鮮出兵をした本当の理由を知りたがって、前時に「なぜ、日本は、朝鮮を攻めることにしたのか、話し合いなどではすまない理由があったのか」と書いて、考え方に変化が見られた。つまり、ランキングの時の話し合いまでは、最終的には朝鮮出兵をおこなうという立場であったが、「私は、この条約を、もっと朝鮮と平等にしてから、外国の仲間入りをした方がいい」と、最終的には、日本と朝鮮は、平等になることを望むようになってきているのが分かる。

つまり、A児は、国をまとめて強くするためには、朝鮮に出兵したり、日朝修好条規を結んだりする必要があったのだろうかという疑問をもっているのである。この疑問に対する答えを見つけるのは小

学生では難しい課題と感じる。しかし、この変容は、A児自身が、友達の多様な考え方に触れながら、考え方を变化させ、本当の自分の疑問を見つけていった「より深い個の学び」の過程であったと考えられる。

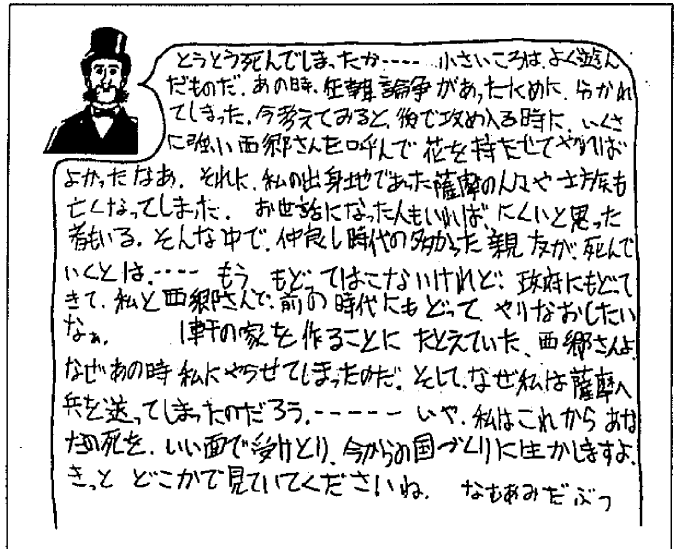
②大久保利通と西郷隆盛の関係は、最終的にはどうなったのかについて、西南戦争が終わったときの大久保の気持ちを想像して話し合う。

B児は、日朝修好条規について学んだときに「私の一番の楽しみを、ぶんどる大久保どんは、私の友達とは言えないでゴアス」としてしている。やはり、二人の最終的なつながりについてふれないわけにはいかない。

この単元の最後は、大久保利通と西郷隆盛の最後の対決となった、「西南戦争」を取り上げた。西南戦争の流れについては、「学習漫画」を用いて、子どもたちと読んで確認した。そして最後に、西南戦争が終わったときの、大久保利通の気持ちを想像して学習を終えた。

右は、B児の学習シートである。西郷派であったB児は、大久保利通の立場にたったときも、西郷の死を後悔する言葉を並べてはいるが、最後の3行に見られるように、「西郷隆盛の死を無駄にしないで、これからの国づくりに生かしていこう」と決意を述べている。

西郷隆盛の思いを考えてきた子どもだけに、単に大久保利通批判や、西郷隆盛賛美に終わってしまうのではないかという危惧を感じていたが、最後まで西郷派を通し続けたB児も、大久保利通の立場になったことによって前向きに考えている。



VI 実践事例3 「日本と朝鮮半島の交流の歴史」の概要

— 韓国人との交流や韓国人への発信を通して、国際交流のあり方について考えを深めた事例 —

1 単元名 「日本と朝鮮半島の交流の歴史」(註-1)

2 小単元の目標と評価規準

(1) 単元の目標

仏教や様々な大陸文化の伝来、室町時代の朝鮮通信使、雨森芳洲と朝鮮通信使、征韓論争、伊藤博文と安重根などの、日本と朝鮮半島の国々の交流にかかわった人々の、思いや願い、その人の働きなどを調べることを通して、未来の交流もふくめて日本と朝鮮半島の交流のあり方について、考えたことや感じたことを、書いたり話したりすることができる。

(2) 観点別評価規準

観 点	評 価 規 準
社会的事象への 関心・意欲・態度	日朝交流の歴史に、願いや思いをもって尽くした人々の働きに興味をもち、意欲的に調べ、調べたことを友達と学び合い、考えを深めようとする。
社会的な思考・判断	日朝交流の友好の歴史を築くために尽くしてきた様々な人々の役割について考えると共に、これからの日朝交流で自分が果たせることについて、考えようとする。
観察・資料活用の 技 能 ・ 表 現	様々な資料を効果的に活用して、日朝交流の歴史に尽くした人々の思いや願い・働きについて調べ、効果的に作品に表現しようとする。
社会的事象についての 知 識 ・ 理 解	日朝交流の歴史には、様々な人々の思いや願い、働きがあったことがわかる。

3 研究主題との関連について

(1) 人物を中心にした日朝関係の学習材の開発

①日本と朝鮮半島の交流の歴史を教材化することについて

日本に一番近い外国は朝鮮半島の国々である。日本にいる一番多い海外の人も朝鮮半島の人々である。そして、日本と朝鮮半島は、文化的にも政治的にも深く長い歴史があり、経済的にも一層つながりを深めている国・地域同士である。

社会科の学習を通して、日本が朝鮮半島の人々に大きな苦しみを与えた過去を知り、過ちを素直に認め反省していく態度を養うことが大切であると同様に、益々つながりを深めようとする日朝交流のあり方を、21世紀に向けて、プラス指向で考えていく態度を養うことも大切なことである。

歴史的内容領域の単元では、日朝関係の悪い時代が取り上げられがちだが、それだけではこれからの日朝関係の理解を深めていくのに不十分である。最近、小学校の社会科教科書には、江戸時代の朝鮮通信使が取り上げられるようになってきた。歓迎すべきことだと思う。また最近、国際単元でも、朝鮮半島の国々を取り上げる実践が随分行われているので、できれば、歴史単元と国際単元を通して、日朝関係について、「かつて日朝関係は悲しい不幸な時代もあったが、朝鮮から多くのことを学び、友好関係を築いた時代もあった」という多面的な見方を養うことをねらいたい。

②本校の学習指導計画における位置づけ

この単元は、日朝関係を題材に、トピック的な内容で構成するが、単なるトピック単元ではなく、計画的に組織したことを、本校の「平成10年度 第6学年社会科学習計画(第Ⅲ章)」に示した。

単元の構成の基本的な特色は、第9小単元＝テーマ学習「日本と朝鮮半島の交流の歴史」をうけ

て、第二單元『世界の中の日本』に「日本と関係の深い国々」として、第1小小單元「日本に一番近い国 大韓民国」を設定したところにある。

日朝関係を題材として、日韓関係をポジティブに指向しようとするならば、歴史上のネガティブな面を欠落させることはできない。反面、歴史的な学習でネガティブな面だけを調べていくと、未来に生きようとする子どもたちにとって決して望ましいことではなく、よりポジティブに友好関係をつくっていかうとする態度をはぐくむことが大切になってくる。このような教師側の願いを意図し、具現化したのが、平成10年度の学習指導計画である。

教育課程審議会の答申のまとめでも、「人物や文化遺産を中心にした歴史学習を一層徹底し歴史事象を一層精選して扱い、通史にならないようにする」ことが提案されている。だから、小学生段階では、あまり時代相互の因果関係には深入りをせず、その時代をイメージしやすい人物を通して、子どもたちがそれぞれに時代の景観やイメージを自分なりにつかめればいいわけである。

③「人間の社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」の視点

「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」について、次のような視点から考えてみた。

- (ア) 人間の生き方(思い・願い)が見える教材
- (イ) 人間の働きが見える教材
- (ウ) 人と人とのかかわりが見える教材
- (エ) 社会の一員であることを自覚させる教材
- (オ) 自分の生活を見つめ直そうとすることができる教材

本小単の一番最初に、日朝関係を築いてきた人物の「願いや思い・その人の働き」を学ぶことができるように、「雨森芳洲と朝鮮通信使」という題材を扱い、子どもたちに出会わせる学習材にしてみた。

秀吉の朝鮮出兵後、日朝関係は一時断絶したが、徳川家康の政策によって日朝の国交は回復した。ここに、通信使の役割とともに、日朝関係をよりよくしていった雨森芳洲を教材化していく。雨森芳洲は、周知のごとく、平成2年に盧泰愚・韓国大統領が宮中晩餐会でその功績を大きく評価した、江戸時代中期の儒学者・外交家である。「日本人が忘れていた日本人」;「韓国大統領が天皇に紹介した日本人」というだけでも、子どもたちの興味を十分に引くことができる。しかも、その外交の根本思想「互いに欺かず、争わず、信実をもって交わることこそ、誠の誠信である」を、自ら実行した人であった。

「(ア) 人間の生き方(思い・願い)が見える教材、(イ) 人間の働きが見える教材」としては、長年にわたる朝鮮語の勉強、朝鮮語辞書の執筆、朝鮮通信使の案内役2回、対朝鮮外交をめぐる新井白石との論争など、雨森芳洲の「願いや思い・その人の働き」を知る手がかりは豊富である。それらを資料化していきたい。

また、雨森芳洲と新井白石の論争、雨森芳洲と1719年の朝鮮通信使の製述官である申維翰(記録書『海游録』の筆者)とのかかわり、または、朝鮮通信使を迎える江戸のまちの人々との交流など、「(ウ) 人と人とのかかわりが見える教材」としても、手がかりは多い。ただ、どれにも、共通することは、小学生が理解するには若干難しいという問題である。

1990年(平成2年)5月25日 金曜日

「天皇陛下のお言葉」

天皇陛下のお言葉

陛下のお言葉は、私たちが生きていく上で、大切な教訓や励ましを授けてくれます。その中でも、天皇陛下のお言葉は、私たち日本人にとって、特別な意味を持つ言葉です。陛下のお言葉は、私たちの心に残り、行動の指針となるのです。

高中晩ごはん

今日の日曜日は、家族で夕食を囲む貴重な時間です。学校で学んだことを話し合い、家族の絆を深めたいと思います。また、忙しい毎日を送っているご家族の方には、少しでもお役に立てるような情報をお伝えしたいと思います。

盧大統領の答礼あいさし

盧大統領の答礼あいさしは、韓日関係の改善と友好の発展を願うメッセージです。盧大統領は、韓日友好を促進し、アジアの平和と繁栄に貢献することを誓いました。この答礼は、両国民の間に架け橋を築き、相互理解を深める重要な一歩です。

世界の平和と繁栄のため、大韓民国は、韓日友好を促進し、アジアの平和と繁栄に貢献することを誓いました。盧大統領の答礼は、両国民の間に架け橋を築き、相互理解を深める重要な一歩です。

今日の日曜日は、家族で夕食を囲む貴重な時間です。学校で学んだことを話し合い、家族の絆を深めたいと思います。また、忙しい毎日を送っているご家族の方には、少しでもお役に立てるような情報をお伝えしたいと思います。

盧大統領の答礼あいさしは、韓日関係の改善と友好の発展を願うメッセージです。盧大統領は、韓日友好を促進し、アジアの平和と繁栄に貢献することを誓いました。この答礼は、両国民の間に架け橋を築き、相互理解を深める重要な一歩です。

盧大統領の答礼あいさしは、韓日関係の改善と友好の発展を願うメッセージです。盧大統領は、韓日友好を促進し、アジアの平和と繁栄に貢献することを誓いました。この答礼は、両国民の間に架け橋を築き、相互理解を深める重要な一歩です。

▲雨森芳洲の功績を讃える盧泰愚大統領のことは (朝日新聞1990年5月25日より)

③ 「子ども相互の学びあいが高まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」の視点

- (カ) 様々な立場からの多様なとらえ方ができる教材
- (キ) 葛藤や対立があり、論点が明確な教材
- (ク) 社会に参加すること、かかわることへの意欲がわいてくる教材

対朝鮮外交をめぐる新井白石との論争では、雨森芳洲の「願いや思い・その人の働き」を知ることができるだけでなく、自分自身が、芳洲派となるのか、白石派となるのかで、外国との交流のあり方を考える学習場面を設定した。単元全体として、若干難しい内容が多いが、取えて「(キ) 葛藤や対立があり、論点が明確な教材」として位置づけてみた。

「(ク) 社会に参加すること、かかわることへの意欲がわいてくる教材」としての位置づけ方では、

下の(2)「問題解決的な学習」の展開の工夫—③韓国人との交流、直接対話の活動や、自分なりの意思を発信する学習活動—を参照して欲しい。

韓国人と直接接し対話することや、韓国大統領に自分の意思を発信していくこと自体が、「社会に参加すること、かかわることへの意欲がわく」ととらえた。

(2) 「問題解決的な学習」の展開の工夫

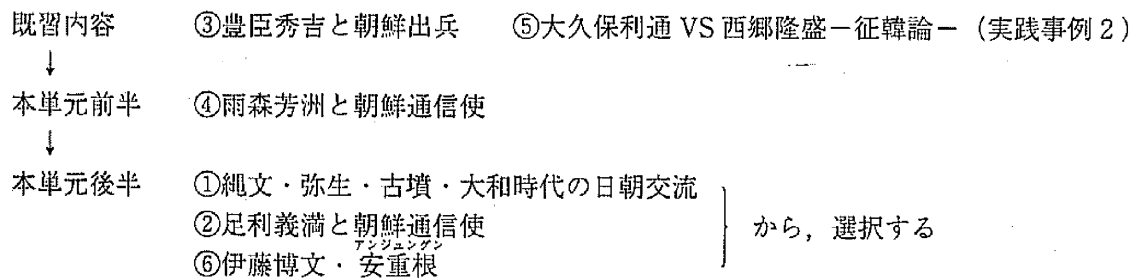
①「学習問題」を生み出す問題意識を高める工夫

学習内容を人物と文化遺産（業績）を中心に構成し、複数の時代にかかわってテーマ学習的な要素を盛り込んでみる。「日本と朝鮮半島の交流の歴史」というテーマで、次のような人物と業績をセットにして設定し、また、単元の配列を工夫することによって、「学習問題」を生み出す問題意識を高める工夫を提案したい。

テーマ＝「日本と朝鮮半島の交流の歴史」

- | | |
|----------------------|--------------|
| ① 縄文・弥生・古墳・大和時代の日朝交流 | ② 足利義満と朝鮮通信使 |
| ③ 豊臣秀吉と朝鮮出兵 | ④ 雨森芳洲と朝鮮通信使 |
| ⑤ 大久保利通 VS 西郷隆盛—征韓論— | ⑥ 伊藤博文・安重根 |

「③豊臣秀吉と朝鮮出兵」と、「⑤大久保利通 VS 西郷隆盛—征韓論—（実践事例2）」は、既習である。そこで、残りの4つの学習内容、「①縄文・弥生・古墳・大和時代の日朝交流」、「②足利義満と朝鮮通信使」、「④雨森芳洲と朝鮮通信使」、「⑥伊藤博文・安重根」をどのように配列し直せばよいのかを検討して単元の構成を作成してみた。



以上のように、本小単元後半のはじめには、「雨森芳洲と朝鮮通信使」と、既習の西郷隆盛の征韓論・大久保利通の日朝修好条規・秀吉の朝鮮出兵の時代を比べる。すると、日朝交流といってもその関係は、良好な状態の時、決して良いとは言えない時代があることが分かってくる。

子どもたちは、「秀吉の朝鮮出兵の以前の日朝関係、日朝修好条規以後の日朝関係はどうなっているんだろう」という疑問を、自然ともつようになってくる。そこで、この疑問をそのまま学習問題にしていくのである。

②一人一人の学習のスタイルを生かす「学習活動」の工夫

— 人物を選択し、調べる人物を選べるようにするための手だて —

では、単元後半の、「①縄文・弥生・古墳・大和時代の日朝交流」、「②足利義満と朝鮮通信使」、「⑥伊藤博文・安重根」では、子どもたちはどのようにして、人物を選ばばよいのであろうか。

子どもたちが、人物を選択するためには、ある程度の情報が必要であろう。そこで、手だてとして、1998年10月、大韓民国・金大中大統領来日の際の新聞記事を使うことにした。

宮中晩餐会の天皇陛下の「お言葉」の中に、次の文言がある。

- 「百濟から、教典に詳しい王仁が来日し、太子に教え、太子は諸典籍に深く通じるようになった」
- 「このような密接な交流の歴史のある反面、一時期、我が国が朝鮮半島の人々に大きな苦しみをもたらした時代がありました」

同様に、金大中大統領の答辞には、次の文言がある。

○「両国の歴史は既に久しい以前より、両国の善隣友好関係を重視した多くの先覚者がいたことを記録しています。十五世紀の中期、朝鮮通信使の一員として日本を訪れた申叔舟は、『隣国に対するのは礼が基本であり、その次に誠意を尽くすべきである』と記しました」

日本と朝鮮半島の交流の歴史 NO11 1998年10月8日 朝日新聞

6 - No. _____

名前 _____

金大統領、「近くて近い国に」熱弁



下見「W杯成功を」

朝日新聞 1998年10月8日 東京版 10月8日 朝日新聞

「一衣帯水の近き両国は、歴史が深く、文化が豊かである。両国は、互いに尊重し、互いに理解し、互いに協力し、互いに発展し、互いに繁栄することを望む。両国は、互いに尊重し、互いに理解し、互いに協力し、互いに発展し、互いに繁栄することを望む。」

大統領の答辞

私は、歴がたい、韓国と日本との交流の歴史は、古くからあり、互いに尊重し、互いに理解し、互いに協力し、互いに発展し、互いに繁栄することを望む。両国は、互いに尊重し、互いに理解し、互いに協力し、互いに発展し、互いに繁栄することを望む。

近き両国は、歴史が深く、文化が豊かである。両国は、互いに尊重し、互いに理解し、互いに協力し、互いに発展し、互いに繁栄することを望む。両国は、互いに尊重し、互いに理解し、互いに協力し、互いに発展し、互いに繁栄することを望む。

▲日韓友好の歴史を伝える金大中大統領の新聞記事（朝日新聞1998年10月8日より）

上の「秀吉の朝鮮出兵の前の日朝関係、日朝修好条規以後の日朝関係はどうなっているんだろう」という疑問を解決するための手だてとして、この「お言葉」と答辞を資料として示す。ここから、「秀吉の朝鮮出兵の前の日朝関係」は良い関係のようだ、「日朝修好条規以後の日朝関係」は「我が国が朝鮮半島の人々に大きな苦しみをもたらした時代」のようだという予想をもち、日朝間の時代の様子から、子どもたちが人物を選択できるように工夫をしたのである。

ただしこの学習で大切にしたいことは、雨森芳洲と朝鮮通信使で学んだ、「その時代時代のそれぞれの人々には、それぞれの思いや願いがあり、日朝交流の歴史をつくってきた」という見方をもとにして、①縄文・弥生・古墳・大和時代の日朝交流、②足利義満と朝鮮通信使、③伊藤博文・安重根と韓国併合の3つの時代を調べていくなかで単に各時代の日朝関係が、良い・悪いではなくて、それぞれの人物が日朝関係に、「どのような思いや願いをもって行動したのか、またその行動の結果としての業績やその人物の働きはどうであったのか」という点を追求することにある。

つまり、小単元前半で学んだ、「雨森芳洲は、進んで朝鮮語を学んだり、朝鮮通信使の案内人を務めたりして、江戸時代の日朝交流のために、力を尽くした」という見方を生かして、渡来人・足利義満・伊藤博文・安重根などの日朝関係に関わった人々の思いや願い・働きを追求することを主たる学習課題にしていくのである。

③韓国人との交流、直接対話の活動や、自分なりの意思を発信する学習活動
本学級は、実践事例2と同じ学級である。つまり、帰国児童・一般児童の合同学級で、帰国児童14名（男女各7名）と一般児童18名が在籍する。

6年生の創造活動（お茶の水女子大学附属小学校の「総合的な学習の時間」の名称）の共通テーマは「人とふれあう」である。1組は「国際（学習）」として人とかかわる。2組は生活を支える人とかかわる。3組は障害を持つ人とかかわる。4組は高齢者とかかわる。このような人々とかかわることを通して、その人の生き方、働きを学び、自分の生き方に生かしていこうとするねらいをもって学習を進めてきた。

1組の子どもたちは、今年度の学習計画を立てたときに、一つめに、今までに調べたことがない国について知りたいということ、二つ目に外国で働いている日本人のことを知りたいということを通して、学習のテーマとした。

そのなかで、一学期に、韓国から本学への留学している（1998年度から助手に栄進）朴善姫さんと交流の機会を持った。朴善姫さんに韓国の舞踊を見せていただいたり、韓国の遊びについて教えていただき一緒に遊んだりした。子どもたちは、韓国の人と出会って交流を持ち始めているのである。

子どもたちは、この学習が始まると、学んだことを朴善姫さんに伝えたいと言い出した。教師側がねらっていたことを、自分たちから言い出したのである。実際には、朴善姫さんだけでなく、金大中大統領にも伝えたいと言い出した。新聞を使って学習したことの影響であった。また、アメリカに滞在していた帰国児童の一人が、クリントン大統領に、環境問題についてメッセージを送ったところ、返事が来たことを、学級で皆に伝えたことも見逃せない。

朴善姫さんとは直接交流する活動を、金大中大統領には手紙を書き自分たちの意思を発信する活動をおこなうことになった。伝える相手が韓国人ということで、子どもたちの学習への意欲は益々高まった。

(2) 期待する児童の姿

国際単元でも、これから朝鮮半島の国々を取り上げる重要性は増してくる。21世紀には、ますます関係が深まっていく国同士と考えれば、日朝関係を、人物と文化遺産（業績）で、追ってみるのも意味があると考えられる。21世紀の日韓関係は、2002年のサッカーワールドカップでスタートをするのであるから、日韓（朝）関係が良好な時代こそ、学習の視野に入れていきたいと考える。

そして、この学習を通して「かつて日韓（朝）関係は悲しい不幸な時代もあったが、朝鮮から多くのことを学び、友好関係を築いた時代もあったことがわかる」という多面的な見方・考え方、さらに「これからの日朝関係をよりよくしていくために何ができるのか、考えてきたい」という社会事象にかかわろうとする意識を涵養することも可能な一つの機会と考えられる。

4 「日本と朝鮮半島の交流の歴史」 B児の学習記録

(1) B児の学習傾向（実践事例2と同じ児童である）

- 何事にも意欲的で、最後まで粘り付く良く取り組む。作業は大変丁寧である。
- 社会科では、調べ学習を好み、資料の収集や活用も十分に力を持っている。
- 話し合い活動でも、自分の考えをはっきりと、自分なりの考えに即して述べるができる。
- 反面、思いこみが激しいところや、自分の考えを容易に変えない面も見られる。

このB児は、征韓論争で、西郷隆盛を支持した。調べ学習の過程で、西郷隆盛支持派の多くの子どもが、大久保利通支持派に転向していく中で、頑なに西郷隆盛派であり続けた、希有な子どもの一人であった。征韓論支持であった、B児が、日朝交流の歴史を学んでどのように変容していくのかをさらに追求するために、継続して観察対象児とした。

(2) 第1時の学習活動

主な学習活動

- 雨森芳洲が果たした役割について、年譜と、読み物資料で調べる。
- 雨森芳洲の日朝関係に対する思いや願い・働きについて、キーワードを書くことができる。

この学習の最初は、韓国の大統領・盧泰愚が、来日した際に天皇陛下に素晴らしい日本人として、

雨森芳洲を紹介している VTR を視聴することから始まった。「日本人が忘れていた日本人」, 「韓国大統領が天皇に紹介した日本人」ということを伝えて、ビデオを見たのである。

そして次に、雨森芳洲の写真を見て、気がついたことを話し合った。

- ・ものすごく年をとっている。
- ・学者風な感じがする。
- ・画家か俳人だと思う。
- ・日本文化の研究者だから、韓国の大統領に紹介されたのでは？

と、一通り意見が出た後で、地図で、生家は滋賀県高月町にあるが、墓は遙か離れた対馬にあることを伝えたとこで、さらにどんなことをした人か、予想させてみた。

- ・対馬は、日本より韓国に近いから、韓国・(朝鮮) のことを勉強した人
- ・韓国の味方をした人
- ・韓国に日本文化を伝えた人

と、日本と韓国(朝鮮)を結びつけた人であることはとらえることはできた。

つづいて、雨森芳洲が果たした役割について、年譜と、読み物資料で調べることにした。子どもに与



えた資料の元の本は「雨森芳洲(雨森芳洲庵発行の道徳副読本)」抜粋である。

読み物資料を読んだ、B児は、雨森芳洲の思いや願いを、次のようにまとめている。

1. 自分と同じ、もしくはもっと上の人間つくりと努力し、教育に力を入れた。
2. 韓国と日本の関係がうまくいくように自分を高めようとした。
3. 韓国と日本の関係がうまくいくように努めた。

ここでは、大まかに、雨森芳洲が日朝関係をよくするために働いた人であることが、つかめている。

◀筆者と雨森芳洲(雨森芳洲庵にて)

江州時代は、約二百六十年間続きました。その間に朝鮮通信使は、十二回も日本へやってきています。

その第八回目に第九回目に、芳洲は、其文政として活躍しました。通信使の一行の中には、政治家だけでなく、画家、小説家、詩人、軍人、曲芸師など朝鮮の國の中でも特につけた人たちが、三百人から五百人もやって来たのです。

その人たちは、対馬を通り江戸へ行って朝鮮へ帰るのに、半年もかかりました。

朝鮮と日本とは、言葉が違い、風習や考え方もまったく違います。朝鮮の人々と日本人の間をとりもつ芳洲の苦勞は、なみたいていはありませんでした。

芳洲は、日記の中に、「漢字一字の読みどりの違いで、話が通じあらずに、八日間も苦勞した。」と、書いています。

また、第九回の通信使が江戸に着いた時、芳洲がつかれてねこんでしまいい、芳洲の代わりに通信使に渡す漢字の文章を書ける人がいないので、困ったことになりました。

このように其文政という仕事は、中國の漢文の知識があり、朝鮮語を上手に話し、その上に、朝鮮の人々の考え方を理解している芳洲でなければつとまらない大役だったのです。

通信使の人々が泊まる宿屋には、使われた外國の文化ゆめらしい話を連続聞いたり、むずかしい書物の説明をしってもらおうとおおぜいの学者が集まりました。

新聞によって、外國の文化にふれることになった日本人々にとって、通信使は、外國のことを知るよい機会だったのです。

其文政として活躍する芳洲

新聞

江戸時代

外国の文化

を学ぶ

機会

だった

通信使

が

来た

時

は

300

人

から

500

人

も

来

た

▲「雨森芳洲」抜粋

(3) 第2時の学習活動

主な学習活動

朝鮮通信使の様子について調べ、江戸のまちの人々の接し方や気持ちを想像しながら、朝鮮通信使に手紙を書く。

第二時は、雨森芳洲とセットで取り上げた、朝鮮通信使について学習を深めた。まず、朝鮮通信使の様子について、当時描かれた絵を見ながら感想を話し合い、次に、当時の日本人の歓待ぶりを、接待の料理や、朝鮮通信使の記録から調べた。このときに使った資料は、「みつむらグラフィック・社会科⑦【朝鮮通信使】」である。カラーで、写真が大きくて子どもたちにも見やすかったので、児童数分を購入して一人一人が資料をしっかりと見ることができるよう配慮した。

次に、年表から、朝鮮通信使が来た年や、回数を調べ、はじめの3回は捕虜を連れ戻しに来ていること、将軍が代わる毎にお祝いに来てくれたこと、雨森芳洲は6代将軍徳川家宣・8代将軍吉宗の時の朝鮮通信使の案内役をしていることなどを確認した。

そして最後に、江戸の町の人々の歓待ぶりの資料で読んでから、江戸時代の人になったつもりで、朝鮮通信使に手紙を書いた。以下がB児の作品である。

私は、身分の低い農民でございます。日本とは違ってとても美しい行列で、見とれてしまいました。徳川様は、朝鮮通信使の方々に幸運な道(朝鮮人街道一筆者註)を用意なさり、道も整備なされました。私も、そのお手伝いをさせていただきました。……私は、今まで仲良くしていただき交流を深めていくことができた朝鮮の方々と、これからも仲良くやっていけると思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

農民 B児

江戸の人々の歓迎ぶり

課題：朝鮮通信使の人々は、江戸でどのように迎えられたのでしょうか。

1. 通信使の一行は、江戸では、浅草の東本願寺(地下鉄・田原町駅前にある)に宿泊していた。次の文は、1719年の朝鮮通信使の製述官である申維翰が書いた記録書『海游録』に書かれていることである。

毎日、江戸の詩人や小説家の訪問者が、あいつで絶えることがない。漢詩をいっしょに詠んだり、筆談(会話ができないので、漢字を紙に書いて、会話をすること。朝鮮の人々は漢字もハングルも使える)をしたりして、全くひまがなくて、とても困っている。なかには、江戸の町人たちであろうか。外から、「習字を書いてほしいとか」、「絵を描いてほしいとか」、「漢詩を詠んでほしいとか」、雨森芳洲を通して、頼んでくる人が続出している。

2. 次の文章は、江戸時代の経済学者・太宰春台が、まだ、無名だったころ、東本願寺に申維翰を訪ねたときのことを思い出して書いた文章です。

男の仕事として、外国への使者と
將軍ほど大事なものは無い。私は、
成人したときから、心中ひそかに、
漢詩の才能を買ってもらい、それに
よって、外国使節に任命されたいと、
3. 下の絵は、朝鮮通信使にかけよって、習字を書いても
らっている、日本の町人の絵です。
馬に乗っているのが、朝鮮通信使の人で、すずりをもって
いるのは、馬をひく人足です。
なお、この絵は1711年のもので、このとき、朝鮮通信使

▲資料「江戸の人々の歓迎ぶり」

(4) 第3時の学習活動

主な学習活動

新井白石と雨森芳洲の論争の資料を読んで、朝鮮通信使の待遇の仕方について、雨森芳洲の考え方や人柄について感じたことを、製述官 申維翰に手紙で紹介する。

第三時では、新井白石と雨森芳洲の論争について資料を読み、朝鮮通信使の待遇の仕方や対朝鮮外交について、両者どちらの考え方を支持するか、理由を話し合った。



日本と韓国(朝鮮)の交流の歴史 NO B
6- No. 名前 _____

1711年の朝鮮通信使が日本に来るときのことです。当時の江戸幕府は、徳川家康が幕府を興いてからすでに100年以上たっており、財政が少なくなり、よびしくなっていました。

このとき幕府の中心で力を持っていたのは、雨森芳洲の父である、新井白石です。

新井白石の政治の手腕の一つに、財政を立て直しがありました。そこで、新井白石が考えたことが、幕府の財政に力がかかる手紙は、へらしてしまおう。幕府の財政に力がかかる手紙は、へらしてしまおう。幕府の財政に力がかかる手紙は、へらしてしまおう。

新井白石：朝鮮通信使の派遣にかかる費用は、一回で100万円になります。今の幕府の一年間の収入は、約70万円ですから、それよりも多い金額を一回に支払うことになりませう。ですから、朝鮮通信使の派遣にかかる手紙は、へらしてしまおう。

幕府の財政は、幕府の財政を一年間手紙でもらえる金額である。多分300-350万円くらいだろう。

雨森芳洲：確かに、あまりに贅沢な食事はやりだすほどのことはよくありません。

手紙を減らすことについては、私も、白石殿の考え方に賛成をいたします。ただし、次のことはご存じですか。申し上げます。

ばくちのお金を支払っているのは、日本だけではありません。

朝鮮だって、朝鮮通信使が日本に来るときには、新しい大船を6隻も新造します。しかも5隻中、3隻は、将軍や、高僧(高僧・紀伊・水戸藩)、幕府の高僧、幕府の者に立ち寄るいろいろなもの、立に差し出す贈り物で一杯です。

それだけではありません。朝鮮には、対馬島から毎年、年間5-6回も使節が出かけるのです。

その接待費が1年間だけで30万円を超えているそうです。

ですから、長い目で見れば、朝鮮の方が日本のために、お金をたくさん使っていて使節してくれているのです。

新井白石：いいや、それに朝鮮ごとにもそんなに金を遣わさなければならぬ。朝鮮は、秀吉公の朝鮮出兵で、すぐに逃げ出すような兵ばかりではないわ。日本の相手になるような国ではない。

雨森芳洲：何をおっしゃる、白石殿。秀吉公の朝鮮出兵は、全く正しい理由がない戦争でした。あの戦争については、全般的に、秀吉公に戦争の責任があります。しかも、当時日本は、戦国時代が終わっておらず、毎日戦争に明け暮れていたのですから、強い責任がたくさんいたではないですか。朝鮮は、1392年に国ができて以来、日本のような戦国時代の中ではなく、平和な時代を送っていたのですから、戦争などしたことがない兵隊ばかりで、急に攻められれば、逃げだしても不思議ではありません。

新井白石：いいやそればかりではない。江戸幕府を始めた徳川家康公は、秀吉公の命令に従わず、朝鮮には出兵しなかった。しかも、秀吉公が死んですぐに神皇正統記をつけたのなら、もつと徳川幕府に感謝をせよべきだ。しかし、朝鮮の人たちは、その感謝の気持ちがないではないか?

雨森芳洲：何をおっしゃる、白石殿。徳川家康公は、秀吉公の天下統一の仕事を受け継いだのですから、朝鮮出兵の責任も引き継いだと考えた方がいいでしょう。つまり、家康公は、秀吉公の戦争の責任も引き継いだのです。

朝鮮の領土をめぐって野山が、何万人もの死者でうずまり、老人・子どもが飢えて死んでいったことを考えれば、家康公が日本と朝鮮の神皇正統記を巡るたのは当然で、特別朝鮮の人々から感謝されるほどのことではありません。

新井白石：ううむ……、ううむ……。

そう、そう、そう、財政を立て直しのことに話をもちょう。

最近、新井白石が、幕府からの輸入が増えている。日本からは、その支払いに、銀貨を使っているが、これ以上、日本から幕府に出してしまおうの老筋がなくなればいじけない。

そこで、屏の屏風を買ったら、どうであろう。屏風を買ったとき、増やす銀の量と少なくして、まうのだ。そうすれば、幕府の財政の負担は防げるぞ、どうじや、芳洲。

雨森芳洲：何をおっしゃる、白石殿。そんなことをすれば、秀吉公の朝鮮出兵以来100年もかけて、朝鮮の人々と仲良くできるように努力してきたのに、今までの苦労が水の泡になります。外国の人々とよりよくおつきあいをするために大切なことは、『互いにあざむかず(だまさず)、争わず、悪意をもって交わることこそ、まことの価値である』と考えます。いかがでしょうか。将軍様へ：し、待たれ。私が二人の行状を聞いた結論を出す。



▲第3時の学習シート

新井白石との論争を通して、雨森芳洲の思いや願い・働きについて感じたことを、自分から製述官 申維翰宛てて、手紙を書くことを学習の課題にした。申維翰は、1719年に来日した朝鮮通信使の一員で、対馬~江戸間を雨森芳洲と行動を共にした人物であった。子どもたちには、申維翰が、はじめて来日することを知らせ、その接待に当たる雨森芳洲という人物の紹介の仕方を工夫するように助言したのである。B児の手紙には、雨森芳洲が朝鮮に対して、よりよい関係を結ぶことができる人として紹介している。第一時の感想よりも、より具体的な記述が見られるようになってきている。

B 児の学習シートより

1. 朝鮮は日本の相手になるほど強い国ではない、もって日本に感謝するべき、ということについて

朝鮮は、日本の相手になる、対等の国であり、感謝するとしてよい。なぜなら、秀吉公は、平和な朝鮮を、自分の領土にするために、せめこんだ。この出兵を受け継いだのは、徳川家であり、老人、子供が飢えて死んでいき、日本の武将も、死んで、そのことを考えると、平和に穏やかに、仲直りをするには、あたりまえである。よって朝鮮は、感謝はしてよい。

2. 銀貨の質を悪くして、朝鮮に支払うことについて

銀貨の質を悪くすることは、禁止する。いままで築いてきた信望関係を、銀貨ことでなくしてしまっても、たえない。私は、家康様の別がけて、絶対に銀を減らすことはしない。これがら信望関係を大切に、交流を続けていくのだ。

日本と韓国(朝鮮)の交流の歴史 NO 9

6-1 No. 名前 田

課題 あなたから、朝鮮通信使の製造官・申羅翰さんに、雨森芳洲さんの朝鮮と日本のつきあい方に対する考え方や、人柄を伝える手紙を書きましよう。

雨森芳洲さんはこんな人
 こんにちは。今日は、雨森芳洲さんについて、どうかお話しさせていただきます。雨森芳洲さんは、とてもお静かに、満ちた人で、信望関係を大切にしています。中国語や朝鮮語、中国の人の考えや朝鮮人の考え方も、まじえて相談にのってくれます。今までの秀吉公とは違い、徳川家は朝鮮に、せめることをやめ、朝鮮との関係を、よくなるようにしていくことと思われまます。これを、かたき支えているのも、雨森芳洲さんです。きと気の合ういい人だと思います。ぜひ日本に、心算でお返しください。

朝鮮通信使製造官申羅翰様 武将山本

(5) 第4時の学習活動

主な学習活動

「日本と朝鮮半島の交流の歴史について、どんな人がどんな願いや思いをもって生きてきたのかを調べて、学んだことや考えたことを、朴善姫さんに伝えよう」という、学習問題をつくり、学習の計画をたてる。

第4時では、自分が調べてみたい時代と人物を決めて、それらを選んだ理由と学習の計画を書いた。B児は、渡来人を選んだ。下は、B児の学習計画表の一部である。

日本と朝鮮半島の交流の歴史 NO 35 ふりかえりシート

1998.11.17 (水) 2校時

6-1 No. 名前 田

日本と朝鮮半島の国々との交流の歴史について調べて、考えたり思ったりしたことを、韓国の人々(朴善姫)さんに伝えてみよう。

選んだ時代や人物	その時代や人物を選んだ理由	その時代は日本と朝鮮の關係がどのようで、どんな人が、どんな思いや願いをもって生きていたか学習してみよう
渡来人	日本の国以外の人(渡日本人)に、教えてくれたのが、おもしろいから。	日本と、朝鮮は中国につながっているから、渡来人は、文化や朝鮮の方が上だ、天と違う。そして、朝鮮の人、や、いい人が、たまたま、日本と交流、かかってくる、お話しになるように、文化を伝えにきたと思う。

日	月	日	この期間のわらひ	この時期の一番の感	解決しないこと・新たな疑問	G. T. O
1	11	18	人物を求めて、資料を見る	人物への思いが、しかり、し、学習をたてられた。	手紙がないです。	田
2	11	21	韓国の様子、どんな場所か、どんなことを、お話ししたのか、お話しした。	韓国の様子、どんな場所か、どんなことを、お話ししたのか、お話しした。渡来人は、お話しした。	渡来人は、お話ししたのか、お話しした。	田

▲B児の学習計画表 (一部)

(6) 第5～7時の学習活動

主な学習活動

日本と朝鮮半島の交流の歴史について、どんな人がどんな願いや思いをもって生きてきたのかを調べる。

(7) 第8・9時の学習活動

主な学習活動

日朝交流の歴史について調べたことを、発表しあい、学んだり考えたりしたことで、朴善姫さんに伝えたいことを書く。

第5～7時については、つくった作品の感想欄の要約を、下の表(8)①～③に、第8・9時については、朴善姫さんに伝えたいことの要約を、(8)④に記載した。

(8) 「個の学び」の状況→「相互学習の状況」→「より深い個の学び」の状況の実態の考察

①観察対象児童の学び (なお、S児はスイスからの、T児はカナダからの帰国児童である)

	A児-足利義満	B児-渡来人	S児-申叔舟 ^{シンスクチュ}	T児-安重根
① 芳洲紹介文	芳洲さんは、優しく朝鮮に興味をもち朝鮮と仲良くしたいと思っている。	とても正義感に満ちて、信頼関係を大切にする人です。朝鮮の関係をかげで支える人です。	芳洲さんは、自分を第一に考えず、相手を第一に考える人です。	芳洲さんは相手のことを裏切らない、信用できる人です。
② 作品の考え欄	足利義満は、朝鮮に対し、仲良くしようという考えはあったが、貿易は公平にしたい。	昔から日本の方が発展していると思っていたら、大陸の文明が発展していて朝鮮に伝わっていたなんてびっくりした。	申叔舟 ^{シンスクチュ} さんは、日本にいいことをした人なのに、日本で知られていないのが不思議。	最初、安重根は悪いと思ったが「国をよく思う優しい人」でした。私も安さんを尊敬できる。韓国人はなおさら。
③ カード記入	○お互いのことを考えて行動しよう (国をよくするために、条約を結んだりするときには、平等になるように)	○日本は朝鮮から学ぶことがある。韓国は、日本に優しくしてくれた。明治時代に、朝鮮を日本と同じ立場で考えていたら、あんなことはしなかったと思う。	○これからは自分の国のことだけを考えず、他の国のことも考えよう。	○どんなに自分の国が貧しくても相手の国をだまさない (朝鮮通信使のとき、もし「質の悪い銀貨を使」つたら、朝鮮との交流は悪くなった)
④ グループでの学び合いの様子	<p>T児：「相手の気持ちを考えてから行動する事が大切」、伊藤さんが韓国のことを思って、協約を結んでいなかったら、安さんも、伊藤さんを殺さなくてすんだと思う。</p> <p>B児：お札になった伊藤さんは、日本にとってもいいことをした。でも、伊藤さんのした一部のことは、朝鮮の人にとって、あまりいいことではなかった。いつの時代も、日本は自国のことばかり考えている気がする。他の国と日本の両方に「いい」ことをした方がいいと思った。昔、朝鮮は日本に対して親切にしてくれたのだから、日本は、そういう姿勢を学ばなくてはいけなと思う。</p> <p>A児：日朝修好条規の時もそうだった。「相手のことをもっと考えて行動しなければいけなかった」と思う。「お互い、仲良く、対等に」ということを伝えたい。日本と朝鮮が、お互いに仲良く対等にと考えていなければ争いにならずに済んだと思う。ただし、このことを、日本と朝鮮に住む人全ての人が、思わなければいけないけれど。</p> <p>T児：まあ、それは無理だと思うよ。</p> <p>B児：あきらめちゃだめだよ。</p> <p>S児：自分の国のことだけをを考えず、他の国のことも考えたい。日本がロシアに勝ち、韓国を自由にしてもいいと許されたからといって、自国のことだけでなく、他国のことも考えなければいけなかった。</p> <p>T・B児：ほとんど同じだね。班の考えをまとめようよ。</p> <p>T児：「相手のことを考えよう。」でどうかな。</p> <p>S児：相手の「国」にした方がいいと思う。</p>			

T児：「相手」でも、「相手の国」でもいいと思う。でも、「相手」の方が、言葉としては広いよ。
A児：相手や相手の国のことを考えてというのは、相手と「対等」になりたいということですよ。仲良くというのも、「相手のことを考える」ということだよ。
B児：でも、対等でなければ仲良くできないから、「対等」に「仲良く」という意味を含めてしまえばいいと思う。
T児：「仲良く」という言葉は、いらないわ。
A児：いや、絶対に「仲良く」の方が「対等」よりもいいよ。「対等」では同じ立場という感じしかないから。

このあと、4人で、「対等」か「仲良く」かで話し合いが続くが最終的には、**対等に!**と、まとめた。

④グループでの学び合いの様子

【考察】4名の考えは、「相手の気持ちを考える事が大切」、「他の国のことも考えよう」、「自国が貧しくても相手の国をだまさない」、「お互い、仲良く、対等に」と、ほぼ同じ意識と考えてよい。話し合いの前半は、自分のカードを読んでいるにすぎないが、後半は班の考えをまとめようと、お互いの主張について、それぞれが本音で、検討を始める。例えば、「対等に」か、「仲良く」か、どちらが朴善姫さんに伝える言葉として、よりふさわしいかを吟味をしている。このような意味で、4人の子どもたちは、S児の発言は控えめだが、同じ問題意識のもとで、それぞれの立場を尊重しながら話していたことがわかる。また、具体的な歴史的事象の議論から、より一般化した概念や見方・考え方にかかわる議論に転化していたことも見て取ることができる。



▲話し合いを進める A・B・S・T児



▲後ろの女性が朴さん

⑤朴善姫さんに書いた手紙の内容

- | | | | |
|---|--|---|---|
| <p>①朝鮮の人は日本に優しくしてくれた。
 ②両国が仲良く対等にしようと考えればいいと思う。
 ③ぼくはチョソンミン（プロ野球選手）に手紙を書き、会ってサインをもっている。これも交流だと思う。</p> | <p>①朝鮮の人から、太子が学んでいたことに驚いた。
 ②朝鮮は倭寇にも日本の支配にも耐えて日本にあわせていた、いい国だ。
 ③朝鮮に関心がなかったが、朴さんに教えてもらい、歴史ではいいときも悪いときもあったが、これからはいいものになるといいと思いました。</p> | <p>①これからは、自分の国だけのことを考えず、他国のことも考えよう！
 ②未来は平等に！</p> | <p>①相手の気持ちを考える。
 ②世界の人と平等に（だまさない）
 ③未来に向けてこれからは、人をだましたりしないで、相手の気持ちを考えて行動するようにしたい。</p> |
|---|--|---|---|

【考察】 話し合いでは「対等に!」と、まとめた4人であるが朴さんへの手紙では、自分の表現を大切にしている。例えば、S児とT児は、芳洲を紹介の文で書いたこと(①の欄)が基本的な問題意識になり、③④⑤でも言葉を換えているが主張は一貫している(S児:①「相手を第一に考える人」→③④⑤「他の国のことも考えよう」,同T児:「裏切らない信用できる人」→「相手の国をだまさない」)。これらは、既習事項(雨森芳洲)で身につけた見方・考え方を生かした学び方と考えられる。また、社会事象にかかわろうとする「未来に」という言葉は評価したい。A児は、⑤でB児の「朝鮮の人は日本に優しくしてくれた」を生かしている。また、韓国人野球選手と交流していることをアピールしている。B児からは、朝鮮への関心が薄いなりに、A・S児の倭寇の報告、T児の安重根の報告を生かしながら考えを深めている姿を見とることができる。A・B両名は友達によさ積極的に取り入れた学び方が展開できたと考えられる。

朴善姫さんからは、返事がやってきた。次項が全文である。筆者は、この朴さんの手紙を全員に配布したのち、子どもたちに返事を書く時間をあたえた。そのとき、B児が、手紙を出した相手は、朴善姫さんではなく、同じグループのA児である。当時A児は、学級の仲間から、そのわがままな行動について批判されているところだったのである。韓国という外国のことを通して、自分の身近な生活を振り返ることも、大切な学習であろう。

なお、朴善姫さんに手紙を書いた翌日、金大中大統領にも同様に手紙を書いて送った。実は、筆者は、子どもたちが金大中大統領に手紙を出したと言いだし日から、韓国文化観光部海外文化広報院の事務官の方と何度かE-mailをやりとりして、金大中大統領に本当に手紙が届くのか、確認の作業をしていた。以下のような確認がとれたので、手紙を書いて、郵送したのである。

以下のE-mailの文面は、平成10年11月23日に受信したものである。ただ、その後の朝鮮半島情勢の悪化も関係あるのであろうか、平成11年3月31日現在、返事は来ていない。

岡田様(2)メール、ありがとうございます。私は韓国の文化観光部海外文化広報院の文化支援課にいる朴英恵(ぱくよんえ)事務官です。このメールは、韓国の大使館ではなく韓国の文化観光部のメールです。ですから、岡田さんが書いたメールは直接、韓国にとどいているのです。わたしたちは、ホームページ以外にも韓国の大統領と関係して海外に韓国のことを広報しています。(http://www.kocis.go.kr)大統領関係の事で日本語でも見られます。私のメールは、特別日本の方たちのために開設されたものです。大統領宛ての手紙は、大韓民国 Seoul 市鐘路区世鐘路82-1文化観光部海外文化広報院文化支援課宛てに送ってください。私が翻訳して大統領府におくります。

お茶大小学校6年1組の皆さんへ

書いて読んでいますが、お元気で過ごしてですか。皆さんからの手紙、誠にありがとうございました。選挙が近くなりました。大変申し訳ございません。皆さんの立派な手紙に感謝をこころとしたり、なんだか緊張してしまったり、平氣を書くための心算の時間が多かったです。

先日、6年1組社会科学習に参加してから、皆さんの胸中する姿を見て驚きと感動を受けました。無きとは、私も今まで考えてなかった部分まで調査し、それを上手に探知し、その上世々の意見をお互いに対決するという、小学校では今まで見たことのない大変立派な学習をしていたからです。(そのように探知して下さる立派な先生がついて下さるから皆さんは幸せですね。)

私は皆さんの色々な質問を聞いてから「私自身は皆さんのような事を考えたことがあったのか」と自問してました。皆さんのお話をわたしも相手の気持ちや、歴史というところ、さらに日本と韓国との関係など様々なことについて改めて考えてみる時間になりました。ありがとうございました。

今回皆さんが、学習した韓国と日本の事は長い歴史の中の細部に過ぎないと思います。その中で、皆さんは、朝鮮の漢人の方や、所府州方さんのこと、伊藤博文と安福派、甲午の事など、多くの事象を学習する事ができたと思います。その学習結果による皆さんの意見をみると「日本は韓国に勝たなければならない」「安さんは博文を殺す権利はない」「安さんは博文を刺殺しても出獄である」「相手の気持ちになって考えよう」「素直に討死しよう」など様々な意見を聞くことが出来ました。私は、皆さんのそれぞれの意見に対しては、賛成も反対もしません。なぜならば、みんなの考え方がそれぞれ正しいと思うからです。歴史的事象を調査して自分なりの意見を持つことは、すばらしいことであり、知識が広まるという面からでも大変意味のあることだと思います。しかし、私はそのような事よりずっと大きな喜びを感じていました。

韓国と日本の本出の友情は今から始まるのではないかと希望を持ってようになったからです。私は子供の時代からつづいてる友情が何人かいます。その中には一番面白い友情がいれば、普通な友情、少し気が合わない友情もあります。しかし、私にとってはみんな大事で失いたくない友情です。なぜならばお互いをよく知っているため、何かのことが起きたとしても(それが悪いことでも、良いことでも)なぜ何の理由でそのような行動をしたのかすぐ理解できるからです。そのため、誤解があってもすぐ仲直りできます。そのような友情はすぐ作れるものではないので、大きな心の財産であると思っています。誰かを憎む心も、好きになる事もお互いを知った上で生まれる感情だと思っています。相手に対して何の関心もなければ、何の感情も起こらないでしょう。

韓国と日本はお互いについて知らないことが多過ぎると思います。例えば韓国では今まで、日本の文化を受け入れようとしなく(金大総領が日本に訪問した時から受け入れている)、戦時時代の悪い日本のイメージを持っている人が多いです。日本人の中でも、韓国や歴史のことなどについて全く知らない人も大勢います。それは日本の教育に問題があったかと思っています。例えば、佐々木万蔵さんは手紙の中で「なぜ日明貿易は日朝貿易より開港が5分の1なのに有名なのか」という質問をしました。その答えは、「教えられなかったから」だと答えます。その理由を言うには、どうしてもシリアスな話をしなければならぬですね。何年制か日本の教科書が韓国が大きな被害を受けた時期があります。それは、過激な高麗であった歴史の一部が教えられてなかったからです。一方で皆さんが学んだ歴史に関しては触れられてなかったため、佐々木さんのようにその矛盾点を発見する人も置かれるでしょう。(この部分の詳細は内容に関しては岡田先生に聞いてみて下さい。)

対等になるためには、お互いを信頼するためには、理解するためには、お互いについて知ることから始まります。もっとお互いを知りましょう。今回皆さんが感じていた様々な感情は新しい友情の始まりだと思っています。韓国の子供達にもこのような日本の事を伝えましょう。


世界には数多くの国が存在しています。時々良い国、悪い国、無視できる国、尊敬できる国を区別する基準をその国の実況によって判断する大人達が世の中

バックセンヒ
▲朴善姫さんからの手紙とB君がA君へあてた手紙

にはいっぱいいます。しかし、あらゆる事象の基準や判断は物質や金によって判断される事ではありません。皆さんの中には外国に住んでいた経験のある者が多いのでよく分かりますが、各々の国にはそれぞれ素晴らしい文化や自国と異なる歴史を持っており、それらは好奇心を呼び起こす面白がたくさん含んであります。私自身、他の多くの国を旅行し、その国の奥深くまで発見することで喜びを感じるような人生を生きていきたいと思っています。

それでは、皆さん4月からは中学生になりますね！1おめでどうございます。皆さんは必ず、立派な人になっていくだろうと確信します。みなさん一人一人に返事を書くてくすません。私はお茶大小学校6年1組の犬神の友達で居て本出にうれいす。

それでは、お元気で***** バイバイ

 朴善姫

6年1組47番 名前 B

A君の事で最近話題になったと思います。実際に私も話し合いに参加しました。あの時A君は、どう思ったのでしょうか。A君とは、12.5.6年生の時のクラスが一緒です。だから、A君の事を私はよく知っています。A君は私の事を少し知っています。A君があの時、どう思っていたのかは私には分かりません。

でも、あの時で意見を出したみんなは、善姫からA君をよく見ていたから意見が言えたのだと思います。しかもかたがたうさかたりするのには、A君の性格がいいと思います。でも、それを友達に、してきさせて、A君が変化するかわからないかも。A君の性格、パワー、人間性、これにたて長所があり、短所もありません。この世にそんな人がいないでしょう。私はA君は幸せだと思っています。みんなにできてくるといふ善姫から見られているから、自分の悪かったことを謝るのは、とてもつらいことだと思います。でも、それをしなきゃいけません。みんなからの、お助けがある人、いたと思います。これを機に、A君が、今まで以上にいい人になることを願っています。みんなの声を聞いて、A君がどう変わるのかは、A君にしか、だれにも分からない事ですが、みんなになると私は思っています。私はしばらくA君の行動を見ていますよ。

PS. じきにきてから数日ですが、たいてい意識しているようですね。いい方に向かっていると思います。

Ⅶ 実践事例4 「日本に一番近い国 大韓民国」の概要

— 韓国の留学生との交流を通して、人としての生き方について考えを深めた事例（註-1） —

1 単元名 「日本に一番近い国 大韓民国」

2 単元の目標と評価規準

(1) 単元の目標

日本と経済や文化の面で関係の深い大韓民国やその他の国々の人々の、衣食住を中心とした生活の様子に関心をもち、調べることを通して、それらの国々の人々の文化や生活の独自性を認め・尊重することや、日本との共通性に気づきながら、人間の生き方や、人と人とのかかわりについて、考えを書いたり話したりできるようにする。

(2) 観点別評価規準

観 点	評 価 規 準
社会的事象への関心・意欲・態度	日本と経済や文化の面で関係の深い大韓民国やその他の国々の人々の、衣食住を中心とした生活の様子に関心をもち、意欲的に調べようとする。
社会的な思考・判断	日本と関係の深い国々の人々の生活について、文化や生活の独自性を認め・尊重することや、日本との共通性に気づいて、人間の生き方や、人と人とのかかわりについて、自分なりに考えを書こうとする。
観察・資料活用の技能・表現	目的に応じて収集した資料を効果的に活用したり、友達と情報交換をしたりして、自分の考えを深め、日本と関係の深い国々の人々の生活について、独自性や共通性について作品にまとめようとする。
社会的事象についての知識・理解	日本と関係の深い国々の人々の生活について、文化や生活の独自性や共通性を理解することが、大切なことがわかる。

3 研究主題との関連

(1) 韓国（朝鮮）の教材化について

本単元は『学習指導要領（平成元年版）』6年・内容(3)ーアに対応している。

我が国と経済や文化の面などでつながりが深い国があることを調べて、それらの国の人々の生活の様子などを理解し、他国と協調を図るためには正しい国際理解が必要であることを考えること。

日本に一番近い外国は韓国（朝鮮）である。日本にいる一番多い外国の人も韓国（朝鮮）の人々である。そして、日本と韓国（朝鮮）は、文化的にも政治的にも深く長い歴史があり、今後、経済的にも一層つながりを深めていこうとしている国同士である。

しかし、韓国（朝鮮）は、「近くて遠い国」とも言われるように、心理的に相互に隔たりがあるのも、また、事実であろう。

だから、日本が、韓国（朝鮮）の人々に大きな苦しみを与えた過去を知り、過ちを素直に認め反省することが大切なと同様に、益々つながりを深める日韓（朝）交流のあり方を、未来に向けて、プラス指向で考えることも大切である。

実際のところ、本実践を行った6年1組（1997年度）は、帰国児童・一般児童の合同学級である（註-2）が、帰国児童が在留した国々は欧米圏が圧倒的に多く、韓国（朝鮮）在留経験者はいない。ただし、5年生時（1996年度）に台湾の小学生と交流会をもっているのも、外国＝欧米諸国といった意識ではないと、考えられる。

つまり、児童の多くは、韓国（朝鮮）の人々の生活を知らないのが実態と考えてよからう。そこで、

まず韓国（朝鮮）を知ることから始めたい。韓国（朝鮮）の生活や文化の独自性、日本と韓国（朝鮮）の共通性を調べることを指導しながら、相手の文化を尊重する態度を育てていきたい。相手を正しく知り、理解することこそが、国際理解の第一歩である。

(2) 「自ら社会事象にかかわろうとする子どもが育つための学習材」について

①「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」の視点から

「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」について、次のような視点から考えてみた。

- (ア) 人間の生き方（思い・願い）が見える教材
- (イ) 人間の働きが見える教材
- (ウ) 人と人とのかかわりが見える教材
- (エ) 社会の一員であることを自覚させる教材
- (オ) 自分の生活を見つめ直そうとすることができる教材

衣食住などの人々の生活様式は、人間が自然に働きかけたり、人間同士で知恵を出し合ったりして創造してきた所産である。これらは、気候や風土などの地理的条件に応じて、人間が創りだしたもので、地域・民族によって、千差万別である。韓国の人々の生活を教材化する面白さは、まさにこの点にある。韓国人は、日本人と風貌は似ているのに、様々な作法や生活の様式に、微妙な違いがあるからである。

韓国に住む人々の生活を教材化して、「(ア) 人間の生き方（思い・願い）が見える教材」、「(ウ) 人と人とのかかわりが見える教材」、「(オ) 自分の生活を見つめ直そうとすることができる教材」とするためには、学習活動を工夫する必要がある。

本単元では、韓国人の留学生と直接触れ合い、交流的な活動を交えて学ぶことを通して、「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿」に気づいていくことを意図した。ここでは、彼我的「違い」を認識することこそ、この学習の第一歩と考える。そして、その「違い」を、認め尊重する態度を育てたい。「違い」の中には、自国の文化にはない素晴らしい点もあるかもしれない。そのような出会いができれば、自分の生活を見直すことにもつながっていくと考える。

しかし、「違い」を認めあっただけでは十分とはいえないのである。文化の様式こそ違っても、それらの根底にある、「人間としてよりよく生きたい」、「より幸せに生きたい」、「平和に生きたい」などという願いには、共通点を見つめることができるだろう。ここに、同じ人間としての共感が生まれるのである。

つまり、この単元で、「(1) 人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」がねらいにするものは、

「違い」を理解して尊重する姿勢、「共通性」を探ろうとする目をもったり、自分の生活を見つめ直したりすることである。

と、とらえ直してみた。

②「子ども相互の学びあいが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」の視点から

- (カ) 様々な立場からの多様なとらえ方ができる教材
- (キ) 葛藤や対立があり、論点が明確な教材
- (ク) 社会に参加すること、かかわることへの意欲がわいてくる教材

次に、韓国に住む人々の生活を教材化して、「(キ) 葛藤や対立があり、論点が明確な教材」にしていくためには、「違い」を理解して尊重する姿勢と、「共通性」を探ろうとする目をもつことが

大切であるのと同様に、異文化とどのように自分自身が接していくのかということについても、自分なりの考えをもたせることが大切と考える。

「社会事象にかかわろうとする」ことができる教材に成りうるか否かは、学習問題や、学習活動の適否と関連が密接である。そこで、「自分の家に韓国(朝鮮)の人が、ホームステイしたとしたら、どのように生活してもらおうか」と、いう、「もしも...」の場面を設定して、シミュレーション的な学習問題と学習活動を組み合わせることによって、学習材としての韓国を、「子ども相互の学びあい deepen なかで、自分なりの意思決定ができる学習材」にしていきたいと考えた。この学習問題と学習活動では、条件さえ、同一にすれば、「韓国風に食べてもらっていい」とか、「日本に来たのだから、日本風で食べてほしい」という具合に、論点が明確になることは明かである。

今後、益々外国の異文化と接することが増えるこれからの社会において、このような場面を設定することを通して、自分の考えを練り上げることこそ大切である。これが、「進んで社会事象にかかわろうとする子どもが育つ」ことにつながると考えた。

つまり、「子ども相互の学びあい deepen なかで、自分なりの意思決定ができる学習材」が、ねらいにすることは、

自分自身が、異文化とどのように接していくのか、自分の生き方を創ることである。

と、とらえ直してみた。

(3) 「問題解決的な学習」展開の工夫

① 様々な見方・考え方を引き出し、生かす「学習問題」の工夫

第1小単元「日本に一番近い国＝韓国 韓国人が自分の家にホームステイしたら」では、

もしも、韓国の人が自分の家にホームステイすることになったら、あなたは、その人に日本の作法、韓国の作法、どちらで食事をしてもらいますか。

という、学習問題で子どもたちが学習を進めていく。次に、第2小単元＝「自分がホームステイしたい国って、どんな国？」では、立場を逆にしてみても、

もしも、あなたが、海外でホームステイをすることになったら、あなたは、その国の作法、日本の作法、どちらで食事をさせてもらいたいですか。

と、学習問題をつくるのである。こうすることによって、第1小単元では、「郷に入れば郷に従え」的な発想しかできない子どもでも、単元全体の学習が終わるときには、相手の立場にもなって、自分なりに考えを、書いたり話したりすることを見込んでいる。

② 一人一人の学習のスタイルを生かす「学習活動」の工夫

(ア) 学び方を学ぶための、単元の「二重構造」

小単元を、第1小単元＝指導単元「日本に一番近い国＝韓国 韓国人が自分の家にホームステイしたら」と、第2小単元＝学習単元「自分がホームステイしたい国って、どんな国？」と、単元を指導と学習の二重に構成した。これを、単元の「二重構造」と呼んでいる(註-3)。

指導単元では、「韓国の衣・食・住を調べる」ことを通して、韓国の文化の独自性に気付かせ、それらを認める態度を育むと同時に、衣・食・住を調べるという学習の視点に気づかせ、韓国と日本との共通性・相違点を探るという見方・考え方を育てることを意図した。

学習単元では、日本と関係が深い典型的な国々から、子どもがそれぞれに、関心のある国を選択して調べる。その際、韓国を調べるときに学んだ、学習の視点、見方・考え方を生かすように意図した。

先述の学習問題についても、二重構造になっているのは、同様である。

(イ) ホームステイしたい国を選択できる、一人一人の児童の、興味・関心に基づく学習

自分の興味・関心にもとづいて、アメリカ・オーストラリア・中華人民共和国・サウジアラビア、に、イギリス・フランス・イタリアを加えた国々から調べてみたい国を自由に選択して調べることができるようにした。選ぶ国については、ある程度、典型的な事例となりうる国を教師から提示していくこととした(註-4)。

本来ならば、子ども自身が自分とのかかわりで国を自由に選べるよいにしていくことも大切にしていってよいと考えたが、資料が十分に入手できないことも考えられる国もあるので、限定した。

(ウ) 様々な資料を用いた調べ学習

第2小単元=学習単元「自分がホームステイしたい国って、どんな国?」では、という学習問題を調べるには、教科書や資料集以外にも様々な資料が必要になってくる。学校の図書コーナー、地域の図書館、学校のビデオライブラリーなど、様々な資料収集方法を活用させることにした。

第1小単元=「日本に一番近い国=韓国 韓国人が自分の家にホームステイをしたら」のように、どの国でもゲストティーチャーを呼べれば一番いいのだが、予算的にも難しい問題である。

4 単元の構成と学習指導計画

(14単位時間扱) ○内の数字は時間数

(1) オリエンテーション

①②日本は、経済・文化面で世界の国々と深い関係があることを、資料から読み取る。

(2) 第1小単元=「日本に一番近い国 韓国人が自分の家にホームステイをしたら」

③日韓(朝)交流史を調べる。

④韓国(朝鮮)の人々の生活について、気が付いたことや、調べてみたいことを書く。

⑤韓国(朝鮮)の人々の食事や食事作法について調べ、韓国(朝鮮)の文化や生活の独自性、日本との共通性について話し合う。(食)

⑥韓国(朝鮮)の人々の服装、住まいと、その工夫について調べ、韓国(朝鮮)の独自性、日本との共通性について話し合う。(衣・住)

⑦韓国人が自分の家にホームステイをしたら、に日本式の食事作法を勧めるか話し合う。

(3) 第2小単元=「自分がホームステイしたい国って、どんな国?」

⑧日本とつながりの深い国々から、自分がホームステイしたい国を選んで、人々の生活について調べる計画を立てる。

○国：アメリカ・オーストラリア・中華人民共和国・サウジアラビア etc.

○調べること：衣食住を中心とした生活の様子

⑨⑩⑪図書コーナーの資料を活用しながら、計画にそって調べ、作品にまとめる。

⑫⑬調べたことを発表しあい、それぞれの国々の独自性や日本との共通性について知り、感じたことを話し合うことができる。

⑭自分が外国にホームステイをしたら、どのように過ごさせて欲しいか、どのように接してもらいたいかを考える。

5 観察対象児童K児の記録

(1) K児の学習傾向

K児は決して社会科が好きな児童ではなかったが、2学期の「長く続いた戦争と人々の歴史」の学習(註-5)で、戦争体験のある方の聞き取り調査をしたときに、実によく質問をしたり、それらを生かしてまとめたりしていた。

ポスターセッションに向けた資料作りにも、よく取り組み、友達の記事を生かして、戦争に対する自分なりの考えを深めていた児童である。

今回も、韓国の留学生の方を学校に招いての学習なので、人とかかわりあって進める学習では、意欲的進めることを望むことができる児童である。

(2) K児の学習記録

時	K児の学習活動 (学習活動を□で囲んだ。) 発言・文章・書き込み・行動・作品など	・研究主題との関連についての評価
オリエンテーション		
1 ・ 2	<p style="text-align: center;">—— 主な学習活動 ——</p> <p>日本は、経済や文化の面で世界の国々と深いつながりのあることを、資料から読み取り、その国に暮らす人々の生活について調べる学習問題や学習計画をつくる。</p> <p>○世界の子どもの写真を見て つぶやき・ノート・行動・発言を示す</p> <p>○教科書(東京書籍6年下巻p.31)「日本が世界にしめる割合」を見て。 ノート 人口と面積は全体の割合からして、多いとは多いとは言えないが、輸出額はひじょうに多い。</p> <p>○教科書(東京書籍6年下巻p.32)を見て、外国人を見かけるところを言い合う。</p> <p>1 発 言 ・コンビニエンスストアで買い物をしてる外国人を見かける。</p> <p>2 ○教科書(東京書籍6年下巻p.33)の、資料を見て、日本とつながりの深い国についてノートに書いてまとめる。</p> <p>○学習の計画を立てる。 ノート</p> <p>1. 日本と関係の深い国々に住む人々のくらしを調べる。 衣・食・住</p> <p>2. 学習の計画</p> <p>(1) みんなで学習「日本に一番近い国 韓国」 衣食住(日本と外国の交流の歴史)</p> <p>(2) 一人で学習 自分で調べたい国を選ぶ(アメリカ) 衣食住(産業・・・その国の特徴)</p>	<p>○この時点でアメリカを調べたいというこだわりを持っている。</p>
第1小小単元＝「日本に一番近い国 大韓民国 韓国人李さんが、自分の家にホームステイをしたら」		
3 ・ 4	<p>計画段階では1単位時間であったが、実際には2単位時間かかった。</p> <p style="text-align: center;">—— 主な学習活動 ——</p> <p>日本と韓国(朝鮮)の交流の歴史を調べたり、そこから、考えたことを話し合ったりする。</p> <p>○日本と外国の交流の歴史を調べ、学習シートの年表に記入する。</p>	

<p>3</p>	<p>シート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紀元前：大陸（朝鮮）米作りが伝わる。 ・紀元前：青銅器・鉄器が伝わる。 ・5世紀頃：渡来人が大陸の文化を伝える（漢字、宗教、織物など）。 ・538年または552年：大陸から仏教が伝わる。 <p>○年表に記入したことから、気付いたことを発表しあう。</p> <p>行動 S児の発表「日本は国が統一されると、朝鮮を支配しようとする。例えば、秀吉の出兵、西郷の征韓論、日清日露戦争に勝って、朝鮮を支配した」を聞いて、自分のシートを見直す。</p> <p>○教科書（東京書籍6年上巻 p96～97・109）を読んで、近代の日韓関係について概要を知る。</p> <p>ノート</p> <p>1910年 日韓併合条約・・・植民地</p> <p>ノート</p> <p>土地整理…土地をうばわれるムカツ ↓ 小作人、日本や中国へ移住</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮語の制限 ・朝鮮人70万人連れてこられる ・日本名に変えさせられる ・ばかと朝鮮を同レベルにしてい言葉があるッ <p>ノート</p> <p>ぎもん・・・こうヒドイ事をしていたときにいやな気持ちになった日本人はいなかったのか？</p>	<p>○日韓の歴史について、特に、韓国（朝鮮）の人々に日本人がおこなったことについて、自分なりの疑問をもった。</p>
<p>4</p>	<p>— 主な学習活動 —</p> <p>韓国（朝鮮）の人々の生活について、写真から、気づいたことを発表し合い、韓国（朝鮮）の人々の生活について、さらに調べてみたいことを書く。</p> <p>○韓国の衣服の写真を見て気付いたことをシートに書く。</p> <p>シート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔の様子はやっぱり日本と全然ちがう。でも今の様子は日本と全然変わらないし、違和感もなかった。 <p>①の旧正月の写真では、お母さんの服は、完璧に民族衣装!! という感じがする。</p> <p>○韓国の住居の写真を見て気付いたことをシートに書く。</p> <p>シート</p> <p>ソウル市はビルがたくさんあって発達している感じがするけれど、背景や手前には自然がたくさん</p> <p>○衣服・住居の写真を見ながら、自然と日本との共通点や相違点に目を向けている。「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿」について考える端緒になっている。</p> <p>○K児の興味は、衣服と住居にある。</p> <p>○写真から分かったことや気付いたことを書くのが精一杯で、自分なりの「問い」を書くには至らなかった。</p>	

3
・
4

ある。ビルの手前には、家や小さなマンションみたいなビルみたいものも建っている。農家の方は、日本の農家はあまり知らないけれど日本的な感じがする。

○シートに書いたことを発表し合う。
(食事については、友達の発表を書き写していた)

——— 主な学習活動 ———

日本とつながりの深い韓国（朝鮮）の人々の食事や食事作法について調べ、韓国（朝鮮）の文化や生活の様子の独自性、日本との共通性について話し合う。

○イ・ヒョンヨンさんと子どもたちが、食事を食べる様子と見比べて、日本の食べ方と、韓国（朝鮮）の食べ方の、共通点と相違点を探す。

ノート

- ・キムチは辛い（水を飲みに行った友達がいた）
- ・おはしは、重くつかみにくい。

○食事について、食べている様子以外の話を聞く。

李さんの話

- ・食事は、お父さんが帰ってくるのを待つ。
 - ・お父さんが食べ始めるまで、箸をつけれない。
 - ・キムチの話。キムチは欠かせない。辛いキムチもある。海産物をたくさん入れる。
- etc.

5

○李さんの話を聞いて、また、ノートにメモを始める。

ノート

- ・李さんは、キムチは辛いけれども、それが丁度よくおいしい。
- ・キムチは本場のもの。韓国のキムチはこんな感じ。
- ・大根・ニンニク・トウガラシ・魚を発酵させた汁・白菜・ネギ・カキ・くり・ぎんなん・くるみなどをキムチに入れる。からくないキムチもある。

○学習の感想を書く。

ノート


いろいろと韓国の文化について分かったのですごく楽しかった。1番びっくりしたのは、やっぱりお父さんの事で、韓国ではお父さんがすごく大事に思われているんだ。という事がよく分かった。

静かに食べなくてはいけないんだったら、もちろんTVを見ながら…なんて論外なんだなあ。

○K 児にしては、珍しくノートの記録が少ない（実は、食べ比べに見入ってしまい、ノートを取っていなかった）。
○日本と韓国の食事の違いに興味がいってしまっている。



▲写真 李さんとたべくらべをする子どもたち

<p>5</p>	<p>食器が銀製だったら、おこげの時に、お湯を入れたら、持つと熱いんじゃないかと思った。ごはん、みそ汁、おかずなどをおく、順番も決まっているなんて韓国のマナーは、なんかけっこうきっちりしていてすごいと思った。</p> <p>木の根は、どういう味なんだろう？</p> <p>【李さんがのノートに朱書きを入れてくれた】 チゴリという体にいい植物の根っこで、お茶（のみもの）を作るとき、水に入れて沸かして、その味と香を楽しみながらのむ（食事の時などに）</p> <p>【ノート K 児の返事】 李さん、ありがとうございます。韓国の事がよく分かりました。</p>	<p>○表面的には、驚きとして表現しているが、とても自分にはできそうにないマナーとも、とらえることができる。</p> <p>○この後、どちらかと言えば、韓国に対する肯定的な表現が多くなってくるのは、この李さんの、返事があったからと考えられる。やはり、人と人とのかかわりが大切である。</p>
<p>6</p>	<p>——— 主な学習活動 ———</p> <p>韓国（朝鮮）の人々の服装、住まいとその工夫についてについて調べ、韓国（朝鮮）の文化や生活の独自性、日本との共通性について話し合う。</p> <p>○イ・ヒョンヨンさんがチマ・チョゴリを着る様子や、韓国の服装について話すのを聞く。</p> <p>○イ・ヒョンヨンさんが韓国の住居やオンドルについて話すのを聞く。</p>	 <p>▲写真 李さんがチマ・チョゴリを着てたてひざですわった様子</p>
<p>7</p>	<p>——— 主な学習活動 ———</p> <p>自分の家に韓国（朝鮮）の人が、ホームステイしたとしたら、日本の食事作法で食べてもらうか否かについて、自分の考えを書いたり、発表したりする。</p> <p>○課題について、自分の考えをノートに書く。</p> <p>【ノート】</p> <p>別に李さんの生活しやすい方で良いと思う。その理由は、無理して日本の作法で過ごしていやなイメージになったり、つかれたりしたら大変だし、日本の作法で過ごせば、李さんにとって、勉強になるし、韓国の作法だったら、私たちが勉強になる。</p> <p>でも、どちらかといえば、日本の作法で、生活した方が、李さんは日本に勉強しに来たのだから、そっちの方がいいけど無理する必要はない。</p> <p>○考えを発表し合う。</p> <p>【発言】 上のノートの内容を読む。</p>	<p>○李さんの立場に立って、また、このとき既に、自分が外国に行ったらどのように過ごしたいか、と言うことも、念頭に置いて考えている。「社会事象にかかわろうとする」一つの姿といえよう。</p>

○自分が韓国の李さんの家にホームステイすることになったら、どのように過ごさせてほしいか。

ノート

やっぱり、自分の好きな方でやらせてもらいたい。でも、知りたいときに、韓国のマナーも教えてもらいたいと思う。

第2小小単元＝「自分がホームステイしたい国って、どんな国？」

主な学習活動

韓国（朝鮮）のほかに、日本とつながりの深い国々について、国別のグループを作り、衣・食・住を中心とした、人々の生活の様子について調べる計画を立てる。

学習計画表

・ホームステイしたい国＝イギリス
 ・選んだ理由＝おだやかそうな感じがする。
 ずっと会っていない友人が住んでいるところはどこなところ？
 ・調べること＝「衣食住」と書いた後＝で消して、「学校の様子」と直す。
 ・調べる方法・資料＝MOFAX, 写真, 本
 ・まとめ方＝模造紙, ガイドブック風

8

発言

Mさん（イギリスにいた帰国児童）に聞こうと思う。

自己評価カード（学習したこと）

アメリカかイギリスか迷った。アメリカよりもイギリスのことは知らないで、イギリスにした。

○イギリスに対して自分なりのイメージを持ち確かめようとしている。「問い」まではいかないが、自分なりのこだわりを持っている。

（計画外の1時間。筆者が創造活動で池ノ平の雪国学校に出かける間、6年生は自習）

主な学習活動

イ・ヒョンヨンさんに、授業に来てくださった、お礼の手紙を書く。

手紙

アンニョンハセヨ。この前は、韓国のことについていろいろと教えて下さって、本当にありがとうございました。韓国は、日本ととても近いのに、私は韓国のことを何も分かっていませんでしたが、李さんにはいろんな話をしていただき、韓国についてだいぶ分かりました。

日本と韓国は聞いた感じだと、すごくちがうように思えるけど、あとから深く考えてみるとけっこう似ている。ということが分かりました。

たとえば、おはしを使って食事する。という事。主食がごはんだという事、障子が家にあるという事、などほかにもいろいろな共通点がありました。

1番おもしろいなあと思ったのは、チョコゴリの

○共通点と相違点の両方を指摘しているが、むしろ日本と韓国の共通点に重きが置かれている。食事のことを話題にしたときには、相違点にばかり目がいったことから比べると大きな変化と言って良い。

ここから韓国を、好意的に受け止めている考えられる。李さんという、一人間とのかかわり方が、大きく作用したと考えられる。

9

	<p>すそをのばしていくと着物になるという事でした。このことが分かったとき、<u>やっぱり韓国と日本は共通点がたくさんあるなあ。</u>とあらためて思いました。</p> <p><u>韓国は日本よりマナーが厳しい</u>とと思いました。李さん、本当にどうもありがとうございました。それでは、アンニョンヒイカセヨ。そういえば、<u>このチマ・チョゴリの形も日本の神社のみこさんの服に似ている。</u></p> <p>バジ・チョゴリもチマ・チョゴリに負けずにカラフル！</p> <p>自己評価カード 2枚かけた！</p>	
10	<p>——— 主な学習活動 ———</p> <p>計画にしたがって日本と関係の深い国について調べ、日本の生活との違いや共通点について作品にまとめることができる。</p> <p>当初は学校について調べる予定だったが、資料が見つからず、2回目から「1週間の食事」にテーマを変える。</p> <p>作品</p> <p>【イギリスについて調べて思ったこと】</p> <p>イギリスは、食事や紅茶などを見ても、伝統的な感じがした。日本ではイギリスの紅茶のように、必ずいつでも決まった時間に食べるというものはないので、性格の違いからくる感じがしておもしろい。</p> <p>自己評価カード</p> <p>イギリス人＝紅茶と言っても良い。</p>	<p>○日本とイギリスの相違点についても言及している。イギリス人はイギリス人の性格であると、認めている感じがする。</p>
11	<p>—実際には、12・13・14時間目を1時間で消化した (卒業式の練習が急遽入る) ので、セッションが不十分である—</p> <p>——— 主な学習活動 ———</p> <p>ポスターセッションで、それぞれの国々の独自性や日本との共通性について、調べたことを発表しあう。</p> <p>○T 児のイギリスの報告を聞く</p> <p>ノート パスタは乾パスタと生パスタがあって、生パスタの方がおいしい。</p> <p>○G 児のドイツの報告を聞く</p> <p>ノート</p> <p>共通点…衣服⇒民族衣装はめったに着ない。 相違点…日常的に着る衣装がない（日本で言う浴衣や下駄）平らな土地とおだやかな丘でできているので落ち着く。おかずはソーセージ、ジャガイモ料理は必ずと言っていいほど出る。それぞれ、味は違うので、あきない。朝食には麦パンが欠か</p>	<p>○日本との共通点・相違点を指摘している。</p> <p>○日独英の三国を比べている。</p>

<p>せない。</p> <p>自己評価カード (学習したこと) 両方とも (英独), 伝統的でおだやかな感じがした。味は違うので, あきない。朝食には麦パンが欠かせない。</p> <p>自己評価カード (学習したこと) 両方とも (英独), 伝統的でおだやかな感じがした。</p>	
<p>——— 主な学習活動 ———</p> <p>自分がホームステイしたい国で, 自分はどのように, 接してもらいたいかを, 考え, 話し合う。</p>	
<p>○課題について, 自分の考えをノートに書く。</p> <p>ノート 食事はその国のものを食べたいけれど, <u>マナーは日本のマナーで食べさせてほしい。理由, 自分の好きな方法で食べた方が楽し, 楽しい。日本のマナーだと慣れている (はずだ) から, 自然になってしまうかもしれない。でもせっかくホームステイしたんだから, その国のマナーも教えてもらう。</u></p> <p>自己評価カード (学習したこと) 自分だったら, 好きな風にさせてもらいたい。</p>	<p>○ホームステイをしたから, 外国の文化を (食事作法) 知りたい, という問題と, 実際の生活をきちんと分けて考えている。第7時の主張と, ほぼ一致している。今度は, 自分がホームステイする側になり, より考えを鮮明にしている。</p>

(3) 補説 韓国の食事や食事作法について調べる学習 (本実践では第5時にあたる)

これまでの記録は平成9年度の記録である。食事の学習については, 以下の平成8年度の記録には, 板書記録も残っている。K児の記録があまりないので, これで補う。なお, Pさんとは, 実践事例Ⅲに登場する朴善姫さんのことである。

はじめに, 朝鮮食料品店で購入した金属食器に, キムチほか, 韓国風の料理を盛り, 二人の児童に普段通りに食べさせた。その様子を, 皆で観察し気づいたことを発表しあった。次に, Pさんが, 韓国の食事作法について説明したり, 児童からの質問に答えたりした。次に, 韓国の食事について分かったことを, 板書もとにして, それぞれに, 日本との共通点・相違点に分類させた (下の板書内容)。

「キムチは韓国の食事には欠かせない」, 「秀吉の時代までは韓国でも, 唐辛子抜きの白菜漬を食べていた」, 「奈良時代までは, 日本人の食事作法は韓国式だった」, などのことを聞き, 子どもたちは, 新しい発見に驚きの連続であった。

(●は日本との共通点, ×は相違点, ▲はどちらとも言えないと子どもたちが判断したこと)

<p>——— 板書から ———</p>	
<p>×はしの置き方が縦</p>	<p>▲お父さんが帰るまで待ってお父さんが食べ始めてから皆が食べる</p>
<p>×茶わんに手をそえない</p>	<p>×汁とごはんはスプーンで食べる</p>
<p>●週末にはレストランがいっぱいになる。</p>	
<p>×ごはんのおこげでお茶をつくり,</p>	<p>●お茶わんに入れて飲む。そうしないとお母さんが早く死ぬ。</p>
<p>→ごはんが茶わんにこびりつく。お母さんの仕事が増えるから</p>	
<p>●茶わんは口に付けない</p>	<p>●洋食ならナイフやフォークも使う</p>
<p>●おしゃべりしない</p>	<p>●皿の底から取らない</p>
<p>●朝は軽く, 夜はごうかで, 量も多い。</p>	
<p>●「いただきます。ごちそうさま」と言う</p>	

Ⅷ 成果と課題

1 研究のねらいと各実践のポイント

研究のねらいにそって評価をするために、それぞれの実践がもっていた学習材のタイプを明らかにしておく。

学習材の特徴	人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材					子ども相互の学びあいが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材		
	①人間の生き方(思い・願い)が見える学習材	②人間の働きが見える学習材	③人と人とのかかわりが見える学習材	④社会の一員であることを自覚させる学習材	⑤自分の生活を見つめ直すことができる学習材	①様々な立場からの多様なとらえ方ができる学習材	②葛藤や対立があり、論点が明確な学習材	③社会に参加すること、かわることへの意欲がわいてくる学習材
実践事例1		○	○		○			
実践事例2	○	○	○				○	○
実践事例3	○	○	○	○		○	○	○
実践事例4	○		○	○	○	○	○	

次に、それぞれの実践を通して、どのような「自ら社会事象にかかわろうとする」姿が見えてきたのかを明らかにする。

社会事象にかかわろうとする姿	資料から見える範囲で社会事象とかかわろうとする	地域社会で学習活動を展開して、社会事象にかかわろうとする	自分の生活を見つめ直す	社会を見る目が育つ	自分なりの合理的な意思決定をしようとする	社会をよりよくしようという自覚をもとうとする	社会の一員であるという自覚をもとうとする	自分なりの方法で社会に参加しようとする
実践事例1	○		○	○				
実践事例2	○	○			○			○
実践事例3	○		○		○		○	○
実践事例4	○		○		○			○

では、上のような「社会事象にかかわろうとする」態度は、どのような学習活動を組み込むことによって、育まれたのだろうか。

学習活動 活動実践 事例番号	○交流・直接対話型	○課題選択型	○シミュレーション型	○発信型
実践事例1		○		
実践事例2		○	○	
実践事例3	○	○	○	○
実践事例4	○	○	○	

2 「社会事象にかかわろうとする」ことと「学習活動の工夫」との関連

(1) 学習材などの資料から見える範囲で「社会事象にかかわろうとする」こと段階。言い換えれば「不思議だな」、「もっと知りたいな」という段階。

この段階については、実践事例1～4で、子どもが追求意欲をもつて学習に取り組んでいる。単純に言ってしまうと、子どもが興味をもてるような、人物との出会いができるように工夫をしている訳である。

たとえば、**実践事例1**では、歴史的な事象との出会いの段階では、学習材との出会い方の選択の幅を広げておいた。劇や舞踊に興味のある子は、歌舞伎や浄瑠璃を選び、読書好きな子は浮世草子を選択できるようにである。A児は、読書が好きで浮世草子を選択することができ、この点でA児のよさが生かされた。また、この学年の子どもたちは、5年生の夏休みの造形科で、「画家を調べよう」という課題で学習したことがあった。そのときに多くの児童が、浮世絵も含めて画家について調べているので、比較的関心が高い内容であった。このように、子どもたちの興味関心の実態や先行経験を探っておいたことが、この実践では子どもが意欲的に追求した要因となっている。また、言い換えれば、子どもの興味関心に応じた課題選択型の学習が成立する学習内容でもあった。

(2) 課題を解決する調査の段階で、教室から飛び出し地域社会で学習活動を展開して、「社会事象にかかわろうとする」段階。

実践事例2だけが該当する。これは、6年生の実践であるから仕方がないといえよう。今後も、地域社会をフィールドにするのが、3・4年生だけにならないように、5・6年生の社会科学習でも、地域社会を学習の場にしていきたい。

今回のフィールドワークでは、

- C1：「戦わずに、新しい時代はできなかったのか？」
 C2：「なぜ、この人たちは戦ったのか（なぜ、彰義隊の人たちは西郷隆盛をきらったのか）」
 C3：「彰義隊（徳川15代将軍慶喜の部下）と西郷隆盛たちの関係はどうなっているの？」
 C4：「なぜ鹿児島の人である、西郷さんの像が、上野に建てられているのだろう？」

と、ある程度の、「問い」を生み出すことができた地域調査となった。さらに、地域の歴史遺産を保存する人や、博物館の学芸員の方々とのかかわりが見えてくると、「人の生き方に学」んだり、「社会事象にかかわろう」としたりする姿が見えてくるようにしていけるだろう。

(3) 友達と共に学ぶこと自体が、「社会事象にかかわろうとする」第一歩としてとらえ、子ども相互の学び合いを取り入れた学習活動を展開する。

実践事例の中で、友達同士の学び合いがなかった事例はない。友達と共に学ぶことを、「社会事象にかかわろうとする」第一歩にするのは、あまりに自明なことである。

子どもの変容を、どの実践の中でも詳細に報告しているので、これ以上は述べなくてもいいであろう。

(4) 自分を取り巻く「社会事象にかかわろうとする」態度を涵養し、意識化を図る契機ととらえる段階。以下のような子どもの姿が考えられる。

①自分の生活を見つめ直す。

実践事例1では、次のような子どもの姿が見られた。この事例の学習材の特性として、子どもたち自身が葛藤する場面はない。しかし、児童のまとめには、次のように自分自身を振り返って「自分を見つめ直」し、当時の文化を楽しんだ町人たちと現在の自分の共通点を探ろうとする目（芽）は育ちつつある。例えば、次の子どもたちのまとめの文章にその様子がうかがえる。

たぶんこのころストレスなんかなかったんだろうけれど、もし、今の時代との立場を考えると、私にとってのバレエのような気がしてきた。毎日、勉強勉強と言われて、ストレスがたまっていて、きげんが悪くても、バレエを見ると心が落ちつくっていうか、なんか、言葉では言えないけれど、心を動かす何かがある。だから昔の人を、同じように考えてみると、（だれでも、楽しめる、文化として）盛んになっていったのではないか。この文化を、盛んにしていった人も、自分の作品で、人々が楽しんでくれるので、心が落ち着いた(?)のかな……？

広まっていった理由は、おそらく戦いが少なくなり、武士ではなく町人が力を持ち金があまったため、浮世絵師や歌舞伎・浄瑠璃を見たり買ったりする余裕が生まれ、ほくがミニ四駆にはまっているように、たまたま見たら楽しかったのだと思うが、何よりも大きな理由は、町人の願いを芝居の中でかなえてくれる、という点だと思うのだが……。

学んだ社会的な事象から、自分自身を見つめ直すことができれば、歴史上のことといえども他人事でなくなり、社会事象にかかわろうとするその端緒になる。

実践事例3では、B児は、朴善姫^{パクセンヒ}さんからきた返事の手紙を、韓国ではなく、もっとも身近な異文化—友達A児に向けてメッセージを書いている。当時A児は、学級の仲間から、そのわがままな行動について批判されているところだったのである。韓国という外国について学んだことを、自分の生活に投影しながら、自分を振り返っていく姿が、この実践でも見られた。当初から、子どもがこのような姿を望んで学習をおこなったわけではないが、日本と朝鮮（韓国）という両国間の関係が、自分と友達の間柄のように置き換えて感じた子どもがいたという一事例である。

実践事例4では、家族のあり方について、日本では失われつつある姿が韓国にはいまだに健在である姿に驚いている。留学生李さんの、「父親を大切にするのは当たり前のこと。どうして日本人はそんな当たり前のことできないのですか？」というお叱りが、一番心に響いたようである。K児は次のように書いている。

いろいろと韓国の文化について分かったのですごく楽しかった。1番びっくりしたのは、やっぱりお父さんの事で、韓国ではお父さんがすごく大事に思われているんだ、という事がよく分かった。

このように心に響いたのは、韓国の方との、交流や直接対話といった学習活動があったからに他ならない。

②社会を見る目が育つ。

社会を見る目が育つとは、社会的な「見方や考え方」が育ってくることである。

たとえば、**実践事例1**では、

S児「例えば、近松門左衛門で言えば、農民とか町の人たち生活とか、心とかを作品に表していたから人気が出てきたっていうことが多い。」

C児「それはね、偉い人たちじゃなくて、たくさんいる農民とか町人とかの心をつかんだ人が勝ち。だから写楽も広がった。」

A 児「C 君と同じ。庶民の方が絶対数が多いから、庶民や農民の心をつかんだ方が勝ち。」という子どもの会話のやりとりには、江戸時代の社会について学びながら、今の社会に目を向けている姿が見て取れる。また、逆に今の社会を見る目で、江戸の社会を見ているとも言える。

③自分なりの合理的な意思決定をしようとする。

実践事例 2では、征韓論争の追体験的な活動を通して、明治初期の日本にとって、最優先すべき課題は何かを、調べたことをもとに、論理的に考え、政策のランキングをおこなった。この学習活動では、征韓論争をシミュレーション的におこなったので、臨場感も高まり、話し合いも、緊迫した雰囲気、真剣におこなわれた。

実践事例 3では、雨森芳洲と新井白石の対朝鮮外交を巡る考え方の違いを、資料から読み取り、自分が、どちらの人物を支持するのかといった形式でおこなった。なかには、二者択一ではなく、両者の長所を取り入れて、よりよい考えにしていこうとする子どももいた。

実践事例 4は、「⑥自分なりの方法で社会に参加しようとする」を参照して欲しい。

④社会をよりよくしようという自覚をもとうとする。

該当する実践事例がなかった。かえって、地域社会を学習のフィールドとする 3・4 年生の実践の方が、このような姿が見えやすかもしれない。しかし、公民的資質の基礎を養う社会科の学習で、この段階の「社会事象へのかかわり方」が見えないのは、問題点である。

再度、「社会事象にかかわろうとする」姿について、考察を深めたい。

⑤社会の一員であるという自覚をもとうとする。

実践事例 3では、「日本は朝鮮から学ぶことがある。韓国、日本に優しくしてくれた。明治時代に、朝鮮を日本と同じ立場で考えていたら、あんなことはしなかった思う」とか、「昔、朝鮮は日本に対して親切にしてくれたのだから、日本は、そういう姿勢を学ばなくてはいけないと思う」という考え方は、両者は対等であるということを示している。このような意識をもつに至った理由に、韓国人・朴善姫さんとの「交流・直接対話」によって、伝えたり、質問をしたりすることや、金大中大統領に手紙を書いて、自分たちの思いを「発信」しようとする活動を組み込んだことがあげられよう。次の⑥と密接で、「社会に参加できる」、「人とかかわれる」という意識があつてはじめて、社会の一員として自覚や意識というものが芽生えてくると考えられる。

⑥自分なりの方法で社会に参加しようとする。

実践事例 3では、自分たちが学んできたことを、韓国人・朴善姫さんとの「交流・直接対話」によって、伝えたり、質問をしたりすることや、金大中大統領に手紙を書いて、自分たちの思いを「発信」しようとするを通して、社会にかかわっていこうとする姿がうかがえる。伝えた内容にも、「これからは、自分の国だけのことを考えず、他国のことも考えよう!」というように、相手意識をもって、国と国の関係について考えようとしている。

実践事例 4では、学習問題を「自分の家に李さん（いわゆる一般の韓国人ではなく、親しくなった李さん）が、ホームステイしたとしたら、どのように生活してもらうか」と、「自分が李さん家にホームステイしたら、どのように食事をさせてほしいか」といったように、立場を逆転させることで、多面的な思考を促すことができた。

しかも、親しくなってきた李さんの目前で、「李さんが自分の家にホームステイをしたら、どのように食事をしてもらうか」というテーマで、討論する活動は、相手の気持ちを考えて、外国の人とかかわろうとする契機となり、自分なりの方法で社会に参加しようとする意識につながっていったと考える。この社会事象とのかかわりかたは、上の、「③自分なりの合理的な意思決定をしようとする」こととの関連が深い。また、李さんとの「交流・直接対話」という活動を通じたからこそできたのである。

3 成果と課題

(1) 成果

この研究の成果として明らかになってきたのは、次のようなことである。

「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」や「子ども相互の学びあいが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」を開発し、交流や直接対話、課題選択、シミュレーション、発信などの学習活動を組み合わせて、活用することによって、子どもたちは、「社会にかかわろうとする」態度を身につけていくことができる。

(2) 課題

- ① 「社会にかかわろうとする」段階の定義の仕方が不十分であった。「社会をよりよくしようという自覚ををもとうとする」という段階は今回の今回の実践では、見あたらなかった。
- ② また、小学生の段階で、「社会にかかわろうとする」姿とは、しかも社会科の学習を通して求められるものはどの程度なのであろうか。総合的な学習が始まろうとする現在、さらに明確にしておいた方がいいと考える。
- ③ 研究主題の「生き方」と「社会にかかわろうとする」の関連が追及できなかった。
- ④ 「人間が社会へ働きかける姿や社会を創り上げる姿を題材とした学習材」や「子ども相互の学びあいが深まるなかで、自分なりの意思決定ができる学習材」と、交流や直接対話、課題選択、シミュレーション、発信などの学習活動のよりよい組み合わせかたはあるのだろうか。という具合に、全体的に理論的に曖昧な部分が多い。

補 註

I はじめに

- (1) この研究主題は、お茶の水女子大学附属小学校—社会部会が、平成8年（1996年）より研究を始めた研究主題に基づいている。

ちなみに、社会科部の研究主題は「自ら社会事象にかかわろうとする子どもを育てる」である。なお、お茶の水女子大学附属小学校—第60回教育実際指導研究会発表要項『開かれた心をつくる—3年次—1998年』P. 28～29、及び、同第61回教育実際指導研究会発表要項『開かれた心をつくる—4年次—1998年10月』P. 26～27を参照のこと。

- (2) 研究主題を設定するときから、迷ったことがある。それは、「社会にかかわろうとする」のか「社会事象にかかわろうとする」のかという問題である。

最近では、直接子ども自身が、地域社会で地域清掃に代表されるようなボランティア活動や、まちづくり計画子ども会議など、直接社会にかかわる実践が多くなってきている。私も、このような実践に大きな意味を見いだすが、現段階では、次のように考える。

子どもたちは社会の構成者であるが、現実の社会を創り出しているのは、いわゆる大人たちである。子どもたちは、その大人が創り出した社会、つまり社会事象に日々かかわって生きているのである。だから、ここでは、直接社会にかかわることを至上命題とはせず、社会にかかわりたいという意識をもつこと、こんな社会にしたいなあという自分なりの考えをもつことができれば十分であるという考えに立脚している。それが、「社会にかかわろうとする」ではなく、「社会事象にかかわろうとする」と表記した所以である。

- (3) 北俊夫『「生きる力」を育てる社会科授業』P. 26～30 明治図書 1996年
- (4) 前掲書『「生きる力」を育てる社会科授業』P. 34～35
- (5) 藤井千春『問題解決学習で「生きる力」を育てる』P. 92～93 明治図書 1997年
- (6) 『共に学び、共に生きる子どもが育つ社会科学習—第52号—』社会科教育連盟 1998年
- (7) 前掲書『共に学び、共に生きる子どもが育つ社会科学習—第52号—』P. 3～4
- (8) 筆者も社会科教育連盟の会員で、すでにこの研究主題に関連して実践提案をしている。前掲『共に

学び、共に生きる子どもが育つ社会科学学習—第52号—』P.62参照。本稿実践事例—3がこれに当たる。

- (9) 前掲書『問題解決学習で「生きる力」を育てる』P.96

II 研究の構想

- (1) 第61回教育実践指導研究会発表要項『開かれた心をつくる—4年次—1998年10月』P.8~9を参照。同様に、本校社会科部会の受け止め方は、同書P.27。

III 第6学年の社会科年間学習計画について

- (1) この学習計画表を作成している初期の段階では、学習指導要領の配列順に、『歴史単元』—『政治単元』—『国際単元』と、構成していた。特に、『歴史単元』の最終小単元「日本と朝鮮半島の交流の歴史」で「雨森芳洲と朝鮮通信使」を扱うことによって、『歴史単元』と『国際単元』で韓国(朝鮮)を統一的に扱いたいというのが、本稿者のかねてからの願いであった。お茶の水女子大学助教授・駒込武氏に、この学習計画表を見ていただいたところ、『歴史単元』—『政治単元』—『国際単元』という配列では、韓国を扱った単元が切れてしまうので、思い切って、『歴史単元』—『国際単元』—『政治単元』という配列にしてしまった方が、子どもの思考にもあっているのではないかと、ご指摘をいただき、修正を加えた。後に、本社会科年間学習計画を、平成10(1998)年10月29日の公開研究発表会の社会科分科会で配布した。

IV 実践事例1「江戸時代の人々の楽しみ」の概要

- (1) この実践は、1996年(平成8年)11月16日社会科教育連盟11月例会において報告したものを、加筆補正したものである。また、社会科教育連盟平成9年度研究紀要にも研究成果の一部を報告している。
- (2) 白井忠雄氏は、「文化史は小学校の歴史学習では取り上げる必要はない。とりわけ、暗記本位としか思えない内容のものは、小学校段階では全く不要」であって、「……まして、近松門左衛門や本居宣長などは、その文化史的な価値を理解することなど小学生では不可能である」という「文化史不要」論を展開している。(「知識理解型の内容の撤廃を!」『社会科教育』No.439 1997年5月号 P.94)全く同感である。小学校社会科の歴史的領域では、所謂「文化史的な価値」の理解に重点を置いた「文化史」を学ぶのではなく、「人間の働き」や「人と人のかかわり」を学ぶことを通して、「自分の生活を見つめ直そうとする」ことこそを重点ととらえていくことが大切である。
- (3) 本実践は、平成8年度に、社会科教育連盟「自分のよさを発揮して学ぶ子どもが育つ社会科授業」の研究主題の下、実践した学習である。特に「自分のよさ」を、教師が見つけていくために、発言やノートの記録にとどまらず、つぶやきや、行動、友達とのかかわりなど様々な視点で情報を収集し、分析を加えた。

V 実践事例2「明治の新しい世の中をつくった人々—大久保利通と西郷隆盛—」の概要

- (1) 例えば、浅野正道氏は、「開国から明治の新しい世の中へ」(『新しい授業の創造 平成8年度 授業実践シリーズ2』東京都小学校社会科研究会 平成9年)で、人物関係図をつくる学習を展開している。

また、目賀田八郎編著『誰にでもできる体験的な社会科の学習 6年』(文溪堂 1994年) P.106~107、および、同書の学習シート集として発売された「トウデイズシート」(文溪堂 1994年) §15-3には、その学習展開案が示してある。

- (2) 猪飼隆明『西郷隆盛—西南戦争への道—』(岩波書店 1992年) 終章「国家構想の交錯—日本近代史上の西郷」を参照。

猪飼氏はP.224で、「……そもそも、西郷に国家構想といえるものがあつたかどうか。難問であるが、天皇が直接政治に関わる天皇親政(=専制)を理想的国家形態にと考えていたというのは、ほぼ、動かせないと思う。同時に西郷は、立憲制が、それなりに機能することも考慮していたはずである……(中略)……西郷の理想としていたのは、仁政主義であり、徳治主義であるとはよくいわれることである。天皇が自ら政治を行うことで、初めてそれは実現する、それは国会を開いて国民の声が政府にとどくことと矛盾しない、このようなかたちで西郷自身は納得していたのではなかったのか」と述べている。

(3)大久保利通, 征韓論争に関する参考文献は以下の通り。

○毛利敏彦『大久保利通 維新前夜の群像⑤』1969年 中央公論社 ○猪飼, 前掲書

○佐々木克『大久保利通と明治維新』1998年 吉川弘文館 他

(4) この指摘は, お茶の水女子大学教授で, 博物館学を専攻している鷹野光行氏のご教示によるものである。「征韓論争」を扱った授業をしたいことと, 上野の山で西郷隆盛像と彰義隊の墓を見学したい旨, 相談したところ, 「ならば, 東京国立博物館は, 大久保利通が現在に残した文化遺産ですから, 見学に行ってみよう」と勧めてくれた。また, 『東京国立博物館 目で見ると120年』(東京国立博物館 平成4年) P.107も参照。

(5) 鹿児島市のホームページにある, 「鹿児島市 City Guide」を参照していただきたい。<http://iinet.chukaku.pref.kagoshima.jp/kagoshima/kanko/3h/3h-2.html> に, 「市内周遊観光案内」がある。このページには, 西郷隆盛と大久保利通の銅像の写真が掲載されている。同市観光課に申し込めば, 両銅像のポジフィルムを貸し出しもしてくれる。

VI 実践事例3 「日本と朝鮮半島の交流の歴史」の概要

(1) 「朝鮮半島」について。本来ならば, 「大韓民国」, 「朝鮮民主主義人民共和国」, 「李氏朝鮮」など, 国家名をあげるのが適切と考える。しかし, 今回の学習では, 題材とする地域が朝鮮半島全体に及んでいるために, 国家名をあげるよりは, 地域を示す「朝鮮半島」という言葉を用いた。なお, 本指導案では, 「日本と朝鮮半島の交流の歴史」は「日朝交流の歴史」と略記, 「日本と朝鮮半島の関係」は「日朝関係」と略記した。また, 必要に応じて「大韓民国」と国家名も使っている。最初にこの点について断っておきたい。

なお, 本実践は東京都小学校社会科研究会の6年部会で研究実践したものである。平成10年11月26日に, 本校で公開授業を行った。また, 実践記録の一部を, 『新しい授業の創造平成10年度 授業実践シリーズ4』(東京都小学校社会科研究会 平成11年) に, 掲載した (P.74~78)。

(2) 本単元の資料を作成する際に用いた文献資料は以下の通り。

○Lee Jinhee『新版 日本文化と朝鮮』1995年 NHK ブックス

○雨森芳洲庵『雨森芳洲』

○『雨森芳洲』VHSビデオ (株式会社愛知商事作成)

○上垣外憲一『雨森芳洲 享保元禄の国際人』1989年 中央公論社 他

VII 実践事例4 「日本に一番近い国 大韓民国」の概要

(1) 本実践は, お茶の水女子大学附属小学校-第59回教育実際指導研究会で公開したのが最初である。その実践と概要と資料入手先については, 『学校図書館の活用実践事例集』(第一法規-1997年) 所収, 拙稿「児童の能動的な学習活動による『調べ学習』の展開」を参照。

なお翌1998年, 第60回教育実際指導研究会では, 内容を一部変更して, 再度公開した。変更箇所は, 「もしも韓国人が自分の家にホームステイしたら」, 「もしも私が〇〇国でホームステイしたら」という, シミュレーション的な学習活動を展開した点にある。この変更点を加えた実践は, 第52回社会科教育連盟大会 (1998年6月19日) で報告を行っている。発表要旨は, 『共に学び, 共に生きる子どもが育つ社会科学習-52号-』(社会科学教育連盟) P.62参照。なお, 指導案は, お茶の水女子大学附属小学校-第60回教育実際指導研究会発表要項『開かれた心をつくる-3年次-1998年』P.226に掲載している。

(2) 本校では, 5年生と6年生では, 帰国児童15名(定員)と一般児童15人が一緒になる学級を編成する試みを, 平成8年度より行っている。

(3) 「二重構造」については, 目賀田八郎氏編著『見方・考え方を育てる 社会科学習の新展開3・4年』, 『同6年』(東洋館出版社 平成3年) 及び, 同氏編著『66時間で育てる歴史の見方・考え方』(東京書籍 昭和62年) を参照。

同様の考え方は, 梶井貢氏『外国とのかかわり』を調べる指導のポイント』(北俊夫氏編『調べ学習 社会科の授業づくり⑧ 外国とのかかわりを調べる授業』国土社1997年所収) にも見られる。

(4) 新貝朗氏「我が国とのかかわりの深い国の教材分析」(社会科学勉強会会報『逆転』Vol.35 No.9 平

人の生き方に学び、自ら社会事象にかかわろうとする子どもを育てる社会科学習

成7年)参照。新貝氏は、同小論文で、アメリカ・オーストラリア・中国・サウジアラビアを取り上げるべき理由を、次のように説明している。

アメリカ合衆国・・・貿易面でのつながり。大規模な工業生産。多くの人種が住んでいる。

オーストラリア・・・日本とは季節が反対。広い国土を生かした大規模農業。貿易面。

中国・・・古くから歴史的なつながりが深い。社会主義国という特色。

サウジアラビア・・・貿易を通じたつながり。イスラム教によって、生活が大きな影響を受けるとい
う日本にはない特徴をもつ。

- (5) 1997年度は、学附属小学校の6年生の指導計画に、単元名「長く続いた戦争と人々の暮らし」が存在している。この単元における、観察対象児童・K児の記録については、前掲『開かれた心をつくる-3年次-1998年』P.32~33を参照して欲しい。

附記

以上の実践は、次の方々のご協力によって、おこなうことができた。

目賀田八郎先生はじめ「社会科勉強会」の先生方。

廣嶋憲一郎先生はじめ「社会科教育連盟」6年部会の先生方。

内田正子先生はじめ「東京都小学校社会科研究会」6年部会の先生方。

本校社会科部、黒部善之先生、遠藤修一郎先生。

本学教授鷹野光行先生、同助教授駒込武先生、同助手朴善^{ハクセンヒ}姫先生。

記して、感謝いたします。